

なぜ？ どうして?? 世界を騒がす仰天ニュース「イスラム」ココがわからない!!

中東問題研究会

なぜ？ どうして?? 世界を騒がす仰天ニュース「イスラム」ココがわからない!!

[はじめに](#)

[プロローグ 本当にイスラムは危険な存在なのか？](#)

[【01】](#)

世界各地に広がるテロの脅威 日本人も無関心ではいられない!!

[【02】](#)

欧米諸国との複雑で微妙な関係 1000年を経ても消えぬ〈遺恨〉

[【03】](#)

資源エネルギーの利権をめぐる争い 勝算はイスラム圏にアリ？

[【Column 1】](#)

イスラムにおける男女交際

[第1章 よくわからない!? 謎多きイスラムの歴史と今を知る](#)

[【01】](#)

イスラム教の創始者——。「預言者」のムハンマドとは何者？

[【02】](#)

『コーラン』の教えに沿った「六信五行」という生活上の決まり事

[【03】](#)

アラブ人主体のイスラム帝国から多民族イスラム教信徒の帝国へ

[【04】](#)

イスラム帝国形成の歴史と〈六つ目の行〉とされる「ジハード」

[【05】](#)

西欧化か、原点回帰か——。時代とともに二極化するイスラム社会

[【06】](#)

「預言者」のムハンマドの死後、二つに分裂したイスラム教

[【07】](#)

世界史の授業でも習った「コーランか、剣か」の本当の意味

[【08】](#)

信じる神は同じなのに、衝突を繰り返す三つの宗教

[【09】](#)

日本人の9割が誤解している「アラブ」と「中東」の違い

[【10】](#)

将来的には世界最大数に!? 増え続けるイスラム教徒

[【11】](#)

世界で一番ムスリムが多いのは中東ではなくアジア圏

[【Column 2】](#)

イスラムの天国と地獄

[第2章 解決の糸口はどこに？ 欧米諸国と中東の複雑な関係](#)

[【01】](#)

中東地域でひときわ異彩を放つ「イラン」という国家

[【02】](#)

「脱アメリカ国家」を唱えたホメイニー師とイラン革命

[【03】](#)

国境線をめぐる領土争いとクウェート侵攻を開始した「イラク」

[【04】](#)

東西冷戦時代を象徴するソ連軍の「アフガニスタン」への侵攻

[【05】](#)

「タリバン」誕生の裏で暗躍する「パキスタン」の思惑

[【06】](#)

中東問題の引き金はユダヤ人とアラブ人の土地争い

[【07】](#)

中東地域が戦場と化した要因は「イスラエル」の建国

[【08】](#)

「パレスチナ自治区」を二分した指導者・アラファト議長之死

[【09】](#)

『コーラン』の解釈の違い――。すべてはココから始まっている

[【Column 3】](#)

イスラム教でのタブー

[第3章「アラブの春」でも変わらない.....イスラム世界の実情](#)

[【01】](#)

フセインの独裁政権が崩壊!!「イラク」に平和が訪れるはずだった

[【02】](#)

「ジャスミン革命」を皮切りにアラブ諸国に伝播した民主化運動

[【03】](#)

武力に頼らずとも実現できた独裁政権の崩壊

[【04】](#)

民族意識が強い中東地域で国民が本当に望んだ政治とは？

[【05】](#)

「アラブの春」は何だったのか!? 軍事政権に再び戻った「エジプト」

[【06】](#)

ソ連撤退後の「アフガニスタン」はテロリストたちの王国!?

[【07】](#)

希望の光はさし込むのか？ 迷走し続ける「アフガニスタン」

[【08】](#)

世界を恐怖に陥れる過激派組織「^{アイシル} I S I L」とはいったい!?

[【Column 4】](#)

かつては「教育先進圏」だったイスラム圏

[第4章 争いが絶えない中東地域に平和は訪れるのか？](#)

[【01】](#)

世界一難解な問題を生んだイギリスの超ワガママな外交政策

[【02】](#)

国家のトップによる宗派対立が「イラン」「イラク」に暗い影を落とす

[【03】](#)

未だ叶わない国家の安定!! 国際社会から孤立する「イラク」

[【04】](#)

アメリカ同時多発テロ事件から飛び火した「イラク」への制裁!!

[【05】](#)

国民が笑顔になる日は訪れるのか？ 未だ内戦が続く「シリア」

[【06】](#)

政局が不安定な「レバノン」。過去のジレンマに悩む「アルジェリア」

[【07】](#)

親日国としても有名な「トルコ」。中東平和のキーマン国になれるか!?

[【Column5】](#)

イスラム教徒の日常

[第5章 世界経済を変える!? 「イスラム金融」とマーケット](#)

[【01】](#)

世界各国から熱い視線！ 超巨大市場「ハラルマーケット」

[【02】](#)

自治体も積極的に動き出す「ハラルツーリズム」という新事業

[【03】](#)

世界経済の中心に躍り出るか!? 「イスラム金融」の実態

[【04】](#)

石油大国が多い中東で原発開発を推進する深刻な実情

[【05】](#)

イスラム圏に新たな問題を生んだ「シェールガス革命」

※現在、「イスラーム」と呼ばれているのが主流になっていますが、本書では馴染み深い「イスラム」で解説しています

編集協力

金谷美紗（公益財団法人中東調査会）

OFFICE-SANGA

装丁

菊池 祐

本文デザイン

タカハシイチエ（it design）

図版

ヒガキユウコ（IRON100℃）

校正

（株）クアドラ

はじめに

これまで私たちの日本は、世界でも例を見ない平和で安全な国という印象がありました。

周辺国との領土問題でいざこざがあっても、話し合いや交渉の場を設けて、あくまで平和的に解決する姿勢を一貫してきました。ゆえに周辺の国からいきなり侵略されることも、争いに巻き込まれることもなく、ましてやテロ事件とは無縁の生活を送っています。

では、世界に目を向けるとどうでしょうか。

民族や宗教・宗派、あるいは資源エネルギーの利権をめぐり、争いが頻発しています。

なかでも、中東地域は顕著です。世界でもっとも解決が難しいといわれるパレスチナ問題を筆頭に、反欧米を掲げる国家、宗派対立による激しい内戦や紛争、長期独裁政権から脱却するための民主化運動……など、未だ平和とはほど遠い実情が、そこにはあります。

そのような緊迫した中東情勢のなか、日本人が「^{アイシル} I S I L（イスラム国）」のイスラム過激派によって拉致され、処刑されるという悲惨な事件が起こりました。彼らは、日本の人道的支援の中止を要請し、「拒めば以後、敵と見なす」と、強迫してきたのです。対して、日本政府は「テロリストには屈しない」と、強固な姿勢を貫きます。

ただし、待っていたのは、日本人が犠牲になるという悲しすぎる結末でした。

これまで私たち日本人の多くは、中東地域で起きている問題や事件等を、他人事のように捉えてきましたが、もはや無関心を決め込むことは危険以外の何ものでもありません!!

今、私たち日本人がやるべきは、中東地域の情勢を知り、その〈核〉的な存在の「イスラム」について、正しい知識を身につけることです。メディアを通じて流される一部のイスラム過激派によるテロ行為から、「イスラムはとても危険な世界」と、思い込んでいるとしたら、それは誤解です! 本来のイスラム世界は、仏教やキリスト教と同じく平和を尊んでいます。

「思い込みや誤解を、まるで真実のように捉えている」——これが、私たち日本人の実情です。

本書は、日本人の多くが持つ思い込みや誤解を正し、本当のイスラム世界を知ってもらうことに尽力しました。まず、プロローグでは、これまでの事件簿を時事的に解説し、「本当にイスラムは危険な存在なのか」について考えています。第1章は、日本人の9割が知らないであろう謎多きイスラムの歴史と今に触れました。続く第2章では、欧米諸国と中東の複雑な関係とその要因を解説しています。第3章と第4章は、混迷する中東情勢や平和への道を模索する中東諸国についてページを割きました。最後の第5章は、日本経済への影響はもちろん、世界経済を席卷する勢いの「イスラム金融」「ハラルマーケット」に触れています。

世界には多くの国があり、そこにはたくさんの宗教や思想が存在します。考え方や捉え方に違いはあっても、平和を願い、共存共栄の道を歩みたい想いは同じではないでしょうか。

本書が1人でも多くの方に読んでいただき、イスラム世界を正しく理解するうえでお役に立てれば幸いです。

中東問題研究会

プロローグ

本当にイスラムは危険な存在なのか？

PICK UP
5

1979.3.26
エジプトのサダト大統領が、
イスラエルと平和条約を締結

1993.2.26

ニューヨークの世界貿易セン
タービル爆破事件

PICK UP
2

2001.9.11
世界貿易センタービルと国防
総省への同時多発テロ事件

世界を震撼させた イスラム絡みの主な事件

イスラムが絡んでいる事件は、中東地域だけで引
き起こされているわけではない。ココ数十年の間
に起きた出来事を、世界地図で見てみよう!!

1991.12.26

アルジェリアで初の複数政党制選挙が実施。イスラム救国戦線(FIS)が圧勝

1994.12.10

第一次チェチェン紛争。エリツィン大統領の命令でロシア連邦軍が侵攻

PICK UP
6

1979.2.11

イラン革命。「イラン・イスラム共和国」が樹立

PICK UP
1

1994.?.?

PICK UP
3

アフガニスタンで「タリバン」が結成される

2003.5.1

米・ブッシュ大統領、イラクでの大規模戦闘の終結を宣言

2003.4.9

イラクの首都・バグダード、アメリカ軍により陥落(サダム・フセイン政権が崩壊)

PICK UP
4

2014.6

「カリフ」を名乗って、「イスラム国」として*国家、樹立を宣言

1996.9

アフガニスタンでは、この頃よりムハンマド・オマル師が率いる「タリバン」がほぼ全土を支配下に治める

日本

①イラン革命

「シーア派」のホメイニー師を指導者として起きた革命。18世紀からイギリスとロシアの支配下にあったイランは第一次大戦後、「パフラヴィー朝」が政権を掌握。第二次大戦後、イラン国内で起こった民族主義運動の後押しを受け首相に就任したモサデクは、石油を国有化したのが、1953年のイランクーデターで失脚。再び主権を握ったパフラヴィー2世は、それまでの立憲君主制から独裁制を復活。クーデターを後押ししたアメリカからの要請に応じる形で「白色革命」といわれる西欧化政策を断行した。

再び始まった海外への石油資源流出、西欧化に反発する国民の声は日増しに高まった。その結果、シーア派の主流派である「十二イマーム派」の最高指導者で、青年時代からイスラム信仰に基づく政治の在り方を説いていたホメイニー師が国民の支持をバックに革命を起こす。「イラン・イスラム共和国」が樹立。

彼の打ち出した政策により、再び石油の国有化が実現され、原油の輸出が停止。このことが1979年に引き起こされた第二次オイルショックの要因となる。

②9・11アメリカ同時多発テロ事件

2001年9月11日にアメリカで発生した自爆テロ事件。実行犯はハイジャックした旅客機で世界貿易センタービルと国防総省に体当たりし、約3,000人の尊い命が犠牲となった。

最初のテロ決行は午前8時46分。ニューヨークの世界貿易センタービル・ツインタワーの北棟にアメリカン航空11便が衝突した。ブッシュ大統領（当時）は第一報を受けた際には航空機事故と捉えていたことを、その後に発表している。

続けて、ツインタワーの南棟、ワシントンの国防総省に次々と旅客機が体当たりしたほか、計4機のすべての乗客・乗員が犠牲となる大惨事となった。

事件直後の調査で、ハイジャック犯がアラビア語で会話していたことや、乗客のクレジットカードの利用履歴などから、テロ組織「アルカーイダ」による犯行と断定。アメリカはウサマ・ビンラディンを首謀者とするメンバーが潜伏しているとされるアフガニスタンのタリバン政権に対して、身柄の引き渡しを要求したが、拒否される。

この事件がアメリカのアフガニスタン侵攻の契機となる。

③「タリバン」の結成

「タリバン」は1979～1988年の長きに渡って続いたソ連のアフガニスタン侵攻終了直後、無政府状態に陥った混乱のなかで誕生したイスラム原理主義組織。実態は不明な点が多い。

ソ連が侵攻するとともに、その支援によってアフガニスタンには共產主義政権が誕生。これを打倒した民兵＝「ムジャーヒディン」たちだったが、やがて分裂による戦闘が勃発。大混乱により無秩序な状態に陥った国を、イスラム教に基づき治安と秩序を回復させるためにタリバンが結成された。

最高指導者のムハンマド・オマル師のもと、当初は20人程度で結成されたが、隣国のパキスタンの強力な支援を受けながら勢力を急速に拡大していく。2001年頃には国内のほとんどを掌握していった。

「アフガニスタンの安定化に寄与する」という期待感から、当初はアメリカも支援していたが、「イスラム原理主義」を基本とする強権的な姿勢のため、国内外からの支持は低下。やがて孤立無縁状態に陥ったタリバンは、9・11のテロ事件を境にアメリカと敵対することに……。

④首都・バグダードの陥落とサダム・フセインの処刑

イラン革命が成功したことによって西欧化の否定、イスラム主義への回帰が中東全域に拡大することを西側諸国は警戒していた。そうした状況下でイラクとイランとの間に対立が生じる。アメリカを含む西側諸国がイラクを積極的に支援したことで、しばらくお互いの間には友好関係が続いた。

イラクのサダム・フセイン大統領は、産油国が連携することで原油価格を上昇させて西側との関係を優位にしようとする目論みで、その意向に応じないクウェートに対して軍隊を派遣。アメリカが友好国であるサウジアラビアの防衛を理由に派兵したことから、第一次湾岸戦争が勃発。このときからイラクとアメリカの対立は明確になる。

2001年9月11日の同時多発テロ事件をきっかけに第二次湾岸戦争が勃発。アメリカは「テロの実行犯が所属している」と断定した「アルカーイダ」とともに、それを支援しているとしてフセイン大統領に対する強硬姿勢を打ち出す。「大量破壊兵器を保持している」という理由からイラクに侵攻。首都・バグダードを陥落させ、フセイン大統領を処刑した。イラクでは独裁政権が崩壊したものの、現在も政局は不安定が続いている。

⑤エジプトのサダト大統領がイスラエルと平和条約締結

エジプトのアンワル・サダト大統領が1979年、アラブ諸国と強い対立関係にあったイスラエルと「エジプト＝イスラエル平和条約」を締結。中東和平における〈大きな一歩〉と称賛され、サダト大統領はイスラエルのベギン首相(当時)とともにノーベル平和賞を受賞した。

サダト大統領は元軍人で、第三次中東戦争でイスラエルに占領されたシナイ半島の奪還に成功。イスラエル軍の不敗神話を崩したが、再びシナイ半島で猛烈な反撃が開始され、エジプトは苦境に陥る。そこでサダト大統領は、アラブ諸国と連携して石油戦略を発動し、親イスラエルの国々に圧力を加えながら、有利な情勢を形成したうえで和平協定を進めた。

サダト大統領は1977年、アラブ首脳初となるイスラエル訪問を果たし、中東におけるイスラエルの存在、占領地の回復を認める政策を提示。翌年、アメリカの仲介で「キャンプ・デービッド合意」に達した。

中東和平への明るい道筋がつけられたかに思えた矢先の1981年10月6日、サダト大統領は一部のイスラム過激派によって暗殺されてしまう。

⑥第一次チェチェン紛争

チェチェン共和国の独立派武装勢力と、それを阻止しようとしたロシアとの間に勃発した紛争が1994～1996年にかけて続いた。

1859年、ロシア帝国によって併合されて以来、チェチェン共和国は、ソビエト連邦ないしロシア連邦の一国として組み込まれていた。ソ連崩壊直前の1991年、チェチェン共和国は独立を宣言したが、ソ連はこれを拒否。

ソ連崩壊後はロシア連邦に組み込まれ、その後も独立が認められることはなかった。

1994年、ロシアのエリツィン大統領はチェチェン独立を阻むべく4万人規模の軍隊を派遣するが、チェチェンの独立派武装勢力がこれに激しく対抗し、第一次チェチェン紛争となった。

チェチェンは16世紀末頃からイスラム教が広まり、「スンニ派」が支配的な宗教となっていた。激しい抵抗を続けた武装勢力の中核は、「ミュリディズム」というチェチェンならではの一派だった。『コーラン』に基づく教えと古くからの民族習慣を混ぜ合わせたともいえる集団であり、戦いは長期戦に及んだ。

01 世界各地に広がるテロの脅威 日本人も無関心ではられない!!

テレビやインターネットで、毎日のように流れる血生臭いニュース。

とりわけ、一部のテロリストによる一般人を巻き込んだ卑劣極まる行為の数々は、世界中を恐怖と悲しみの渦へと陥れています。

世界各地に広がるテロの脅威——。その恐怖は、着々と私たち日本人にも忍び寄っています。〈世界一平和で安全な国〉といわれた日本。その国が今、テロリストたちの標的になっていることは疑いようもない事実なのです。

2人の日本人を人質にとり、身勝手な要求を突きつけ、聞き入れられないとわかって躊躇なく殺害。その様子をインターネットで動画配信した残忍な事件は、多くの日本人の記憶のなかに鮮明に残っていることでしょう。

世界中で頻発するイスラム絡みの事件をニュースで知っても、「私たちには関係のない出来事」と、無関心を決め込む……そんな姿勢は危険です!

では、テロリストたちは「いつ」「どこで」「誰に対して」「どのようなテロ」を実行するのか。これらを事前に予測することは可能なのでしょうか。

悲しいことに、「不可能に等しい」といわざるを得ません。たとえ身近にテロリストが存在しなくとも、彼らの広報活動等に影響を受けた人たちが、いつ共感して暴挙に出るかは、誰にもわからないからです。

裏を返せば、今の世の中で「絶対にテロに巻き込まれない」という保証は、「どこにもない!!」といっても過言ではないでしょう。

◆世界を震撼させる「イスラム過激派」とはいったい?

2001年9月11日に起きたアメリカ同時多発テロ事件。この事件を引き起こしたとされる「アルカーイダ」という組織において、精神的な指導者の立場にいた**ウサマ・ビンラディン** (①) は、パキстанを主な拠点に活動していました。

この人物が、アメリカを筆頭に、国際社会からテロリストとして、危険視されるようになったのは、なぜか……その経緯は後述します。

なお、ビンラディンのように「イスラム原理主義」に基づく過激な思想を信仰し、極端な反米主義、もしくはジハード主義を掲げ、欧米諸国や関係諸国に対してテロ行為を行なっている集団を総称して、「イスラム過激派」と呼んでいます。

イスラム過激派は、前出のアルカーイダをはじめ、^{アイシル}2010年以降に台頭してきた「ISIL (イスラム国)」など、多くの組織が存在し、その活動範囲は世界各地に及んでいます。世界のテロリスト集団は、イスラム過激派だけとは限りません。ただ、2000年以降の14年間だけを注視すると、イスラム過激派が関与したとされるテロ事件が頻繁に起こっているのは、まぎれもない事実です。

◆「イスラム教徒＝過激な思想集団」は大間違い!!

イスラム原理主義とは、「**預言者**」の**ムハンマド** (②) が「イスラム共同体 (ウンマ)」を創設した原初の理想的なイスラムの姿に「回帰」することを主張する集団を指します。イスラム原理主義者が、イスラムにおける狂信的な過激派集団と同一というわけではありません。ココは誤解しないでください!!

そもそもイスラム教徒内におけるイスラム過激派はごく少数です。この少数の過激な思想を持つ集団が、イスラム教草創期の思想を自分たちの主義・主張に都合よく合わせて、且つ利用し、原理主義の目的を遂行するために暴力的な行為を起こしているのです。

したがって、多くのムスリム (イスラム教徒) が崇拝する教義ともかなり異なります。イスラム絡みのニュースで耳にする「ジハード」という言葉も、本来は「努力する、もしくは奮闘する」という意味です。

ところが、イスラム過激派では「聖戦」という意味で捉えています。

イスラム教の聖典である『コーラン』のなかに、異教徒との戦いにおける防衛もジハードに含まれています。彼らは、この一部分だけを抜き出して「聖戦 (＝神の教えを守るためには、異教徒を殺害しても罪にはならない)」などと、自分たちに都合がよいように拡大解釈しているのです。

◆どうして? 日本もテロの標的にされる理由とは……

2000年以降、海外で日本人がテロに巻き込まれて命を奪われる、人質として身柄を拘束される……こういった事件が多発しています。

2001年のアメリカ同時多発テロ事件は、日本人が直接的にターゲットになったわけではありませんが、世界貿易センタービルの崩落などの巻き添えで、24人もの尊い命が犠牲になったのは事実です。

2003年5月に、イラク戦争の終息後で混乱するイラク国内で、2人の日本人外交官が射殺されました。翌年10月には、日本人の青年がアルカーイダ系組織を名乗るグループに拉致されて、その後に殺害されています。

この組織は、小泉純一郎首相（当時）がイラクへの人道支援のために派遣した自衛隊の撤退を要求しましたが、聞き入れられなかったことから〈報復〉として青年を殺害したのです。

さらに、その様子をインターネットで動画配信するといった愚行には、日本だけにとどまらず、世界中が怒りを覚えました。

そして、2014年から2015年にかけて、シリアとイラクの一部を武力によって支配したI S I L（イスラム国）が、シリアに入国した2人の日本人男性を拘束して、公開処刑する事件が起こります。

これまでイスラム教を信仰する中東地域の国々と、比較的良好な関係を築いてきた日本が、イスラム過激派からテロの標的として見なされることは稀でした。

ところが、先進国として欧米諸国と足並みをそろえることが多くなるにつれ、彼らの考えも変わり始めます。つまりかつては友好的な存在として慕っていた日本人に対しても、「欧米諸国と同列だ」と認識するようになったのです。

日本、ならびに日本人がテロリストたちから標的にされるのには、こうした政治的な背景が根底にあるといえるかもしれません。

テロの脅威から逃れることはほぼ不可能です。ただ、テロ行為が起きる背景には、必ず何かしらの理由があります。不安定な世界情勢や当事国の経済状況、宗教的な問題など……こういった情報をきちんと把握して、且つ正しい知識を身につけ、そのうえで必要な対策を講じる——。そうすれば、テロ行為に巻き込まれる確率も低くなるはずです。

①ウサマ・ビンラディン

サウジアラビア出身。イスラム過激派組織「アルカーイダ」のリーダー的な存在であり、アメリカ同時多発テロ事件をはじめとする数々の反米テロ事件の首謀者とされる。財閥「サウジ・ビン・ラディン・グループ（S B G）」を柱とするビン・ラディン一族の御曹司で、一族の巨額な財産をもとにイスラム過激派テロ組織を育成したといわれている。

②「預言者」のムハンマド

メッカを支配していたクライシュ族の名門・ハーシム家に生まれる。40歳のときに洞窟で瞑想にふけっていた際、天使ガブリエルより「アッラーの啓示」を伝えられる。以後、使徒として神から預かった言葉を人々に伝える活動を開始したイスラム教の創始者

現在、イスラム教徒は全世界におよそ16億人いるといわれています。

これはキリスト教に次ぐ信者数です。

聖地・メッカのあるサウジアラビアを中心としたペルシア湾岸、中近東、アフリカ北部、西南アジア、東南アジア、東ヨーロッパの一部、さらには極東のロシアと、信仰範囲は広がっています。

後述しますが、イスラム教は、「アッラー」を〈絶対唯一の神〉とする一神教。ゆえに偶像崇拝は禁止されており、「人は神の前では皆平等である」との考え方に基づいています。そのため聖職者は存在しません。また、「六信ろくしんごぎょう」と呼ばれるイスラム教徒の果たすべき決まり事も定められています。キリスト教やユダヤ教などの他宗教と共通する点も多々あるのですが、独特な特徴も有しています。

たとえば、断食や口にできる食材の限定、聖地・メッカの方向に向かって行なう1日5回の礼拝は、その一例です。こうしたちょっと変わった側面が、他宗教を信仰する人たちからは奇異な存在として捉えられているのです。

しかし、イスラム教も他宗教と同様、平和と平等を尊び、人々の幸福を神に祈る宗教である点に変わりはありません。だからこそ、異なる宗教を崇拝する人たちからも受け入れられ、世界中で信者数が増え続けているのです。

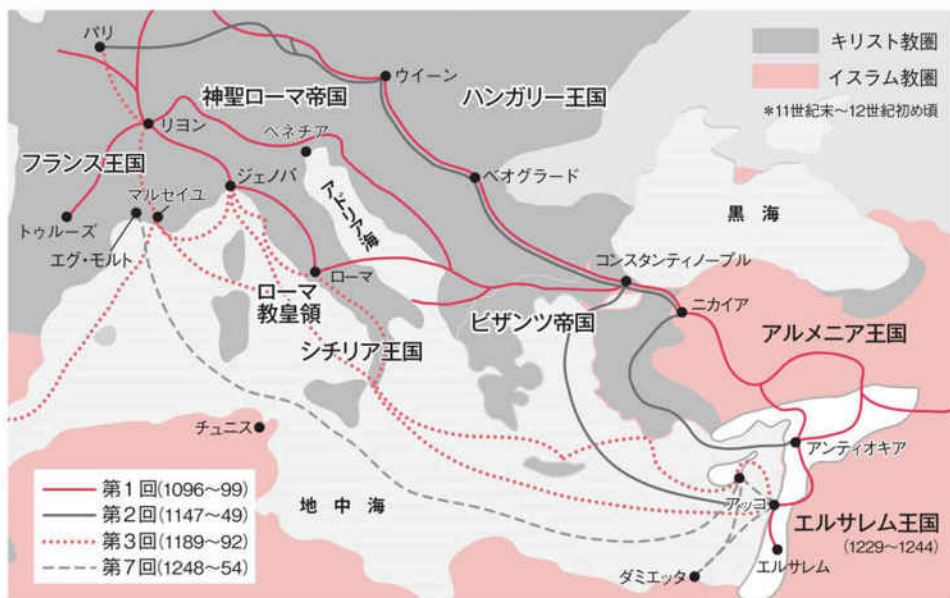
◆十字軍の遠征が欧米諸国への強い憎しみを生んだ!?

現在のイスラム教を信仰する国の大半は、欧米諸国やそれ以外の国々との協調関係を築き、お互いの宗教や文化を尊重しつつ、経済的な結びつきを強めていこうとしています。ただ、なかにはイランやシリアのように、反米・反西側諸国を強固に貫いている国も存在することを忘れてはいけません。

なぜ一部の中東諸国と欧米諸国が対立するようになったのか。その経緯を紐解いていくと、中世時代の十字軍の遠征さかのぼにまで遡るといわれています。

「1000年以上前の出来事が要因だなんて……」と、不思議に感じる人もいることでしょう。ですが、宗教心の強い彼らにとっては、たとえ遙か昔の出来事であっても決して消えることのない〈遺恨〉が、そこにはあるのです。

十字軍の遠征とは、当時勢力を伸ばしつつあったイスラム教諸国に、キリスト教の聖地・エルサレム（※イエス・キリストの墓がある）が占領されたことに対して、主にカトリック教徒の国々が、ローマ法王の呼びかけのもと、その地を奪還するために軍隊を派遣した出来事です。1071年から1272年の約200年の長きに渡って合計8回も行なわれた軍事侵攻でしたが、じつは十字軍が勝利したのは、最初の1回だけ。あとはイスラム側の勝利に終わりました（次図参照）。



時代や対立する宗派を問わず、宗教戦争というものにはいつも悲慘な結末をもたらします。十字軍の遠征も同様でした。

イスラム側は、十字軍兵士の捕虜に対して寛容な対応をしたにもかかわらず、十字軍側はイスラム兵士だけでなく、侵略した地域の住民までも無差別に惨殺したといわれています。この対応の大きな違いが、**1000年以上経った今**も、欧米諸国への強い憎しみと嫌悪感として残っているようなのです。

とはいえ、一般的には、この出来事は歴史上のお話程度の認識であり、テロリストや一部のイスラム過激派の思想、レトリックに上手く利用されているだけであるというのが、研究者たちの見解です。

◆イスラム圏と欧米諸国との複雑な〈因果関係〉

前述しましたが、一部のイスラム過激派たちが、十字軍の遠征の歴史を掲げ、「欧米諸国は信用できない」「イスラムの敵だ」と喧伝することで、自分たちの主義・主張を正当化しています。同時に、イスラム圏のなかでの〈求心力〉を高めるために利用しているのも事実です。

こうした一部の過激派の極端な事例を除いたとしても、過去に自分たちが信仰する宗教を力づくで弾圧しようとした欧米諸国に対し、怒りや憎しみ、嫌悪感を抱く人たちがいても不思議ではないでしょう。

このほかにも、今日のイスラム圏と欧米諸国の関係性を複雑化させる問題は数多く存在します。

イスラム圏が抱える問題の多くが、解決の糸口をなかなか見出せない背景には、暗い歴史の積み重ねと、現代のグローバル社会において敵対する者同士がお互いに無関係ではいられない複雑に入り組んだ社会情勢があるのです。

さらにいうのであれば、民族や宗派間の対立など、さまざまな思惑と感情が入り乱れているからにほかなりません。

さて、過去の遺恨はともかく、現在の世界情勢に目を向けると、アメリカやロシアといった大国によって保たれていた世界のパワーバランスが、時代とともに崩壊しつつあります。そうしたなかで台頭する中国やインド、そして中東諸国……。

第一次世界大戦以降、中東諸国はイギリスをはじめとした西欧諸国から植民地として支配されてきました。第二次世界大戦後に独立を果たしても、その後ろ盾となるのはイギリスやフランス。政権はまさに〈傀儡〉といっても過言ではありませんでした。ゆえに国民の生活はよくなるどころか、悪くなる一方で、自由も抑圧されたままのつらい状況だったのです。国民の不満や怒りが一気に吹き出す形で起きたのが、後述する「アラブの春」という民主化運動でした。

この激動の中心にいたのは、各国の若者たちです。

今やインターネットが世界をつなぐ時代。彼らはSNSなどを駆使して、自分たちの誇りと自信を世界中に発信しました。「**アルジャジーラ** (①)」というメディアが援護したこともあり、民主化の嵐が中東地域に吹き荒れました。

とはいえ、すべての民主化運動が成功したわけではありません。嵐の前よりも国内が乱れてしまった国もなかにはあります。先行き不透明な民主化ですが、もはや欧米諸国の力だけで押さえることができない「民意」という巨大な力が動き出しているのは間違いありません。

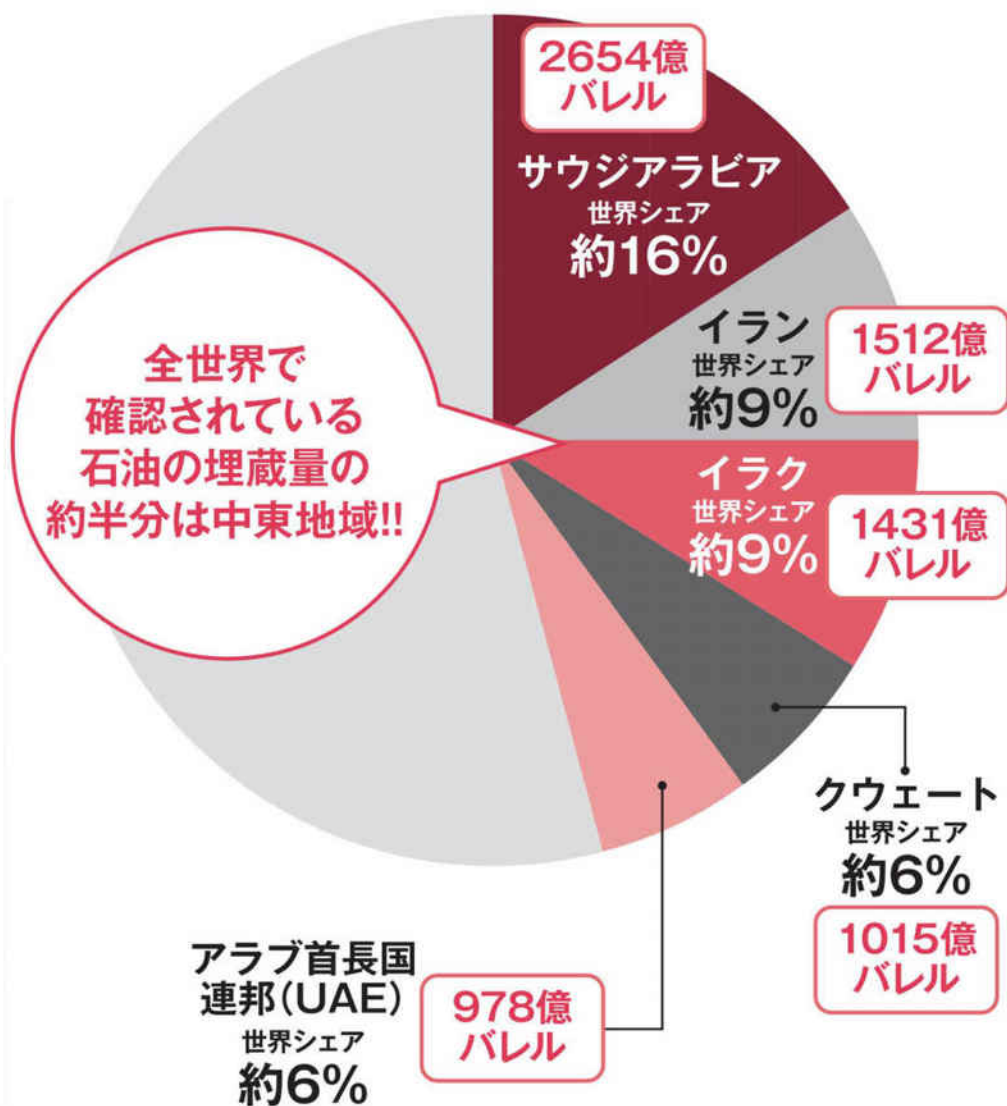
①アルジャジーラ

「ジャジーラ」とは、アラビア語で「島」のこと。アルと定冠詞をつけることで「アラビア半島」といった意味合いとなる。カタール政府を通じた経営という形をとるが、「公的で政治的圧力を受けない、中東で唯一の報道機関」と、自認している。欧米など、外国メディアとは異なる視点を持ち、アラブ世界に深く入り込んだニュースを提供している。中東はもちろん、世界でもその存在感を高めている

03 資源エネルギーの利権をめぐる争い 勝算はイスラム圏にアリ？

第二次世界大戦の終結以降、中東地域では大規模な油田が相次いで発見されてきました。ペルシア湾沿岸諸国は顕著で、その埋蔵量は全世界で確認されているおよそ半分を占めるといわれています（次図参照）。

世界の約半分の石油を占めるイスラム圏



たとえば、サウジアラビアにある世界最大の埋蔵量を誇る「ガワール油田」、1991年の第一次湾岸戦争時にイラク軍の攻撃で甚大な被害を被ったクウェートの「ブルガン油田」などが、代表的な油田として挙げられるでしょう。

中東地域における油田の発見は、灼熱の荒涼たる砂漠地帯が広がり、主たる産業も乏しかった国々に巨万の富をもたらしました。その恩恵を受け、多くの国が繁栄を遂げます。同時に、1960年に国際石油資本などから、石油産出国の利益保持を目的として、イラン、イラク、クウェート、サウジアラビア、ベネズエラの5カ国によって「OPEC（石油輸出国機構）」が設立（※現在は12カ国が加盟）。

これにより、世界の石油価格の決定権を手中に収め、国際社会への発言権と影響力を高めることに成功しました。

◆中東の憂鬱.....民族対立と石油をめぐる利権争い

1299年から1922年までの約600年間、世界最強の国家として君臨し続けたオスマン帝国が、第一次世界大戦で敗北し、崩壊します。これを機にオスマン帝国の領土であったパレスチナが、イギリスの支配下に入りました。つまりは植民地化です。パレスチナには、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の共通の聖地であるエルサレムがあり、三つの教徒たちは比較的良好な関係を保ち続けていました。

ところが、イギリスの支配下になった頃から欧米諸国に散在していたユダヤ人のパレスチナへの入植が始まったことで、状況が一変します。

さらに、第二次世界大戦が終結すると、ナチスによって迫害を受けていたユダヤ人難民の多くが流入してきたことで、元来この地に暮らしてきたアラブ人とユダヤ人の対立が激化します。

そうしたなか、イギリスが国際連合にパレスチナ問題の解決を委託したことで、パレスチナ分割決議がなされ、ユダヤ人によるイスラエルが建国されてしまうのです。

これに対してアラブ側は猛反発。ついに武力衝突へと発展します。イスラエル側には、アメリカ、イギリス、フランスがつき、アラブ側をソ連が支援する形となり、以降25年に及ぶ中東戦争（第一次～第四次）の幕開けです。欧米諸国に対する一部の中東諸国の憎悪に加え、米ソ間の東西冷戦の代理構造、さらには石油の利権争いなどが複雑に絡み合い、中東問題は泥沼化します。

それからは、ご存じのように長い動乱の時代へと突入していったのです。

◆石油からの恩恵は国民の生活に思わぬ〈弊害〉を生む

第二次世界大戦後、中東戦争が続くなかで、イギリスやフランスに植民地支配されていた中東諸国の多くが、次々と独立を果たしていきました。

ところが、イギリスやフランスが各々の思惑で決めた国境が災いします。石油の利権問題なども交錯し、国境線をめぐって小競り合いが頻発しました。

さらに、イスラム教の二大宗派である「シーア派（①）」と「スンニ派（②）」による宗派対立も顕在化。加えて、欧米諸国の紛争への軍事的介入が争いに〈拍車〉をかけ、今なお中東地域をはじめとしたイスラム教の国々では、民族・宗派間の対立問題が複雑に絡んだ争いがあとを絶ちません。

2010年から2013年にかけて、チュニジアの「ジャスミン革命」に端を発した民主化運動が、中東諸国へと飛び火します。

いわゆる「アラブの春」です。この出来事によって、エジプトやリビアなどの独裁政権が倒され、民主化に向けた政治が始まったのですが、.....その後は政権交代による権力争いが表面化し、中東地域は再び混乱へと逆戻りします。

そして、アラブの春に触発され、アサド体制打倒を求めた反政府勢力との内戦が続くシリアの混乱が、テロ組織でアイシルある「ISIL（イスラム国）」を生み出してしまったのです。こうした民主化の動きやテロの背景には、サウジアラビアのような石油産出国のみが得た莫大な富が弊害になっているケースも否めません。

たとえば、石油による巨額の収入があるので、「福利厚生はとても手厚い」と捉えがちですが、それは表面上のお話。実際は、若年層の失業率が年々高くなっているという厳しい実情があります。

なぜこうしたことが起きるのか――。いくら福利厚生で高度な教育を受けることができたとしても、社会に出たときの雇用口がないからです。

富の再分配システムが確立されていない実情が、そこにはあるのです。つまり石油から得られる莫大な富だけで国家の運営が成り立つってしまうため、国民からの税金に頼る必要性がない。ゆえに国内の産業を活性化する必要もなく、結果として雇用先も増えない。そのために国民は税金を支払うことで得られる権利を主張できないというわけで

す。

◆ポスト石油時代。イスラム社会の未来は果たして？

今や石油は、私たちの生活に不可欠な存在になっています。

しかし、石油は天然資源。いずれは枯渇することは明白です。

現在、世界では〈代替エネルギー〉を確立すべく、研究や技術開発が活発に行なわれています。なかでも、地球温暖化の一因と考えられている二酸化炭素を排出しない風力発電や太陽光発電などのクリーンエネルギーが注目されています。

とはいえ、全世界のエネルギー消費量を賅えるほどには、まだ至っていません。

もちろん、石油と天然ガス以外にはさしたる資源のない中東地域の石油産出国も、危機感を募らせています。石油によって得られた巨万の富を再投資して、広大な砂漠地帯を利用したメガソーラーのプラントを建設するプロジェクトも浮上しているようですが、未だ決定打は見つかっていません。

中東の石油産出国を中心としたイスラム社会の未来。そのカギを握るのは、石油依存から脱却し、新たな産業・経済基盤を確立することにあるでしょう。

そして、国民の貧富の差が解消され、誰もが安定した仕事を持ち、幸せな家庭を築くことができたとしたら、テロもこの地域から自然に消滅するかもしれません。

①シーア派

「四代目のカリフ（後継者）であったアリーと、その子孫だけが預言者の代理としての資格を持ち、イスラム共同体の指導者を後継できる」と主張する宗派

②スンニ派

「ムハンマドの時代から積み重ねられた慣行や正統なるイスラム共同体にしたがい護持する」を信条とするイスラム教最大の宗派。イスラム教には**73**の宗派があるとされているが、スンニ派が9割を占めているという

結婚前に同棲をしておけば、お互いの価値観や生活習慣がわかり、その後の結婚生活も比較的スムーズにいく——。こうした風潮は日本だけでなく、欧米諸国でもよく見かける。昭和の時代には考えられないことだが、時代が変われば男女間の考えも変わることを象徴した一例といえるだろう。

テレビのニュースで、中東地域の様子が映し出されると、女性が黒いヴェールのようなもので顔を覆っている様子を見たことがあるはずだ。これは総じて「ブルカ」と呼ばれる衣装で、タイプによって「ニカーブ」や「ヒジャブ」などと複数あるのだが、私たちには、何か〈女性蔑視〉の意味合いがあるように思えてならない。

イスラムの教えでは、男女の装いについて、さまざまな定義が存在する。『コーラン』によれば、男性は「美しく身なりを整える」ことが義務づけられており、禁止されているのは金の装飾品と絹でできた衣装だ。女性はといえば、「夫の前では何を着てもよい」とされている。ほかの家族や女性の前では、少なくとも胸から膝までは覆うとされ、夫以外の男性の前では、顔と手以外は覆うことと戒めも厳しくなる。つまり全身を見ることができ、触れることも許されるのは夫だけであり、これは姦通への戒律にもなっているようだ。装飾品をまとうことは許されているのだが、夫以外の男性の気を引くために使うことは禁じられている。

こうしてみると、「女性への戒律が厳しい」と感じる人も多いはずだ。ただ、イスラム社会においては、たとえば、姦通を禁じているのではなく、そうしたことに近づかない、そこから遠ざけることを教えている。つまりイスラム社会における男女間の哲学は「ある喜びが安らぎを奪うことになるのであれば、結果的には喜びではない」と説いており、それが男女交際の戒めでもある。

とはいえ、男女間の考え方が比較的ゆるいほかの宗教を信じる人たちには「厳しい」とうつるのはたしかなようだ。

第1章

よくわからない!? 謎多きイスラムの歴史と今を知る

01 イスラム教の創始者——。「預言者」のムハンマドとは何者？

【ココがわからない!!】いつ、どのように……イスラム教は生まれたのですか？

イスラムの世界やイスラム教を理解するうえでは、まず「**預言者（①）**」と呼ばれたムハンマドという人物について知っておく必要があります。

ムハンマドは570年頃、東西交易の中心地として繁栄を極めていたアラビア半島のメッカで誕生しました。当時のアラビア半島は、各地域を部族が支配しており、なかでもメッカは、**クライシュ（②）**という部族の支配下にありました。

彼は25歳でハディージャという妻をめとります。15歳年上のハディージャは貿易業を営んでおり、ムハンマドも行商を生業としていました。

40歳になった頃、彼は郊外のヒラー山の洞穴にこもって、瞑想にふけるようになります。そしてある三日目の夜、天使ガブリエルから預言を授かります。

読み書きができなかったムハンマドは、預言を〈口述〉で人々に伝えるようになります。身分に関係なく、誰にでも熱心に神の言葉を伝えました。

これがイスラム教の始まりだといわれています。

◆従来の伝統を否定し、メッカから追放される

イスラム教では、信仰するのは唯一神。「**アッラーのみが神である（③）**」と考えられています。ただ、「アッラー」から伝えられた言葉のなかには、メッカの伝統を否定する内容もありました。

たとえば、「アッラーこそ唯一神」という教えは、メッカで伝統的に続いていた女神信仰を否定することです。**偶像崇拜（④）**の否定も同様です。また当時は、女兒が生まれると殺してしまう習慣が、アラビア半島にはありました。こうした習わしも、アッラーの名のもとに「間違い」として否定したのです。

従来までの伝統とは相反する行動が、社会を牛耳る権力者や富裕層から疎まれ、迫害を受けるようになったムハンマド。やがてメッカで暮らすことができなくなった彼は、622年に多くの信者を引き連れて**ヤスリブ（⑤、その後メディーナと改称）**へと移住します。後にこの年が「ヒジュラ（聖遷）元年」、すなわち「イスラム紀元の年」と決められたのです。

◆アラビア半島に初の都市国家を打ち立てる

ヤスリブでは、アラブ人やユダヤ人の複数の部族があり、長らく内紛が続いていました。伝道のために何度かこの地を訪れていたムハンマドは、内紛を治める調停役としてヤスリブの住人に招かれます。

期待に応じて内紛を治めたムハンマドは、アラブ人とユダヤ人との和平を謳った「**メディーナ憲章（⑥）**」を各部族に締結させます。ヤスリブは「メディーナ（預言者の街）」と新たに名づけられ、ムハンマドはアラビア半島において初の都市国家「**イスラム共同体（⑦、ウンマ）**」を打ち立てるのです。

こうした動きを静視できなかったのが、メッカからムハンマドを追放した権力者たち。彼らは軍を送り込みますが、いつも振り返りに……。ついにはムハンマドが2万人の軍勢とメッカに乗り込み、すべての住人を改宗させます。

メッカで信仰されていた多神教のシンボルである**カーバ神殿（⑧）**の偶像をすべて撤去し、かわりに〈聖宝〉として黒石を据え、イスラム教の聖堂としました。

以来、メッカはイスラム教で「最高の聖地」と位置づけられています。

その2年後、63歳で彼は生涯を閉じます。今もイスラム教徒から厚く尊敬されるムハンマド。その死後、イスラム教は大きく「シーア派」と「スンニ派」の二大宗派へと分裂していくのです。

「預言者」のムハンマドの生涯をたどる

570年頃

メッカを支配するクライシュ族のハーシム家に誕生

父を生前6カ月前、母を6歳で失い孤児となり、叔父のアブー・ターリブに養育される。青年時代には商家の雇い人となり、シリア方面などにおもむいた。誠実な者「アミーン」と呼ばれるほど、実直な青年だったという

595年頃

雇い主だったハディースジャと結婚

2人の間には2男4女が生まれたが、2人の男子は幼くして夭折。一方、商売は順調に続けていたが、誠実な対応をするムハンマドを邪魔に思った既存の商人たちから締め出しを受けてしまう。これ以降、メッカ郊外にあるヒラー山の洞穴にこもり、瞑想にふけるようになる

610年

ヒラー山の洞穴で「神の啓示」を受ける

妻のハディースジャや親類といった身近な人間への伝道を開始。徐々にメッカの人たちにも広まっていくが、同時に多神教徒や大商人からの迫害も強まっていく

619年

妻と叔父が亡くなる(悲しみの年)

ムハンマドを支え続けた妻のハディースジャ、叔父のアブー・ターリブを相次いで失う。これ以降、迫害がさらに激化する

622年

メッカからヤスリブ(メディーナ)へ移住

メッカから北へ約500キロ離れたヤスリブへと拠点を移し、イスラム教徒の共同体「ウンマ」を打ち立てて、布教の態勢を整える。また、当時ヤスリブで対立していた現地の多神教徒やユダヤ教徒との間に「集団安全保障協定(メディーナ憲章)」を締結。部族間争いの調停、他部族との戦いなどを経て、指導者の役割を担っていく

630年

クライシュ族に勝利しメッカを征服

態勢を万全にしたムハンマドは、メッカへの進軍を計画(聖戦)。クライシュ族を中心としたメッカの大商隊との戦いを皮切りに争いが始まる。ほどなくメッカは陥落。周辺の部族などにも名が知れ渡り、イスラム教へと入信する人たちが一挙に増加した

632年

「別離の巡礼」ののち死去

①預言者

神から直接言葉を聞き、その言葉を広く人々に伝える者を指す。未来を予告する「予言者」とは違う

②クライシュ

4世紀頃からメッカ近郊を勢力圏として遊牧及び交易を行なっていたアラブ人の部族。イスラム教の創始者であり、「預言者」のムハンマドはこの部族の出身。当初、クライシュ族はムハンマドの布教活動を迫害し続けたイスラムの敵対者でもあり、『コーラン』のなかにもたびたび登場する

③アッラーのみが神である

「神」を意味するアラビア語だが、イスラムだけの神の名前ではない。「GOD」と同じ意味。神は唯一なので（一神教）、ユダヤ、キリスト、イスラムの神をアラビア語で「アッラー」という

④偶像崇拜

神仏像や聖人像、あるいは樹木や岩石などの形象物を崇拜すること。偶像を崇拜することで、神仏や超自然力などの抽象的な信仰対象に具体的な姿を持たせ、人々に明確な信仰の対象を与えることができる。イスラム教では禁じられている

⑤ヤスリブ（メディーナ）

メッカから北へ約500キロの地にあり、現在はサウジアラビアの州の州都。「マディーナ」とも呼ばれる

⑥メディーナ憲章

イスラム教徒となったアラブ人とユダヤ教徒との間で交わされた。

- 1：メッカからの移住者とメディーナの改宗者は共同体を形成する
- 2：信者間の紛争は神とムハンマドの調停にゆだねる
- 3：利敵行為さえなければ、ユダヤ教徒は「イスラム共同体」との共存が許される

これらの内容が骨子になっている

⑦イスラム共同体（ウンマ）

『コーラン』では「アッラーによって使徒を遣わされ、啓典を与えられる人間集団」とされている。アラビア語で「ウンマ・イスラーミーヤ」と訳される。「ウンマ」の語源には「母」という意味も含まれる

⑧カーバ神殿

『コーラン』においてカーバ神殿は、神が人類の祖であるアダムとイブに命じて建築し、大洪水によって消失後にアブラハムに再建させた神殿とされている。「旧約聖書」にこの記述はない

【ココがわからない!!】イスラム教は、いつも礼拝をしているイメージがありますが.....

イスラム教は紀元7世紀頃、**一神教(①)**の宗教として中東で誕生します。

それまで各地で信仰されていた宗教の多くは、自然崇拝を基礎とする多神教ばかりでした。よく知られているのは紀元前14世紀頃、エジプトで広まっていた「**アトン(②)**」という一神教ですが、ときとともに信仰者は消滅。そしてイスラム教が誕生する以前は、**ユダヤ教(③)**と**キリスト教(④)**だけが一神教として成立していました。

前述しましたが、「預言者」のムハンマドが、天使ガブリエルから神の啓示を受け、それを口述で伝え始めたのがイスラム教の始原と伝えられています。

読み書きができなかったムハンマドは、神の啓示を口述で多くの人たちに広めました。それを聞き留めた人たちが文字として記録したとされます。この記録された言葉を文章化したものが集められ、長い時間をかけて一冊の書物としてまとめあげられたものが、イスラム教の聖典である『**コーラン(⑤)**』です。

イスラム教徒は、『コーラン』の教えに沿った「**六信五行(⑥)**」という六つの存在を信じ、五つのことを信仰の行為としています。彼らが、イスラム社会の暦である「ヒジュラ暦の9月＝ラマダン」に断食を行なうことや、1日に5回イスラム教の聖地であるメッカに向かって祈りを捧げるという宗教的な行為は、すべて六信五行に基づいて行なわれているのです。すなわち五行すべての宗教的な行為は、イスラム教徒にとってすべて根拠や意味があるわけです。

たとえば、1日5回メッカに向かって捧げる祈りは〈信仰告白〉の行為にあたります。「アッラーのほかに神はなし。ムハンマドはアッラーの使徒」と、唱えることで「私が信じるのはアッラーのみ」と告白しているのです。

◆「正しい神の教えに回帰する」——これがイスラム教

イスラム教は「アッラー」という唯一の神が突然現れ、信仰を広めた新しい一神教ではありません。それではどのような宗教なのでしょう。イスラム教の聖典『コーラン』の一節をもとに解説しましょう。

「かれはアッラー、唯一なる御方である。アッラーは、自存され、御産みなさらないし、御産れになられたのではない、かれに比べ得る、何ものもない」
(『コーラン』第112章の一部より)

この言葉は、「旧約聖書」のなかに登場する最初の一神教徒・**アブラハム(⑦)**が宗教へ回帰することを意味しています。つまり「これまで旧約聖書や新約聖書を通じて伝えられてきたモーゼ、あるいはイエスなどに下された、唯一の存在である神の本当の教えに立ち戻ろう」ということです。

唯一の存在である神の教えを、ユダヤ教やキリスト教が歪めてしまったというのが、神が(ムハンマドを通じて)下したメッセージ(啓示)でした。

「正しい神の教えに回帰する」——これがイスラム教なのです。

イスラム教徒は「神は最初にモーゼに対して啓示を下し、次にイエスに啓示を下し、最後は『コーラン』を通じてムハンマドに啓示を下した」と考えています。ゆえにムハンマドを新たな宗教の創始者や、新たな神の言葉の伝道師ではなく、「宗教改革者」という位置づけで解釈しているのです。

「真の神の教えにしたがっていく」——。端的にイスラム教の教えを言葉で表現するならば、これがもっとも近いかもしれません。

イスラム教の「六信五行」とは？

六信（6つのことを信じよ）

- 1 アッラー** 世界は「アッラー = 神」がつくったもの。神は唯一の存在
- 2 天使** 天使とは神がつくった、神と人間の間間的な存在
- 3 経典** イスラム教の経典は、『コーラン』
- 4 預言者** イスラム教でもっとも重要な預言者は、ムハンマド
- 5 来世** 死語の世界のこと。人は死んでも地下で眠り続け、最後の審判を受ける
- 6 天命** この世のもののすべてが、神の意思によって決められている

五行（5つのことを守れ）

- 1 信仰告白** 信仰の証として、「アッラー以外に神はなし」を唱える
- 2 礼拝（お祈り）** 1日5回、聖地・メッカの方向に向かって礼拝を行なう
- 3 喜捨（寄附）** 収入の2.5%を寄附する
- 4 断食** 「ヒジュラ暦の9月 = ラマダン」に断食を行なう。
ラマダンは断食のことではない
- 5 巡礼** 聖地・メッカへの巡礼。一生のうちに1回は行なう

①一神教

唯一絶対的な存在である神が、人間に対してさとし、真理を示す啓示によって成立する宗教。イスラム教は唯一神である「アッラー」が「預言者」のムハンマドに下した啓示により成立した

②アトン

「アテン」とも呼ばれる。夕日を神格化した一神教。エジプトの古代都市・テーベで祀られていたが、特に偶像や神話はない

③ユダヤ教

紀元前1900年頃、ヘブライ人の遊牧民の間に芽生えた信仰が基盤となり、紀元前1世紀頃に聖典がつくられるとともに輪郭ができあがっていった。「ヤハウェ（日本語ではエホバと表記されることが多い）」を唯一神として信仰する。主たる聖典は「タナハ（キリスト教の旧約聖書と同じ）」である

④キリスト教

ユダヤ教を母体としつつ、父（神）と子（イエス）と聖霊を唯一神（三位一体・至聖三者）として信仰する一神教。欧米諸国を中心に広く世界中へと布教されつつも分派の進み、起源の時期、父、子、聖霊の解釈などが異なり、議論が続いている。主たる聖典は「旧約聖書」「新約聖書」である

⑤コーラン

イスラム教の聖典。イスラムの信仰では、唯一神「アッラー」から最後の「預言者」に任命されたムハンマドに対して下された啓示とされている

⑥六信五行

「信」は信じるべき信条、「行」は実行するべき信仰上の義務を意味する。五行に関しては、ムハンマドの言行録たる『ハディース集』において言及されているが、『コーラン』では、これらを一体として説いていない。「シーア派」においては、神の唯一性・神の正義・預言者・指導者・来世の五信と、礼拝・喜捨・断食・巡礼・五分の一税・ジハード・善行・悪行の阻止・預言者とその家族への愛・預言者とその家族の敵との絶縁の十行になる

⑦アブラハム

「旧約聖書」の創世記第12章から登場する人物。神に対する揺るぎない信仰を守った模範としてイスラム教、ユダヤ教、キリスト教徒のすべてに畏敬の念を持って知られている。「信仰の父」「神の友」などとも呼ばれている

【ココがわからない!!】イスラム帝国がもっとも栄えたのは、いつ？

イスラム教では、ムハンマドの死後、後継者（カリフ）をめぐる、さまざまな争いが引き起こされています。その多くの結末は暗殺でした。

まだカリフを安定的に決められずにいた初期の頃、繁栄していたイスラム帝国が分裂するような出来事が起きます。四代目カリフのアリーと、ムハンマドの〈秘書〉の立場にあったムアーウィヤによる、カリフをめぐる争いです。

このときに「**シーア派（①）**」と「**スンニ派（②）**」の二大宗派が誕生するのですが、これについては後述します。

2人の争いは、和議の締結で終息するように思えたのですが、どちらもカリフを名乗ったために、イスラム帝国は混乱を極めます。

ところが、アリーの暗殺によって、ムアーウィヤが正統なカリフとなり、以後、彼の子孫たちが十四代にも渡って、その地位を継承していきます。

これが「ウマイヤ朝」です。その後、長い期間に渡りイスラム帝国を支配したウマイヤ朝は、アラブ人以外のムスリム（イスラム教徒）を迫害します。

当時は、ムスリムと非ムスリムとは平等な立場ではない時代。ゆえにウマイヤ朝では、アラブ人以外のムスリムたちに、奴隷同様の**人頭税（③）**を課しました。

長期政権のもとで、国民の間には不満がどんどん鬱積していきます。やがてこれが大きな反発となり、ムハンマドの血筋であるアブー・アル＝アッバースをカリフとした新王朝を発足させる動きが生まれます。そして「ムハンマドの子孫がイスラム教の指導者たるべき」と考える宗派もこれに協力し、ザブ河畔の戦いが勃発します。この戦いで長きに渡ってイスラム帝国を支配し続けてきたウマイヤ朝は大敗を喫し、滅亡するのです。

こうして誕生したのが「アッバース朝」でした。

新政権の確立には多数派の力が必要であったため、アッバースは彼らの教義を用いたのですが、この行為は彼らにとっては裏切りでした。

そこで、アッバースは非アラブ系ムスリムのペルシア人に力を借ります。彼らは協力した〈見返り〉として、非アラブ系ムスリムの人頭税を廃止してもらい、アラブ人と同等に扱われるようになったのです。

これが「アッバース革命」と呼ばれるものです。

そもそも『コーラン』には、「イスラム教徒はすべて平等である」という教義があります。この革命は、アッバース朝を「アラブ人の帝国」から、本来の「イスラム教徒の帝国」に立ち戻らせるきっかけになったともいえます。また、アッバース朝のカリフは、「ムハンマドの代理人」や「信者たちの長」だけでなく、「神の代理人」とも名乗り、神権的指導者の地位を確立していったのです。

◆イスラム教を他民族にまで広げ栄華を極める

すべての民族を平等とするアッバース朝のもとで、信仰はペルシア人をはじめとする他民族へと広がります。ムスリムの商人たちが各国に遠征し、広域で貿易を行なったため、国家としてのイスラム帝国も大いに繁栄しました。

二代目カリフのマンスールが、アッバース朝時代の都・ハーシミーヤを**バグダード（④）**へ移し、五代目のハールーン・アッ＝ラシードの時代には最盛期を迎えます。また、商人たちの伝承によって信者が増え、その教えが研究されるようになり、さまざまな学問が生まれました。

イスラム法の「**シャリーア（⑤）**」が整備されたのも、この時代です。この法は、神が定めた〈絶対の掟〉とされました。今でも、保守派のムスリムたちは「シャリーアこそ普遍的規範であり、守るべきもの」と考えているほどです。

イスラム帝国全盛期の二大王朝

ウマイヤ朝 (661-750)

- イスラム教の戒律を軽視
- 慣例に反した世襲制を導入
- アラブ人を優遇

非アラブ人の扱い

人頭税(ジズヤ)の支払いを課されるなど、イスラムに改宗しても差別を受け続ける

厳格なムスリムたちからの批判

アッバース革命

ムハンマドの叔父・アッバースの子孫がウマイヤ朝を打倒

アッバース朝 (750-1258)

- ペルシア人の影響力が増大
- 首都・バグダードを中心に国際交易が発達。さまざまな文化・民族との一体化が促進される
- 商人たちが信仰を伝えることで信者が増加

非アラブ人の扱い

ムスリムであれば、人頭税(ジズヤ)は課されず、すべての民族が平等に

一方、アラブ人であっても土地を所有していれば、地租(ハラージュ)が課されるようになる

①シーア派

「四代目のカリフ（後継者）であったアリーと、その子孫だけが預言者の代理としての資格を持ち、イスラム共同体の指導者を後継できる」と主張する宗派

②スンニ派

「ムハンマドの時代から積み重ねられた慣行や正統なるイスラム共同体にしたがい護持する」を信条とするイスラム教最大の宗派。イスラム教には**73**の宗派があるとされているが、スンニ派が9割を占めているという

③人頭税

年齢や性別、能力にかかわらず、1人につき一定額の納税を課すもので、イスラム王朝では「ジズヤ」と呼ばれた。非ムスリムすべてに納税義務があり、その〈見返り〉として、一定の人権が保障される。「ウマイヤ朝」時代は、イスラムへ改宗してムスリムとなっても納税義務を課したが、「アッバース朝」になってからは、ムスリムの優位性を明示する意味を持たせるため、改宗により免除となった

④バグダード

イラクの首都で、バグダード県の県都。「アッバース朝」時代に建設された都市であり、中東諸国のなかでも大都市の一つ。「バグ」はペルシア語で「神」を意味し、バグダードは「神の贈り物」を意味するとされる。チグリス河畔に位置し、交通の要衝であったため、メソポタミア文明の時代にはすでに集落があり、「ササン朝」時代には周辺地域の物流の中心地ともなった

⑤シャリーア

イスラム教の聖典『コーラン』、ムハンマドの言行、範例である「スンナ」を法源とする法律。「イスラム法」とも呼ばれる。「ローマ法」を起源としないイスラム世界独自のもので、イスラム世界において**1000**年以上の運用実績がある

【ココがわからない!!】ニュースで頻繁に聞く「ジハード」って、結局のところは何なのですか？

イスラム教では、「六信五行」を厳密に守ることが義務づけられています。

このうち五行に関して、①信仰告白、②礼拝、③喜捨、④断食、⑤巡礼に続く〈六つ目の行〉として加えるべきだと唱えられているのが、「ジハード」です。

ジハードは、日本では「聖戦」と訳されることが多いのですが、本来は「奮闘する」「努力する」といった意味を指します。また、その語意は「内へのジハード」「外へのジハード」の二つに分けられ、前者は「大ジハード」、後者は「小ジハード」とも呼ばれます。

内へのジハードとは、自らの怠惰や欲望、利己主義などの悪と戦うことで、本来のイスラム社会で重視されているのは、こちらです。

日本では、内へのジハードについてあまり知られていませんが、行の一つである断食や巡礼も、「己に苦しみを与え、本能を抑えて信仰の道を進むものである」と踏まえれば、不自然はないでしょう。

対して、外へのジハードは、異教徒が「イスラム共同体（ウンマ）」に脅威を及ぼした場合、防衛手段として戦闘行為を行なうことです。「シャリーア」では、「イスラム世界を拡大、あるいは防衛するための戦い」と定義づけています。

◆本来の意味とは逸脱した解釈がなされている

ムハンマドの死後、次の後継者（カリフ）に選ばれたのはアブー・バクル（①）でした。彼はムハンマドの親友であり、義父でもあった人物です。

信仰の篤い人柄でしたが、ムハンマドと血縁関係がなかったため、反旗を翻す指導者たちも多く、正統なカリフが決まるまで「リッダの戦い（②）」と呼ばれる紛争が起きました。最終的には、アブー・バクルが勝利を収め、正統なカリフとなり、ムハンマドの教えをイスラム教として成立させます。

この頃はまだ信者たちの結束力は低く、且つムハンマドへの絶対的な忠誠心はあっても、アブー・バクルへ忠誠を誓う信者は少なかったようです。

そこでアブー・バクルは、己の立場を確たるものにするうえでも、アラビア半島外への進出を開始しました。まずはシリアへと侵攻します。この当時のシリアは、ビザンツ帝国（東ローマ帝国）の領土でしたが、宗教的理由で迫害を受けていたこともあり、イスラム教に好意的でした。

さらに、ビザンツ帝国はササン朝ペルシアとの抗争により疲弊していたため、シリアはあっさりとイスラム帝国の領土になります。加えて、ササン朝ペルシアともほぼ同時に開戦し、ペルシア皇帝の親征軍を破る大勝利で領土を獲得。

その後も中東への侵略を続け、イスラム帝国はまたたく間に強大な国家へと変貌を遂げたのです。

このようにイスラム帝国は、度重なる戦争により形成されてきた歴史があります。ゆえに『コーラン』でも「ジハードでの殉教者は天国へ行き、ジハードから逃げた者は地獄へ行く」として、異教徒との戦争を奨励しています。

本来のジハードは、ウラマー（③、宗教的知識人）ら宗教的指導者の承認が必要とされます。また、あくまで「防衛するための戦い」がジハードであり、こちらからむやみに戦争を仕掛けるのはジハードとはいえないのです。

にもかかわらず、為政者や一部の過激派組織によって身勝手な解釈がなされ、悪用されたことでとても怖い印象を持たれてしまっています。

イスラム帝国拡大の変遷をたどる



- ①ビザンツ帝国とササン朝ペルシアの抗争により、シルクロードが断絶。アラビア半島経由の交易路が活性化したことで、メッカなどで貧富の格差が増大し、イスラム教成立の要因となる

- ②ヤスリブ（メディーナ）でイスラム教の原点を形成したムハンマドは、630年にメッカを征服。死去するまでの間にアラビア半島全域を統一する



- ③「正統カリフ時代」にアラビア半島外へと進出。ササン朝ペルシアは滅亡し、ビザンツ帝国からは地中海東岸のシリア地方、地中海南東岸のエジプト地方などを奪った

- ④「ウマイヤ朝」時代は、異教徒に対するジハードをさらに拡大した。西方では、欧州に侵入して西ゴート王国を滅ぼしたのち、フランク王国と激突。東方では、唐の勢力と接することになる



- ⑤「アッバース朝」時代もジハードを継続。欧州では、フランク王国やビザンツ帝国の抵抗でシチリア島などを得るにとどまるが、東方では、唐を撃破し、中央アジアのイスラム化が加速した

①アブー・バクル

西暦573年生まれ、634年8月23日没。正統カリフ在位は632年から634年の2年間。ムハンマドの血縁者で初期からの信者でもあり、どのような危機的状況に陥っても信仰を捨てなかったため、「真実を語る人」、すなわち「スィッディーク」という尊称でも呼ばれる。また、容貌がとても美しかったともいわれている

②リッダの戦い

ムハンマドの死後に起きた後継者をめぐる争いを指す総称。「リッダ」とは、アラビア語で「背教」「棄教」を意味する言葉。ムハンマドが生存中は盟約を結んでいた指導者たちが、アブー・バクルが後継者になった途端、反旗を翻したことから、こう呼ばれる

③ウラマー

「知る者」を意味する言葉で、日本では、「イスラム法学者」と訳される。法学、神学、哲学などを修めた人物に対する呼称だが、明確な資格ではないため、信者たちに認められた人物が呼ばれることが多い。ただし、ウラマーはただの人間であり、聖職者とは考えられていない

【ココがわからない!!】「イスラム原理主義」とは、どういう考えを指すのでしょうか？

19世紀まで、イラクから北アフリカまでの肥沃で広大な地域は、イスラム社会に属するオスマン帝国の支配下がありました。

しかし、1914年に第一次世界大戦が始まると、イギリスは、聖地・メッカの太守との間で「フサイン・マクマホン協定(①)」を締結します。オスマン帝国の支配下にあったアラブ人に独立国家の擁立を約束するかわりに、イギリス側について戦うように誘導したのです。

さらにイギリスは、フランスとともにオスマン帝国を分割して、両国間で分け合う秘密協定(サイクス・ピコ協定(②))を結びます。

大戦後、オスマン帝国はトルコ、イラク、イランなどに分裂。「アラブ人の独立国家を擁立する」という約束が反故にされたため、元来この地に住んでいたアラブ人たちの多くは離散することになってしまいました。加えて、イギリス在住のユダヤ人たちの働きかけにより、イギリスはパレスチナのユダヤ人居住地を認可してしまいます。

こうしてユダヤ人によるイスラエルが建国されるのです。それまでパレスチナに居住していた人たちは追い出され、難民となってしまいます。結果、今なお解決の糸口が見出せない難題が生まれることになったのです。

◆国によって教義への理解や解釈が異なる実情

キリスト教を信仰する欧米文化が流入すると、中東諸国は急速に西欧化への道を歩み始めます。ただ、なかにはこの状況を危惧する人たちもいました。

彼らは、ムハンマド時代のイスラム教、つまりは正しいイスラム教に回帰し、強大な「イスラム共同体(ウンマ)」を取り戻そうという思想を掲げ、行動に移したのです。これを「イスラム復興運動」と呼びます。

イスラム復興運動は「原理主義(③)」とも呼ばれ、「シャリーア」に基づいて統治されるイスラム国家及びイスラム社会の建設と運営を理想とし、決して、暴力的なものではありません。問題視されているのは、この運動を行なう人たちのなかに、ごく少数ながらも「武力行為をしてでも理想を実現する」といった過激な考えを持った人がいることです。

イスラム教が掲げる教義への理解及び解釈は、国によって異なります。

たとえば、「ハナフィー学派(④)」が多いトルコでは、シャリーアでは認められている死刑を廃止しています。また、女性の伝統的装束である「ヒジャブ(⑤)」についても扱いはさまざまで、中東では着用が普通ですが、トルコでは禁止されています。

同じイスラム教の国であっても、その教えを順守する国もあれば、そうでない国もある——。この背景には、シャリーアの規定をどれだけ含めるのか、あるいは組み込むのが国によって考えや捉え方が異なる実情があるからです。

イスラム教の厳格な教えを順守する国では、女性や同性愛者への差別が激しいと非難の対象になることもあります。ただ、ごく一部の地域では、強姦された女性を「家族の名誉を汚すもの」と見なして殺害する(名誉の殺人)なる風習が残っているところもあるようです。

独立が相次いで起こった中東及び西アジア諸国



第二次世界大戦後に激化した独立運動

1951年	リビアがイタリアから独立
1952年	エジプト革命 (自由将校団による国王追放・7月)
1953年	エジプト共和国宣言
1954年	「アルジェリア民族解放戦線(FLN)」結成、 独立運動へ
1956年	ナーセルがエジプト大統領就任。 チュニジア、モロッコ、スーダンが独立
1958年	イラク革命(王政廃止)。 エジプトとシリア合併。61年シリアが離脱
1960年	「OPEC(石油輸出国機構)」が5カ国で発足
1962年	アルジェリア戦争終結(54年)、 アルジェリア独立
1963年	イラン、バフラヴィー2世の白色革命
1968年	「OAPEC(アラブ石油輸出国機構)」が 3カ国で発足
1969年	リビアでクーデター(王政廃止)

①フサイン・マクマホン協定

1915年に締結された協定。イギリスが、オスマン帝国の支配下にあったアラブ地域に対しては独立を認め、アラブ人のパレスチナ居住を認可する内容。メッカの太守であるフサイン・イブン・アリーと、イギリスの駐エジプト高等弁務官ヘンリー・マクマホンとの間で交わされた協定であることから、こう呼ばれる

②サイクス・ピコ協定

イギリスの中東専門家マーク・サイクスと、フランスの外交官フランソワ・ジョルジュ＝ピコによって原案が作成された協定。第一次世界大戦中の1916年5月16日にイギリスとフランスの間で結ばれた秘密協定。その後、帝政ロシアも加わる。内容はオスマン帝国領の分割を取り決めたもの

③原理主義

「根本主義」とも呼ばれ、英語の「**fundamentalism**」を日本語に訳した言葉。本来はキリスト教において、プロテスタントのモダニストに対抗する運動のことを指す。現代では、聖典を言葉通りに受け止め、実行しようとする宗教的な態度や、世俗主義に対抗する運動を指すことも多い

④ハナフィー学派

「スンニ派」における四大法学派の一つ。ムスリムのおよそ30%がハナフィー学派に属しており、一般に、もっとも寛容で近代的な学派であるとされている。女性の権利も比較的尊重されており、ほかの学派では女性本人の意思に関係なく婚姻が結ばれることもあるのに対し、ハナフィー学派は他者が本人の意思に反して結婚させることは認められていない

⑤ヒジャブ

「覆うもの」を意味する言葉で、「貞淑」「道徳」の意味もあるが、一般には、頭と体を覆う布を指す。イスラム圏の大半では、女性の一般的な装束だが、政教分離を定めるフランスなどでは、公共の場での着用は禁じられている。本来は女性の美を隠すためのものだが、レースをあしらったヒジャブなどをファッショナブルに着こなすムスリム女性も増えている

【ココがわからない!!】「スンニ派」と「シーア派」の違いがよくわかりません!!

イスラム教を知るうえで、絶対に避けては通れないのが「スンニ派」と「シーア派」という二大宗派の存在です。「預言者」のムハンマドが存命中の頃は、イスラム教に宗派はなく、一つにまとまっていた。

ところが、彼が亡くなったあと、後継者（カリフ）のイスをめぐって信者たちの間で対立が起こり、やがて二大宗派へと分裂することになったのです。

「ムハンマドの後継者」——つまりは次なる「カリフ」を誰にすべきか。

これは信者たちにとって〈死活問題〉でした。

そこで最初は、信者のなかから信頼が厚い者や長老が選出されます。

以降、アブー・バクル→ウマル・イブン・アル＝ハッターブ→ウスマーン・イブン・アッファーン→アリー・イブン・アビー・ターリブと、四代に渡って続くのです。この系譜を「正統カリフ時代」と呼んでいます。

◆四代続いたカリフのうち3人が暗殺される

じつは前出の4人のカリフのうち、3人は暗殺されているのです。

初期のイスラム帝国は、外部との戦争により、その支配下を拡大しました。

なかでも、一代目のアブーのあとを継いだ二代目のウマルは、歴代カリフのうちでイスラム帝国をもっとも強大にした人物です。ムハンマド時代にはアラビア半島だけのイスラム教でしたが、彼は西アジア一帯にまで広めることに成功します。その矢先、**メディーナ** ①のモスクで礼拝中に、奴隷により暗殺されてしまうのです。

三代目のウスマーンも、暗殺で命を落とします。

彼の時代には、侵略した国々やビザンツ帝国から反撃を受けました。本拠地であるメディーナでも、彼の政策に対して不満が蔓延している状態。そうしたなか、邸宅に押し入った反乱者の手によって、彼もまた暗殺の悲劇に見舞われてしまうのです。

◆「血筋」か「慣習」で分裂したムスリムたち

まるで呪われたように悲劇の連鎖が続くなかで、四代目のカリフに選出されたのが、アリーでした。彼はムハンマドの従兄弟であり、且つムハンマドの娘と結婚していました。ムハンマドの後継者問題が起きたとき、アリーも候補の1人に挙がりましたが、「若い」という理由で最終的にははずされてしまったそうです。その後、2人のカリフが暗殺されたことで、再びアリーに後継者のイスがめぐってくることになります。

しかし、アリーがカリフに就任することを快く思わないムハンマドの秘書の立場にあったムアーウィヤ、さらには一代目カリフのアブーの娘であるアーイシャが反発し、これを支持する信者たちも加わって、新たに「**ハワーリジュ派** ②」をつくります。対立する二つの勢力は、アリーとムアーウィヤの2人をカリフとして擁立するのですが、.....ハワーリジュ派の手によって、アリーも暗殺されてしまいます。

アリーの暗殺後、彼を支持していた信者たちは、「預言者のムハンマドの血を受け継ぐアリーこそが正統な後継者である」とする党派をつくります。

これが血筋を重視するシーア派の始まりです。

じつはシーア派は、ムスリム（イスラム教徒）のなかで占める割合は約15%と少数派。アリーの息子がササン朝ペルシアの王の娘と結婚したことにより、主にイランで支持されるようになったそうです。

一方、残りの約85%を占めるムスリムたちは「慣習や伝統を守ろう」という考え方に重きを置いており、慣習や伝統という意味の「スンナ」という言葉をとって、スンニ派と呼びます。ムハンマドの死後、ウラマー（宗教的知識人）たちがスンニを伝え残したものが『**ハディース** ③』と呼ばれ、イスラム法の「シャリーア」は『**コーラン**』と『ハディース』をもとにして定められたとされています。つまりスンニ派とは、「スンニにしたがう者」という意味なのです。

「メディナ」「マディーナ」とも表記される。アラビア半島東部の都市であり、メッカに次ぐイスラム第二の聖地でもある。ムハンマドが存命中は「ヤスリブ」と呼ばれていた。西暦622年頃、ムハンマドがメッカでの布教をあきらめてヤスリブへ移住したことを「ヒジュラ」と呼び、「ヒジュラ暦」の紀元となっている

②ハワーリジュ派

「ハーリジー（退去した者）」の複数形で、『コーラン』を絶対視し、「イスラム共同体（ウンマ）」を正當に保つことを重視する特徴がある。そのためカリフたるべき規範が厳しく、正しい道を踏みはずせば、ただちに資格をなく奪われるが、血脈や人種にかかわらず、すべてのムスリムがカリフになり得るとする。また、宗教上の罪を犯したムスリムは「カーフィル（不信心者）」と呼ばれ、非ムスリムと見なされる

③ハディース

ムハンマドが日常のなかで語った言葉や行為について、側近の信者たちの証言をもとにまとめた書物のこと。『コーラン』の「第一聖典」に対し、「第二聖典」とも呼ばれるが、はっきりと定まった書物があるわけではなく、イスラム法学者たちにより、多種のハディース集が編纂されている

【ココがわからない!!】「改宗しなければ殺される」——。それがイスラム教の教え？

ムハンマドの死後、四代に渡って続いた「正統カリフ時代」にイスラム帝国が急速に勢力を拡大したことは、すでに触れました。国が大きくなることは、つまりは他国との戦争で勝利したことを意味します。

「コーランか、剣か」——。

イスラム帝国が、異教徒の相手国に対して降伏を勧告するとき、この言葉をもって返答を迫ったと、世界史の授業で習ったはずです。

これは、「ジハード」において負けた相手は、「イスラム教に改宗しなければ殺されてしまう」といった過激な内容を意味します。

現在では、イスラム法の本質を表す意味合いとして、よく使われているようなのですが、.....実際には『コーラン』のなかにこうした言葉は出てきません。

では、ムハンマドが言葉として伝承したのでしょうか。

そのヒントは、『ハディース(①)』にあるようです。

◆イスラム教では信仰の道を無理強いはいしていない

数多く存在する『ハディース』の一つに、以下のような一文があります。

「ユダヤ人よ、イスラムを受け入れなさい。そうすれば身の安全を保証しよう(中略)。大地はアッラーとイスラムのものであり、イスラム教徒の我々は異教徒を追い出すことができるのだ。ただし、財産を持つものは、それを献上しなさい。もし、それにもしたがえないのであれば、大地はアッラーのものであることを知ることになる」

これはムハンマドの言葉なのですが、決して「生か、死か」を詰め寄っているわけではありません。また、「コーランか、剣か」ではなく、「コーランか、貢納か、剣か」が正しい解釈であることもわかるはずですよ。

『ハディース』にはいくつも種類があり、3択ではなく、「コーランか、剣か」のように2択も存在します。一部の過激な思想を掲げるイスラム原理主義者は、2択のものを自分たちの主義・主張を正当化するために使っているのです。

ムハンマドが呈した解釈と異なる解釈が、世の中に広まってしまった背景には、一部のイスラム原理主義者たちが異教徒に対して、極端な要求をしているのがメディアを通じて流布してしまったことが要因でしょう。

たとえば、戦闘員の捕虜が改宗を拒めば、司令官の判断で処刑が可能。処刑しない場合は奴隷にするか、身代金か捕虜交換により釈放、あるいは恩赦という選択肢です。また、非戦闘員の捕虜は処刑されることはありませんが、健康な成人男子はときとして扱いが違います。ゆえに民間人が捕虜となった場合は処刑される可能性もあるのです。

本来のイスラム教では、「アッラー」への〈絶対帰依〉を礎とした「イスラム世界を拡大、あるいは防衛するための戦争のみをよし」としています。

『コーラン』の第二章256節にある「宗教には無理強いということが禁物。すでにして正しい道と迷妄とは、はっきりと区別された。さればターゲット(②、邪神)に背いてアッラーの信仰に入る人は、絶対にもげることのない把手をつかんだようなもの。アッラーは、すべてを聞き、あらゆることを知り給う」からも、信仰の道は無理強いするものではないという考えがわかります。

「コーランか、剣か」ではなく、「コーランか、貢納か、剣か」という三つの選択肢こそが、イスラム教の本質を示しているのです。

①ハディース

ムハンマドが日常のなかで語った言葉や行為について、側近の信者たちの証言をもとにまとめた書物のこと。

『コーラン』の「第一聖典」に対し、「第二聖典」とも呼ばれるが、はっきりと定まった書物があるわけではなく、イスラム法学者たちにより、多種のハディース集が編纂されている

②ターゲット

「唯一神以外の存在でありながら、信仰の対象となっている者」を意味する。異教徒の神。具体的には偶像崇拝の神や多神教の神を指す。「シャイターン(キリスト教におけるサタン)」は、ターゲットの王的存在とされる。ター

グートもまた神に創造された存在ではあるが、高慢で人間を誘惑することもある。最後の審判のとき、神の前でターゲットの信者たちは自分の信仰を告白するが、ターゲットはそれを否認するとされる

【ココがわからない!!】イスラム教、ユダヤ教、キリスト教は、どうして仲が悪いのですか？

世界に目を向けると、誰もが知っている宗教が数多く存在します。

なかでも、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教は、その最たるものとして挙げられるでしょう。仏教(①)やヒンズー教(②)も信者数だけを見れば、前出の三つの宗教にひけを取りません。ただ、本書ではイスラム教、ユダヤ教、キリスト教にフォーカスして比較検証します。

じつは三つの宗教には共通する点があるのです。それは「一神教である」ということ。一神教とは、唯一の神のみを認めて信仰する宗教形態を指し、多神教の仏教やヒンズー教とは大きく異なります。また、意外なことに三つの宗教では、信仰する神も同じなのです。

ユダヤ教とキリスト教の聖典である「旧約聖書」で、神の教えを忠実に守った使徒のアブラハム(③)。彼はイスラム教の聖典『コーラン』にも登場しているためにイスラム教徒は、自分たちを「アブラハムの子」と認識しています。

そのほかにも、「アダムとイブ」「ノアの大洪水」など、旧約聖書と『コーラン』では共通した内容がたくさん見受けられます。

◆信じる神の教えに対する解釈がまるで違う!!

三つの宗教は、同じ唯一神を信仰しているにもかかわらず、たびたび衝突を繰り返しています。なぜか……。それは「神の教えにしたがう」という部分の解釈に違いがあるからです。

イスラム教では、「神は最初にモーゼ、次にイエス、そして最後に『コーラン』を通じてムハンマドに啓示を下した」と考えています。あくまで信仰の中心は神であり、モーゼやイエス、ムハンマドでさえも、宗教の創始者や神の言葉を伝える者ではなく、「宗教改革者」という位置づけで解釈されてきました。

ところが、ユダヤ教やキリスト教では、旧約聖書に出てくる神「ヤハウェ」の教えが人間によって歪曲されていると、イスラム教では考えられています。また、たとえ神の子でも人間のイエスが信仰の中心になっています。

このことが唯一の存在である神の教えを「ユダヤ教やキリスト教が歪めてしまった」と、ムハンマドは強く主張しました。「信仰の対象になり得るのはあくまで神であり、人間が対象になっているのはおかしい。イスラム教こそが正しい神の教えに回帰する宗教である」といったのです。

キリスト教では、「預言者」のイエスを神の子として認め、「神(ヤハウェ)」「イエス」「聖霊」の独立性を認めながらも「三位一体」で信仰しています。

一方、イスラム教で信仰するのは、唯一神である「アッラー」のみ。ムハンマドのことも〈一預言者〉として位置づけているのですから、同じ「預言者」である人間のイエスも信仰の対象にはなり得ません。また、キリスト教徒たちが、教会に「十字架」や「マリア像」を祀っていることも偶像崇拜(④)になるとして、イスラム教徒は強く否定しています。

以上のことは、あくまでイスラム教徒が主張するほかの二つの宗教との違いの一部です。聖書にある神の言葉や意思の解釈、それらが原点になっている生活上の習慣など、まだまだ多くの点で違いがあります。

同じ神を信じているのにもかかわらず、神の教えに対する解釈がまるで違うため、衝突を繰り返す三つの宗教。お互いがお互いを認め、尊重し合えば、争いもなくなくなるはずなのですが……そう簡単にはいかないようです。

3つの宗教を比較検証 !!

	 イスラム教	 ユダヤ教	 キリスト教
神	アッラー	ヤハウェ	ヤハウェ(エホバ)
信仰対象	アッラー	ヤハウェ	ヤハウェ、イエス、聖霊の三位一体で信仰
聖典	「旧約聖書」のうちの 「モーゼ五書」 「ダビデの詩篇」 「新約聖書」のうちの 「福音書」 『コーラン』	「旧約聖書」	「旧約聖書」 「新約聖書」
預言者	旧約・新約の預言者及びムハンマド	旧約の預言者	旧約及び新約の預言者
メシア	救済者は神のみ (ただし、「シーア派」には「マフディ」という救世主の概念がある)	終末時に現れるが、まだ登場していない	イエス・キリスト
聖地	①メッカ②メディーナ ③エルサレム	エルサレム	エルサレム
聖職階級	なし (ただし、法学者などが機能の一部を代行している)	あり (ラビ) ※宗教的指導者、学者のような存在	あり (神父や牧師など)
割礼	割礼は行なうが、 『コーラン』に記載はなく、慣例となっている	生後8日目に行なう	必須ではない (霊による ^o 心の割礼、という教えがある)
偶像	絶対禁止	絶対禁止	一応禁止だが、キリスト像などは偶像ではないとして公認(カトリック)
断食	「シャリーア」で法制化されており、ムスリムの義務	贖罪や懺悔のための断食を年6回行なう	一部の宗派や教会で行なわれている
安息日	金曜日	土曜日	日曜日

①仏教

紀元前4世紀頃（あるいは5世紀頃）、現在のネパールで始まったとされる宗教。神ではなく、仏陀が信仰の対象である。世界に約4億人の信者がいる

②ヒンズー教

インドを中心にネパールやバリ島などの人々に信仰されている。信者数は8億人以上いるとされるが、広がりアジアの一部に限定されている。自然崇拝の多神教

③アブラハム

「旧約聖書」の創世記第12章から登場する人物。神に対する揺るぎない信仰を守った模範としてイスラム教、ユダヤ教、キリスト教徒のすべてに畏敬の念を持って知られている。「信仰の父」「神の友」などとも呼ばれている

④偶像崇拝

神仏像や聖人像、あるいは樹木や岩石などの形象物を崇拝すること。偶像を崇拝することで、神仏や超自然力などの抽象的な信仰対象に具体的な姿を持たせ、人々に明確な信仰の対象を与えることができる。イスラム教では禁じられている

【ココがわからない!!】中東に住んでいる人は、すべてアラブ人ではないのでしょうか？

イスラム教における聖典が『コーラン』であることは、これまでも述べてきましたが、この聖典に記されている言語はアラビア語です。

アラブ人とは、アラビア語を母国語とする人たちを指します。

一般的に、「○○人」というときには、「国名+人」で考えますが、ことアラブ人に関しては、これにあてはまらないので注意してください。

さて、私たち日本人がアラブ人に抱くイメージは、こんな感じでは？

「男性は、浅黒い肌をして髭を生やし、ターバンを巻いている」

「女性は、黒いヴェールのような布で全身を覆っている」

こうしたイメージを持つのは、私たちのなかに「アラブ人＝ムスリム（イスラム教徒）」という間違った情報があるからです。

たしかに前出の格好は、イスラム教徒で多く見られますが、日本人がすべて仏教徒ではないように、アラブ人のすべてがイスラム教徒とは限りません。

彼らのなかには、キリスト教徒もいれば、ユダヤ教徒、**ゾロアスター教徒**（①）だっています。人種面で見ても、すべて黄色人種ではなく、金髪で白い肌をした人もいれば、黒髪に褐色の肌の人もいます。成長の過程で変化する人ももちろんいるでしょうが、たしかなことはさまざまな人種が混じり合っているということです。ただ、これにも理由はあります。

そこで、まずアラブと中東の言葉が意味する地域を把握しておきましょう。

アラブというのは、国名ではなく、地域の呼び名です。アラビア語を話す人たちが住む国々（地域）をまとめてアラブといいます。

一般的に、アラビア半島全域はもちろん、イラク、シリア、レバノン、パレスチナ、ヨルダン、エジプト、スーダン、リビア、アルジェリア、チュニジア、モロッコ、モーリタニアが、アラブ地域に属し、この地域に住んでいる人がアラブ人です。ココはきちんと押さえてください!!

一方、前出の国々に隣接しているものの、公用語が違う国があります。

トルコ、イラン、イスラエル、アフガニスタンの4カ国です。

たとえば、トルコはトルコ語、イランはペルシア語、イスラエルはヘブライ語、アフガニスタンはパシュトー語及びダリー語が公用語。ゆえにそれぞれ「トルコ人」「イラン人」「イスラエル人」「アフガニスタン人」と呼ばれます。

では、中東とはどこのことを指すのでしょうか。

じつはアラブに前出の隣接する国々を加えた地域の総称が中東なのです。

このことからアラブよりも中東のほうが、含まれている国の数が多いことがわかるでしょう。

◆中東がイスラム教徒だけの世界ではない理由

アラブと中東の違いは前述した通りです。ただ、もう一つ大きな誤解を持たれています。「中東＝イスラム世界」と捉えている人が多いことです。

イスラム教徒は、中東だけではなく、アジア地域にもたくさんいます。しかも彼らがもつとも多いのは、インドネシア。次いでパキスタン、インドと続きます。あくまで中東は、イスラム世界の一部を占めているだけであり、広域に渡って存在していることを知っておかなければなりません。

中東において、さまざまな人種や宗教が存在するようになったことを知るためには、歴史を遡る必要があります。

かつてこの地域は、**ローマ帝国**（②）の支配下にありました。ヨルダンやシリア、レバノン、エジプトは、その強大な勢力の傘下にあったのです。

ローマ帝国はキリスト教を信仰していたので、当然、そこはイスラム教の世界ではありませんでした。

ムハンマドの死後、「正統カリフ時代」になると、イスラム教徒たちによって、この地域が支配されるようになります。

ただし、彼らはキリスト教徒を〈根絶やし〉にはしませんでした。改宗は迫りましたが、それに応じたくない場合には貢物や税金を徴収することで、彼らの身の安全を約束したのです。結果として、この方針が、中東において多種多様な宗教を信仰する人たちが多くなり、且つ複雑な社会構造を生み出してしまう起因となったのは、皮肉なことだといえるでしょう。

①ゾロアスター教徒

古代ペルシアを起源とする善悪二元論的な宗教を信仰する人たち。開祖はゾロアスター（ツアラトゥストラ）。教義の特色は、善悪二元論と終末論。経典の『アヴェスター』によれば、世界は至高神であるアフラ・マズダー及びそれに率いられる善神群と、大魔王アンラ・マンユ及び悪神群の両勢力が永遠に闘争する場であるとされる

②ローマ帝国

都市国家だった古代ローマが、イタリア半島に誕生し、地中海にまたがる領域国家へと発展した時期の国家形態を意味している。最盛期には、地中海沿岸全域とブリタニア、ダキア、メソポタミアなど、広大な地域を支配した。シルクロードの西の起点であり、古代中国の文献では「大秦（だいしん）」の名で登場する

10 将来的には世界最大数に!? 増え続けるイスラム教徒

【ココがわからない!!】日本ではメジャーではない宗教が、世界中で受け入れられている。なぜ？

今や世界人口の約4分の1を占めるムスリム（イスラム教徒）——。

その信者数は、約16億人に達するといわれています。2100年頃にはキリスト教の信者数を超えるのではないかとという予測もあるとか。

地域別に見ると、最初に広がった中東、北アフリカに約3億人です。この地域だけでムスリムの全人口の約20%を占めます。もっとも多いのは、アジア及び太平洋地域で全信者の6割以上を占める約10億人に達するそうです。

西側諸国は、東側諸国に比べて、ムスリム人口の割合はずっと低くなります。

たとえば、アメリカでは500万人(①)を切ると推定されています。

欧州ではEU諸国のうち、西ヨーロッパに約1000万人。北欧や東欧はそれよりもずっと少なく、それぞれ100万人を切っているようです。

ロシアには約1600万人(②)のムスリムがいるとされています。

◆キリスト教から改宗する人たちが急増中!!

ムスリムが増え続ける要因は、さまざまです。もともと根づいていた地域で増加していることはもちろんですが、これまで触れる機会があまりなかったイスラムの教えに、テレビやインターネットといったメディアの普及が一役買っていることも間違いありません。

さらには交通手段が発達したことで、イスラム文化を身近に感じることができるようになったと指摘する声もあります。事実、第二次世界大戦前は10万人にも満たなかった聖地・メッカへの巡礼者は、近年では毎年300万人を超えているそうです。

ムスリムの人口の割合が高い地域、特に中東やアジアなどの地域では出生率が高く、ムスリムの子どもとして生まれれば、そのほとんどはムスリムとして生きていきます。「出生率の高さもムスリムの増加と密接につながっている」といえるわけです。

基本的に、イスラム教では堕胎や避妊を認めていません。

これはカトリック(③)などでも共通しています。それでもムスリムの人口が多い中東やアジアには、紛争が絶えない地域、あるいは生活環境が悪いために生後間もない幼児が命を落とす地域がたくさんあります。

こうした地域では、多くの子どもをもうけ、仮にそのうち何人かが命を落としても一族の血が絶えないようにする傾向があります。ゆえに欧米諸国よりも出生率が高いのです。

ところで、昨今、西欧諸国においてイスラム教に入信、もしくは改宗する人が急増していると聞きます。これは近代の西欧諸国の倫理観の変化(④)に憂慮する人たち、あるいは自国がイスラム圏の国々に対して行なっている行為への反発などが背景にあるそうです。

民族を超え、信仰を〈核〉として共同体をつくっていかうとするのが、イスラム教の在り方。そういう意味では、誰に対してもオープンである、そして富める者も貧しい者も皆平等という『コーラン』の教えも、間違いなくムスリムの増加を後押ししている要因といえるでしょう。

世界におけるイスラム教徒の分布

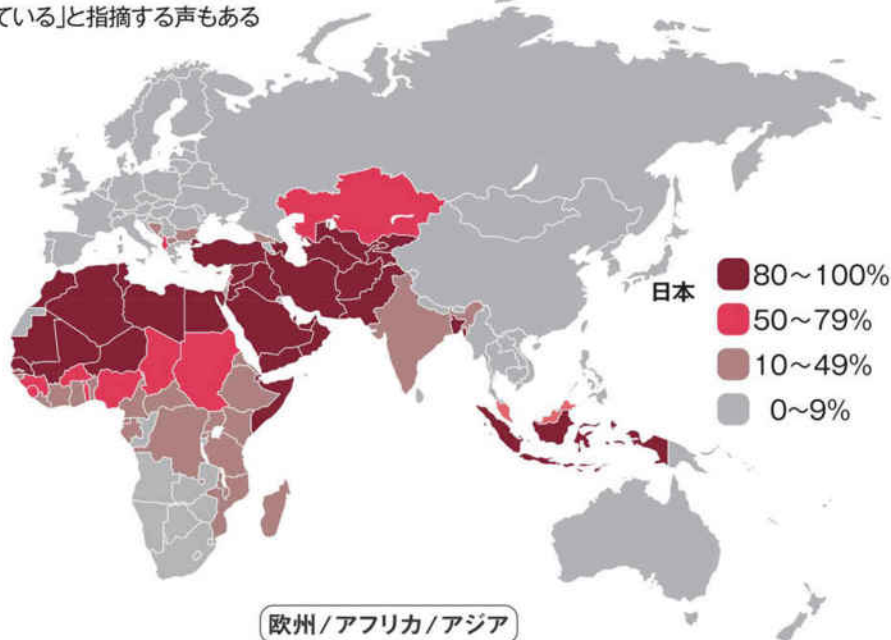
●中世

イスラム帝国の拡大と、貨幣経済の発展を背景に、ムスリム商人の活動の範囲が増加。陸路で中央アジアやアフリカ内陸に、海上貿易でアラビア海に進出し、インドや東南アジア、中国との交易を行なったことがイスラム教の広がりをもたらした

北米 / 南米

●近現代

移民によりイスラム教が広がったのに加え、キリスト教からイスラム教への改宗も増加。また、さまざまな要因でイスラム教への注目度が高まったことも、「信者数の増加につながっている」と指摘する声もある



①アメリカでは**500万人**

アメリカでは、自国の在り方に反発する人たちが、イスラム教に入信するケースが増加したというイメージがあるが、「祖先はイスラム教徒だった」と主張するアフリカ系アメリカ人たちは、以前から存在していた。こうした人たちは、過激な運動ではなく、貧民街での炊き出しなどをしながら少しずつイスラム教徒に対する偏見を是正していった

②ロシアには約**1600万人**

ロシアには、欧州のなかで最大数のムスリムがいる。ソ連崩壊により、ウズベキスタンなど、中央アジアのイスラム教徒が多い国々が分離したあとも、国内に多くのイスラム教徒を抱えており、さまざまな問題が生じている

③カトリック

キリスト教の分派の一つ。ローマ教皇をキリスト教の「高位聖職者」と位置づけ、聖書と並んでローマ教皇の教えにも権威が定められている。2世紀頃から始まったとされている。別の分派であるプロテスタントは、カトリックの体制に反発してルネサンス期に派生した

④西欧諸国の倫理観の変化

西欧諸国には、キリスト教を基礎とする倫理観が古くから根づいているが、近年になって、その倫理観に反するような物質至上主義、あるいは格差社会などが顕著になりつつある。社会の流れに不安や不満を持つ人たちが「イスラム教に救いを求めているのでは」と指摘する声もある

【ココがわからない!!】どうしてアジア圏で、イスラム教が受け入れられているの？

世界におけるムスリム（イスラム教徒）の分布を調べてみると、アラビア半島はともかく西アジアを中心に数多くいることがわかります。

なぜ広域に、しかも西アジアに多いのか.....。

そこには、イスラム帝国の勢力拡大の歴史が密接に関係しているのです。

イスラム帝国は「ウマイヤ朝」の時代、その勢力を東へと伸ばし、インド北部にまで到達しました。彼らが支配した地域の多くは、13世紀に独立するのですが、インドで初となる〈奴隷王朝〉というイスラム王朝が生まれました。

なお、この名称はインドが征服されたことにより、「イスラム帝国の奴隷になった」という意味ではありません。この王朝を開いたクトゥブッディーン・アイバクという人物が、**マムルーク（①、解放奴隷）**出身の将軍だったことに由来しています。

北インドを手中に収めたイスラム帝国は、地域に根づいていた風習や伝統、文化を尊重しながら、イスラム教を広めていきます。「イスラムの現地化」というべき同化がなされていったことで、多くの人たちから反発を買わず、且つ比較的スムーズに受け入れられたのではないかとわれています。

やがてイスラム教は、インド南部、パキスタン、バングラディッシュなどに広がっていきました。現在では、インドに約1億人、パキスタンとバングラディッシュで約1億5000万人、南アジアと東南アジア全体では約7億人というように、世界のなかでもアジア圏がもっとも多くのムスリムがいる地域になっています。

いつの時代も、飢えや貧しさが差別や階級社会をつくり出します。当時のアジア圏も同様でした。「誰もが皆平等」を掲げる『コーラン』の教えは、そうした社会に不平不満を抱く貧しい人たちの支持を集めたのです。彼らにとっては異教徒であるムスリム。ですが、『コーラン』の教えが彼らの救いとなったからこそ、アジア圏で浸透したのではないのでしょうか。

◆アジアとイスラムの文化が融合した世界遺産

アジア圏に浸透していったのは、イスラム教だけではありません。

イスラム独自の文化も、同時に浸透していきました。その産物である建築物や街並みなどは、現在、世界遺産として多くの観光客を魅了しています。

たとえば、代表的なものに「ファターブル・シークリー」「タージ・マハル」が挙げられるでしょう。前者は、インドのウッタル・プラデーシュ州にある都市遺跡の世界遺産。「勝利の都」という意味を持つ、ムガル帝国の第三代皇帝アクバルによって建設された都市です。

他方、後者のタージ・マハルは、ムガル帝国の第五代皇帝シャー・ジャハーンが、妻の死を悼み、アーグラ（ウッタル・プラデーシュ州の都市）に建設した世界でもっとも美しい霊廟の一つ。

りんね

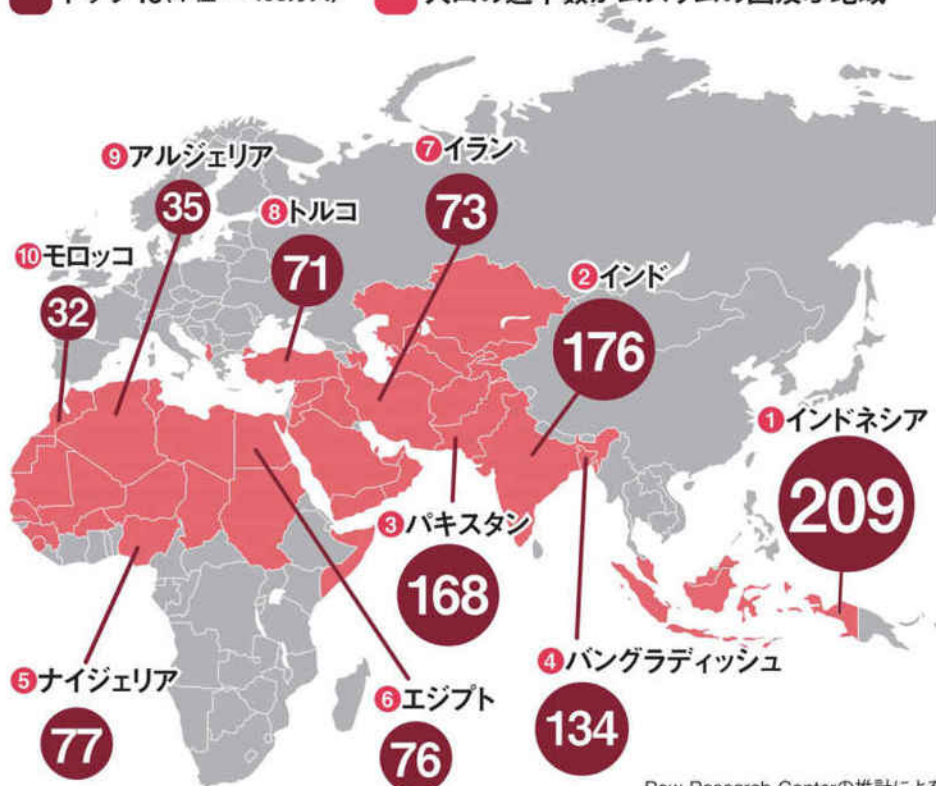
輪廻転生の思想を持つインドでは、それまで墓を建てる習慣がありませんでした。廟建築がもたらされるのは、イスラム帝国の侵入後で、もっとも発展したのがムガル帝国の時代。その象徴的なものがタージ・マハルです。

さらに、風習にもこうしたことは見受けられ、元来キリスト教徒ではない日本人がクリスマスを楽しむように、**ヒンズー教徒のお祭りの儀式（②）**と一緒に楽しむムスリムのグループが、地域によっていくつも存在しています。

インドネシアは世界で一番ムスリムが多い国

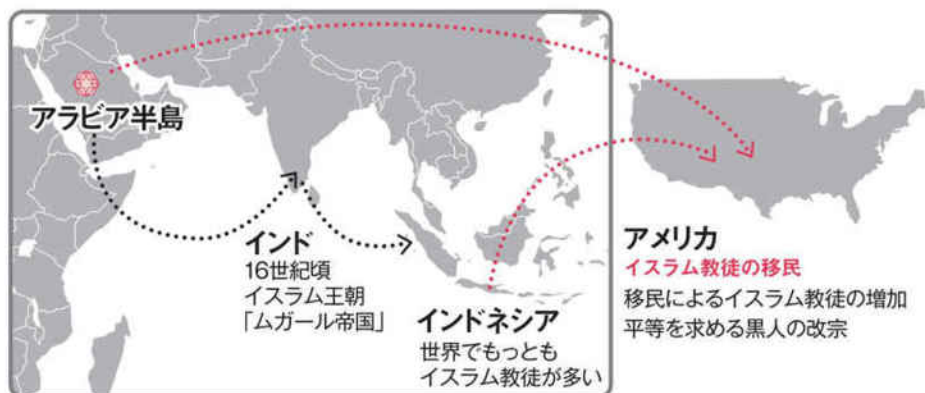
トップ10(単位 = 100万人)

人口の過半数がムスリムの国及び地域



Pew Research Centerの推計による
2010年時点。南スーダンは独立前

アラビア半島からアジアとアメリカに布教範囲を拡大



①マムルーク

イスラム社会において、法的に規定されていた身分だった奴隷出身の軍人。イスラム帝国が武力によって勢力を広げる際、各地で活躍したテュルク系（中央アジアを中心に広大な地域にいた民族の遊牧民）の奴隷出身の軍人たちを指す

②ヒンズー教徒のお祭りの儀式

豊かな収穫を願って開催される「バサント（**Basant**）」というヒンズー教徒のお祭り。恒例行事として行なわれる風揚げを、地域によってはイスラム教徒も一緒に楽しみ、逆にイスラム系団体による抗議活動を行なうなど、反応はさまざま

「人は死ぬと、生前に犯した罪によって天国か地獄へ行くもの」という思想は、仏教、キリスト教、そしてイスラム教においても共通なようだ。

天国とは楽園であり、永遠の若さと美しい乙女、豊富な果実や小川など、誰もが夢見るような場所。

こうしたことは、フランスのパリで起きた風刺画事件（2015年1月）にもあったように、わりと一般的なこととして知られているのではないだろうか。

ユダヤ教やキリスト教では、古代イスラエルに「シェオール」という冥府^{めいふ}があり、人は死ぬとその魂はそこにおもむくことになる。これが地獄を意味する「ゲヘナ」になったとされている。

人は死ぬと最後の審判を受けたのちに行き先が決まる。これが一般的な思想だが、.....ユダヤ教やキリスト教では、審判を受けることなくゲヘナへ向かうことになる。反対に善良な者は「エデンの園」へ行くと聞く。

このゲヘナとは、もともとイスラエルのはずれにある「ベン・ヒンノムの谷」を指した。

この場所では紀元前14世紀、いわゆるモーゼの時代から紀元前7世紀までの約700年もの長きに渡り〈生け贄〉として子どもを火あぶりにしてきた。このときの悪臭と火のイメージがゲヘナを地獄と同一視することになったようだ。

最後の審判を受けたあと、善良なイスラム教徒であれば、7層から構成される「ジャンナ（楽園）」に行くことが許される。

一方、悪人と判断された場合は、「ジャハナム（地獄）」へ行かなければならない。その場所は、激しく燃えさかる炎と深く暗い穴。その穴は巨大な怪物が大きく開いた口であり、罪人たちを次々に飲み込んでいく。また、深く暗い穴の底にはザクームの木が生えており、その実はまるで悪魔の頭のようなという。

罪人たちを待ち受けているのは、その実を腹が張り裂けるまで食べさせられる苦行である。

第2章

解決の糸口はどこに？ 欧米諸国と中東の複雑な関係

【ココがわからない!!】もともとは親米国家だったのに、何が原因で対立国家に？

イランはかつて「ペルシア」という国名でした。紀元前より「アケメネス朝」や「ササン朝」といった世界史上にその名を残す王朝が繁栄した国です。

そもそもイランは、ペルシア文明の発祥地でもあり、ペルシアの洗練された文化は、その後のイスラム文化に絶大な影響を与えました。事実、現在のイスラム文化として認知されている建築や書道、詩歌などの多くは、ペルシア文化にルーツを持つといわれています。

ムハンマドが興したイスラム教が誕生した頃は、アラビア半島よりもペルシアのほうが文明的に発展していました。また、**ゾロアスター教(①)**という(国教)があり、独自の宗教観を保有していました。その後、ゾロアスター教はイスラム教の席卷とともに衰退するのですが、ペルシアの人々は、自分たちの伝統的な死生観や宗教観をベースに、イスラム教を受け入れていきます。

ところで、イランの街並みを歩くと、不思議な感情にかられるはずです。

「イスラム教では偶像崇拝が禁止なのに、至るところで肖像画が掲げられているのは、なぜだろう」と。じつはイランは、ほかの中東諸国とは宗教観がまるで違うのです。イスラム教の国でありながらも、どちらかといえば、私たちの日本と同じアジア的な色合いが強い特殊な国だといえます。

◆アメリカの傀儡政権打倒!! に成功した国家

第二次世界大戦後、イランはアメリカの支援と石油資源を後ろ盾に、急速に経済発展を遂げ、西欧化の道を歩み始めます。女性蔑視の傾向が比較的に強かったイスラム教の国において、当時のイランはといえば、女性も社会進出を果たして、且つ参政権も認められる国家になっていたのです。また、高等教育のレベルの高さでも、中東諸国のなかでトップクラスを誇っていました。

厳しい戒律を重んじるアフガニスタンやサウジアラビアでは、まず考えられない国家へと、イランは変貌していったのです。

西欧化路線を歩んでいたイランでしたが、**1979年にイラン革命(②)**が起こります。アメリカの支援と石油資源によって、たしかに国家は驚異的なスピードで経済発展を遂げましたが、一方で農村人口が都市部に流れ込みインフレが激化していたのです。このことが富を得る者とそうでない者の圧倒的な貧富の差に拍車をかけたのも事実でした。

さらに、**1953年のモサデク首相の罷免、モハンマド・レザー・パフラヴィー国王の復帰、SAVAK(③)**の創設による国民の発言の規制など……。恐怖政治の管理下で国民の意思を無視した独裁国家という側面もあったのです。

イラン政府と、その背後に控えるアメリカへの国民の不満と怒りは、ついに頂点へと達します。**1978年にイスラム学校への補助金打ち切り**に抗議する大衆デモが警察隊と衝突。これを機に革命へと突き進むことになります。

翌年、事態を収拾できないと見た国王は国外へ亡命。イスラム法学者で、イランにおける「シーア派」の「十二イマーム派」の精神的指導者でもあった**ホメイニー師(④)**が「最高指導者(国家元首)」になり、「イラン・イスラム共和国」を成立させます。

ホメイニー師は、イスラム教を中心とした政教一致の国家運営を行ない、アメリカと激しく対立しました。また、イラン革命の成功は、中東諸国の若いイスラム原理主義者たちを奮い立たせる起爆剤となったのです。

20世紀のイランに関係する出来事

- | | |
|--|--|
| <p>1941 ●レザー・シャーが退位し、モハンマド・レザー・パフラヴィーが即位
●トウデ党創立</p> <hr/> <p>1942 ●ソ連、イギリス、イラン三国同盟条約の調印</p> <hr/> <p>1945 ●アゼルバイジャン自治共和国が樹立
●クルディスタン人民共和国が樹立</p> <hr/> <p>1946 ●アゼルバイジャン、クルディスタンの両共和国が壊滅</p> <hr/> <p>1947 ●アメリカと軍事協定締結</p> <hr/> <p>1949 ●モサデク財務大臣が国民戦線を結成</p> <hr/> <p>1951 ●石油産業国有化宣言が議会で承認
●モサデクが首相に就任</p> <hr/> <p>1953 ●国王がモサデク首相を罷免。ザーヘディー将軍を首相に任命</p> <hr/> <p>1954 ●コンソーシアム(国際石油財団)との石油協定成立</p> <hr/> <p>1957 ●諜報機関、秘密警察(SAVAK)を設立</p> <hr/> <p>1962 ●農地改革実施</p> <hr/> <p>1963 ●白色革命、国民投票で承認</p> <hr/> <p>1978 ●イランの都市・ゴムで学生(神学徒)抗議デモ。イラン革命の発端
●首都・テヘランのジャーレ広場の大量虐殺
●エマーミー首相が辞任。国軍参謀長アズハーリーが首相に就任。軍政へ移行
●首都・テヘランで大規模な反国王デモが勃発</p> | <p>1979 ●バフティヤールが首相に就任
●ホメイニー師がバリから帰国。革命政府を設置
●バーザルガーン暫定政府が権力獲得。イラン革命が成就
●イスラム共和制を問う国民投票、イラン・イスラム共和国宣言
●アメリカ大使館占拠及び人質事件が発生
●バーザルガーン内閣が総辞職。革命評議会が国政を運営
●国民投票で新憲法の承認</p> <hr/> <p>1980 ●大統領選挙にバニーサドルが当選
●イスラム議会開会
●ラジャーイー首相が議会で承認
●イラン・イラク戦争が勃発</p> <hr/> <p>1981 ●バニーサドル大統領が解任
●イスラム共和党本部爆破
●ラジャーイーが大統領に当選
●大統領選挙にハメネイ師を選出</p> <hr/> <p>1984 ●ペルシア湾危機</p> <hr/> <p>1988 ●イラン・イラク戦争が停戦に</p> <hr/> <p>1989 ●ホメイニー師が死去。「最高指導者」にハメネイ師を選出
●穏健派のラフサンジャニ師が大統領に当選</p> <hr/> <p>1997 ●穏健派のハタミ師が大統領に当選</p> |
|--|--|

※イランではペルシア語のため、ムハンマドは「モハンマド」となる

①ゾロアスター教

古代ペルシアを起源とする善悪二元論的な宗教。開祖はゾロアスター（ツァラトゥストラ）。教義の特色は、善悪二元論と終末論。経典の『アヴェスター』によれば、世界は至高神であるアフラ・マズダー及びそれに率いられる善神群と、大魔王アンラ・マンユ及び悪神群の両勢力が永遠に闘争する場であるとされる

②イラン革命

1979年2月に起こった革命。ホメイニー師を精神的指導者とするイスラム教「十二イマーム派（シーア派）」の法学者たちを支柱とする革命勢力が、モハンマド・レザー・パフラヴィーの専制に反対し、政権を奪取。正しいイスラム化を求める回帰運動でもあった

③SAVAK

イランの王政時代に設立された諜報機関。イラン革命後に「SAVAMA」という諜報機関ができた。今では「情報省」と呼ばれているが、「ヒズボラ」等を支援しているといわれ、欧米からたびたび非難を受けている

④ホメイニー師

イスラム法学者。パフラヴィー国王が始めた近代化政策の白色革命に猛反対し、1964年に追放される。「イスラム法学者が国家を統治すべき」と唱え、それに基づいてイラン革命を起こす。1989年6月に死去

【ココがわからない!!】ホメイニー師が担った「最高指導者」についてもっと教えて!!

もう少しイラン革命に関して突っ込んだお話をしておきましょう。

ホメイニー師とはどんな人物で、何をしたのか、彼が担った「最高指導者（国家元首）」とは何か……このあたりの知識は、イランという国をより深く知るうえで欠かせません。

イランでは、国民が選挙で選んだ大統領の上に、行政・司法・立法の三権及び軍事、国政全般における最終決定権を持つ最高指導者というポストがあります。

通常、大統領や首相といった国家を代表する立場には必ず任期がありますが、最高指導者は終身任期。つまり死ぬまでその立場を担うわけです。その最初の最高指導者に就いたのが、イスラム法学者のホメイニー師でした。

アメリカの影響下で政治を続けるイランの実情に憤りを覚えた彼は、国民からの支持に押され、1979年のイラン革命の成功とともに、最高指導者に就任します。以降はイスラム法学者によるイランの統治が始まりました。

ホメイニー師が所属する「シーア派」は、ムハンマドの娘婿で四代目カリフのアリーと、その子孫を指導者（イマーム(①)）として仰ぐ宗派です。

アリーの死後、十二代目のときにある大事件が起きます。突然、イマームが姿を消したのです。信者たちは指導者の失踪に戸惑い、やがて「イマームは意図的に隠れた。この世の終わりが来る直前に、彼は再臨するのだ」と、解釈するようになります。

そして、消えた十二代目のイマームが再び戻ってくるまでの間、彼の〈代役（中継ぎ）〉として、イスラム法学者を指導者にしようというのが、ホメイニー師の打ち出した理論でした。

◆死してもなお崇拜され続ける革命成功の立役者

ホメイニー師は「かの国こそ大悪魔」「信仰なき者たちの国」などと、激烈な言葉で、アメリカ批判を続けました。

そうしたなか、1979年の11月4日にムスリム（イスラム教徒）学生団が、イランの首都・テヘランのアメリカ大使館を占拠する事件が起きます（アメリカ大使館占拠及び人質事件(②)）。

大使館内に残されていた52人のアメリカ人が1年以上に渡り、人質として拘束されたのです。アメリカ大使館によるスパイ行為に対する怒りが要因だといわれています。事態を重く見たアメリカのカーター大統領（当時）は、この事件を機にイランとの国交を断絶します。

「国王を追放し、アメリカを追い払って、国交まで、断絶する」――。

強気な姿勢を前面に打ち出したホメイニー師。彼の功績は革命家や政治家ではなく、宗教学者による革命の成功例として、イランのみならず、中東諸国の若者たちにも多大な影響を及ぼすことになりました。

欧米諸国に影響を受けた傀儡政権やコピー文化ではなく、自分たちの文化や信仰による、自分たちの国をつくろうというエネルギーが国境を越え広がっていったのです。

ホメイニー師は、1989年6月3日にテヘランの病院で激動の人生に幕を下ろしましたが、今なおイラン国民から崇拜され続けています。

①イマーム

特に「シーア派」にとって、神と人間との仲介をする特別に神聖な人を指す。イスラムの開祖で「預言者」のムハンマドの一族（ムハンマドの従兄弟であるアリーの子孫）において代々継承された人しか、イマームになることはできないとされる

②アメリカ大使館占拠及び人質事件

1979年11月にイランで発生した事件。バフラヴィー前国王の引き渡しを要求し、アメリカ大使館に乱入した学生たちが館員を人質にとった。関係各国の調停は実らず、アメリカによるイラン原油全面輸入停止と、イランの対米原油輸出停止を同時に発表。石油断交の強硬措置がとられた

03 国境線をめぐる領土争いとクウェート侵攻を開始した「イラク」

【ココがわからない!!】なぜイラクはイランだけでなく、クウェートにも攻め込んだの？

イランとイラク.....一文字違いの国名で、且つ隣り同士の国が、1980年代に戦争を起こします。**イラン・イラク戦争(①)**です。

じつは当時、イランとイラクは、国境線をめぐる領土問題でもめにもめていました。問題の焦点に挙がったのは、ある川が存在でした。

両国の国境地帯には、全長約**200**キロにも及ぶ「シャトル・アラブ川」という名の川が流れていますが、この川の真ん中が国境線となっていました。

ところが、イラクの**サダム・フセイン(②)**大統領は、「シャトル・アラブ川は我がイラクのものだ！ イランの航行権は認めない！」と主張してきたのです。

フセインの主張の裏には、単にシャトル・アラブ川が両国の国境線だったことだけではなく、石油輸出のルートには不可欠な存在だったことも関与していました。つまりフセインは、川の領有権と航行権をイラクが持つことで、石油輸出における恩恵にあやかろうと企んでいたのです。

この頃のイランは、先のイラン革命の影響で、まだまだ国内は不安定な状況でした。むしろフセインには好都合です。「今のイランならば勝てる！ このチャンスを逃してはならない」と考え、イランに宣戦布告をします。

イラン・イラク戦争の勃発です。

近隣諸国やアメリカを筆頭に欧米諸国は、一斉にイラクの支援にまわります。イラン革命によってわき起こった反欧米路線をイラン一国に封じ込め、中東全域に浸透することを防ぐためです。

ホメイニー師が率いるイランは完全に孤立し、ほどなく自滅するかに見えました.....思惑はもろくも崩れ去ります。欧米諸国やイラクの予想に反して、イランとホメイニー師を崇拜する若き戦士たちのパワーはすさまじく、さら

にはイラン国民の徹底抗戦が繰り広げられ、戦争は こうちゃく 膠着 状態に。

最終的には、国際連合安全保障理事会（以降：安保理）の決議をイランが受け入れる形で停戦となります。その後、両国間の国交は回復しますが、イラクはこのあと湾岸戦争へと突入し、長年戦火に見舞われることになるのです。

◆サダム・フセイン大統領が掲げた大義名分

第一次湾岸戦争は、イラクがクウェートに侵攻したことで始まりましたが、その要因の一つは、**オイルマネー(③)**の存在でした。

イラン・イラク戦争で、国力が疲弊し切っていたイラクは、隣国のクウェートと、サウジアラビアの石油増産政策に対し、増産中止と石油価格の値上げを訴え続けていたのですが、一方的に拒否されてしまいます。

この仕打ちに強い怒りと憎悪に震えるフセイン。

その矛先は、まずクウェートに向けられたのです。

オスマン帝国の時代、イラクとクウェートに国境はありませんでした。イラクがイギリスの占領下にあったときに、イギリスが勝手に2カ国に分割し、先にクウェートが独立を果たした経緯がありました。イラク側にすれば、そんなことは認めていないため、ためらうことなく進軍を開始したのです。

こうした状況を危惧したのは、サウジアラビアでした。「次なるターゲットは自分たちかも」と――。サウジアラビアは、ある国に助けを求めます。

それはアメリカです。そもそもサウジアラビアは、イスラム教の国のなかでも戒律を重んじることで知られています。にもかかわらず、親米国家でした。

これは**1938**年にアメリカの石油会社が、サウジアラビアにおける最初の油田を発見し、その結果、貧困にあえいでいた砂漠の大国が、突如として中東屈指の〈大金持ち国家〉になり得た背景があったからです。

その後、「**アラムコ(④、アラビアン・アメリカン・オイル・カンパニー)**」が設立されます（※のちにサウジアラビアの国営企業となる）。つまり石油の恩恵を与えてくれたアメリカは、サウジアラビアにとって大切なビジネスパートナーだったわけです。

さて、イラクがクウェートに侵攻すると、先のイラン・イラク戦争ではイラクを支援していたアメリカを中心とす

る欧米諸国が、**多国籍軍（⑤）**を結成して、今度はイラクを攻撃します。第一次湾岸戦争の勃発です。

多国籍軍の空爆後に開始された地上戦からわずか**100時間**後、完膚なきまでに叩きのめされたイラクは、敗北を認め、停戦に応じます。

こうしてイラクからの攻撃を、未然に防ぐことができたサウジアラビアでしたが、停戦後もアメリカ軍が常駐し、圧倒的なアメリカの影響下での生活を強いられてしまいます。王族や政府高官は満足していましたが、国民、特にイスラム教徒は、不平不満が鬱積することに……。それもそのはず。サウジアラビアには、イスラム教の聖地・メッカやメディーナがあったからです。

やがてこの鬱積は、ウサマ・ビンラディンという恐ろしい人物を生み出すことにつながっていきます。

①イラン・イラク戦争

イランとイラクの間で**1980年**から**8年間**に渡って繰り広げられた戦争。近隣諸国や大国は、イラクを支援した。この戦争でのイランの勝利を米国を中心とする国際社会は許さず、イランの革命輸出路線を打破し、革命をイラン一国に封じ込めることに邁進したが、その結果、サダム・フセイン大統領が率いるイラク軍を強大化させてしまう。これがイラクのクウェート侵攻の伏線となった

②サダム・フセイン

イラク共和国の政治家で大統領、首相、革命指導評議会議長、イラク軍最高司令官を務めていた独裁者。大統領には**1979年7月**に就任

③オイルマネー

主に「**OPEC（石油輸出国機構）**」の加盟国の石油輸出による経常黒字で蓄積された資本を指す。**1973年**のオイルショック後、石油を高値で輸出することが可能となった石油輸出国には、多額のドルが流入するようになる。オイルマネーの動向は、国際金融界に多大なる影響を及ぼしている

④アラムコ

アラビア・アメリカ石油会社（**Arabian-American Oil Company**）の略称。サウジアラビアでの採掘権を一手に握っていた石油会社。アメリカ四大石油会社（シェブロン、テキサコ、モービル、エクソン）系。**1933年**にスタンダード・オイル・オブ・カリフォルニア（現シェブロン）が、**1999年**までの利権を獲得。その操業権を4社で共有し、アラムコを設立した

⑤多国籍軍

イラクに対する武力制裁やむなしとする安保理での決議を受け、アメリカ軍を主体に約**30カ国**の軍によって編成された連合軍。イギリスやフランスなどといった西欧諸国のほか、イスラム圏からはクウェート、サウジアラビア、パキスタン、カタール、バーレーン、オマーン、アラブ首長国連邦（**UAE**）、シリア、トルコ、エジプトなどが加わった

【ココがわからない!!】ソ連とイスラム勢力の問題に、なぜアメリカが介入してくる？

1979年に起きたイラン革命の影響は、近隣諸国にも大きな波となって押し寄せます。イランの東隣のアフガニスタンも、その余波を受けました。

アフガニスタンを筆頭に、タジキスタン、トルクメニスタン、カザフスタンなど、**スタンがつく国々(①)**はイスラム教の国です。また、アフガニスタン以外は地理的にソ連邦内にあり、共産主義の強い影響力を受けていました。そこに起こったのが、隣国のイランでの革命です。

じつはイラン革命の成功にもっとも危機感をつのらせたのは、ソ連でした。

ソ連の〈強い抑止力〉が有効的に働いている前出のスタン系の国々で、もしイランと同じような革命が起これば、自分たち共産主義者が、自分たちの都合のいいようにコントロールできなくなると感じていたからです。

アフガニスタンは、そのなかでもソ連がもっとも危険視する国でした。

当時、親ソ連の共産主義を推し進めるアフガニスタン政府に対して、国民は嫌悪感を抱き始めていました。共産主義的な婦人解放、土地改革、宗教からの解放を政府が強制したからです。

たとえば、母親を子どもから引き離して婦人学校に通わせる、土地を勝手に没収して分配する、子どもたちにはイスラムの哲学ではなく**ダーウィンの進化論(②)**を学ばせる.....など。こういった共産主義の価値観の押しつけに、アフガニスタンのムスリム(イスラム教徒)たちは、うんざりしていたのです。イラン革命がなくとも、いつ革命が起きてもおかしくない不安定な状態でした。

◆誇りを胸に大国と戦い続けたアフガンのイスラム教徒

アフガニスタン政府の共産主義に則った政策は、ソ連でも問題になっていました。彼らは再三に渡り、大使をアフガニスタンに送って、親ソ政権の方針の見直しを訴えましたが、アフガニスタンの首脳たちは応じません。むしろソ連からの大使に延々と説教するほどだったといわれています。

「何かが起こる前にアフガニスタンを完全に掌握しなくてはいけない」――。

危機感をつのらせたブレジネフ政権(当時)は、アフガニスタン内部の親ソ派政権の援助という名目で、大量の兵士をアフガニスタンに送り込みます。

これが**1979年**のソ連軍によるアフガニスタン侵攻です。

ソ連軍の侵攻に、アフガニスタンのイスラム教徒たちは武器を持って立ちあがります。そして、民族と国土、家族を守る戦いのなかで、多くの若き戦士が生まれました。名門・カブール工業大学の学生でありながら、北の辺境でソ連軍と戦い続けた北部同盟軍の司令官・**マスード(③)**も、その1人です。

貧しさと乏しい武器にもかかわらず、圧倒的な戦力を誇る大国に立ち向かったアフガニスタンの戦士たち。その戦いの方の高潔さや宗教的、禁欲的な生きざまは中東地域にも知れ渡り、彼らは「**ムジャーヒディン(④)、「ジハード」ををする者たち**）」と呼ばれるようになります。

しかし、衆寡敵せず。徐々にソ連軍の近代兵器の威力に追いつかれ始めます。

そこに登場したのが、アメリカでした。当時は東西冷戦の時代。アメリカはとにもかくにも憎きソ連を徹底的に痛めつけたい。そこで隣国のパキスタンを通じ、ムジャーヒディンたちに資金や武器を送り続けたのです。

アメリカの支援によって形勢は逆転します。結局、ソ連軍は約**10年**にも及ぶ泥沼の戦闘で散々な目に遭い、やがて撤退を余儀なくされたのです。

①スタンがつく国々

トルクメニスタン、ウズベキスタン、カザフスタン、タジキスタンなど、アフガニスタンの周辺には「～の土地」を意味するペルシア語「**stan**」の接尾辞を持つ国家が存在している。いずれもムスリムを多く擁する国であり、以前は「共和国」と呼ばれていたが、ソ連崩壊にともない、国名に「スタン」をつけて変更した

②ダーウィンの進化論

イギリスの自然科学者であるチャールズ・ダーウィンが唱えた進化論。多くの観察例や実験による傍証などの実証

的成果によって、進化論を仮説の段階から理論にまで高めたことで知られる。彼の進化理論は、多くの批判や反論を受けたが、一方では、多くの支持も得たために次第に影響を広げていくことになった

③マスード

アフガニスタンの政治家、軍人。ソ連軍のアフガン侵攻に際し、国民からの支持を得て、徹底抗戦したイスラム教の司令官。乏しい武器と貧しさのなか、アフガニスタン独立のために戦い抜いた激烈なる生きざまは、敵からも「パングシールの獅子」と称賛される。2001年に暗殺されるが、アフガニスタンでは、今も絶大な人気を誇る

④ムジャーヒディン

「ジハード（聖戦）を遂行する者たち」、転じて「戦士」を意味する。アフガニスタン内戦においては、共産主義政権に抵抗するゲリラ勢力の総称として用いられた。「タリバン」の「最高指導者」となるムハンマド・オマル師もムジャーヒディンとして戦闘に加わった経歴を持つ。サウジアラビア出身のウサマ・ビンラディンも加担した

【ココがわからない!!】「タリバン」とは何ですか？ 政府のこと？ それとも兵士のこと？

ソ連、そして共産主義という強大な敵がいたときは、結束して戦うことができたアフガニスタンの戦士たち。

ところが、ひとたび大きな敵がいなくなると、今度は民族間で内輪もめが始まります。タジク族、ウズベク族、パシュトゥーン族、ハザラ族という四つの民族が国家の主導権をめぐる激しく争うようになったのです。

このアフガニスタンの内戦を外から傍観し、「自分たちの意のままになる政権をつくるチャンスだ！」と目論んでいたのが、隣国のパキスタンでした。

パキスタン政府が目をつけたのは、多くのアフガニスタン難民キャンプの出身者によって構成された「**タリバン** (①)」という組織——。

タリバンとは「神学生」という意味ですが、イスラム教を教える学校の生徒であつたという前身から、そのまま名づけられました。

ソ連がアフガニスタンを侵攻した際、多くの難民が発生し、隣国のパキスタンへと逃げ込みました。難民キャンプで暮らす若者たちの純粋さや、愛国心に着目したパキスタンのイスラム原理主義「**デオバンド派** (②)」は、彼らにパシュトゥーン族のイスラム教師による、イスラム教育を施したのです。

◆難民の子どもに過激な思想を教育した末路

教師たちが教えた内容は、必ずしも『コーラン』にある通りの正しい解釈ではなく、やや偏りのあるイスラム教でした。この若者集団の利用価値を認めたパキスタンは、潤沢な資金と最新鋭の近代兵器を渡し、パキスタンからアフガニスタンへ再び送り返したのです。

タリバンは、アフガニスタン内部で内輪もめをしていた人たちを次々と駆逐していきます。ただ、そのやり方は、カリスマ的リーダーに引率されたアフガニスタンの「ムジャーヒディン」たちとは、本質的に異なるものでした。

当初タリバンは、軍閥を追い散らし、治安を安定させて秩序の回復に努めたので、住民たちは彼らを支持し、その活躍に期待を寄せていました。

ところが、タリバンはイスラム教の戒律を極端に適用し、服装の規制、音楽や写真、娯楽、女子への教育の禁止などを強制したため、住民の支持も徐々に失われていきます。

ときを同じくして、混沌としたアフガニスタンにウサマ・ビンラディンが戻ってきます。湾岸戦争時にサウジアラビアを批判して、国外追放の憂き目に遭った彼を、アメリカは〈危険人物〉と捉えていました。そのため、彼をかくまう逃亡先のスーダンへ圧力を加えます。スーダンにいられなくなった彼は、アフガニスタンに誕生していたタリバン政権を頼ることになるのです。

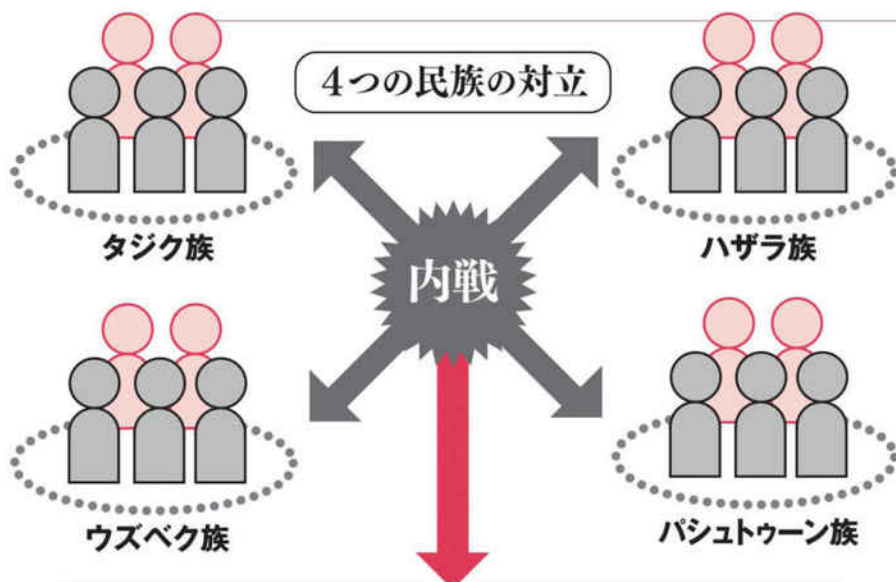
当初、タリバン政権のトップであるムハンマド・オマル師は、彼に疑惑の目を向けていましたが、次第に彼の率いる「**アルカーイダ** (③)」の洗練された戦い方と圧倒的な資金力を頼りにするようになります。

活動拠点を新たに見つけたビンラディンは、**2001年**にアメリカ同時多発テロ事件を起こします。アメリカのブッシュ大統領（当時）は、彼をかくまうタリバン政権に引き渡しを要求しますが、タリバン政権はこれを拒否!!

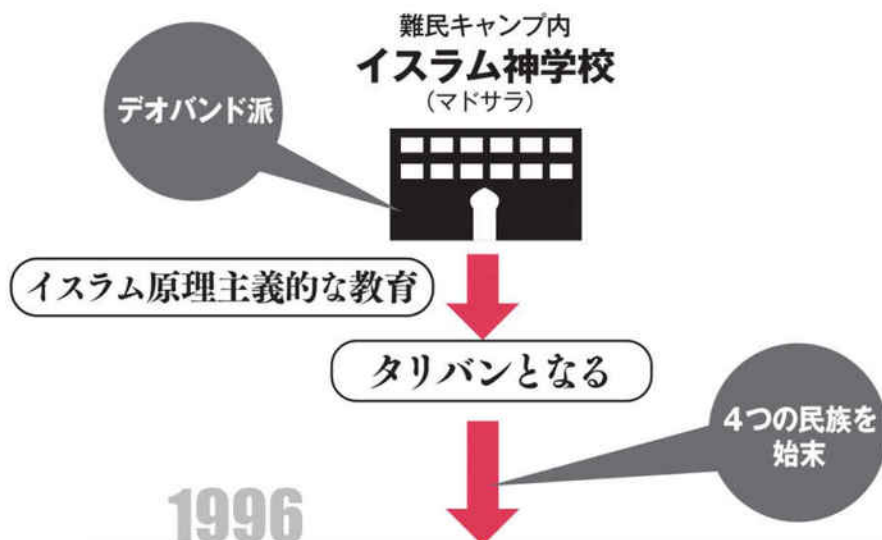
しかし、この判断は、タリバン政権の崩壊を意味していました。

2001年10月、アメリカは「NATO（北大西洋条約機構）」軍と**北部同盟** (④) の連携により、タリバンの支配地域に空爆を開始します。圧倒的な近代兵器の前に、なすすべもなくタリバン政権は敗れ去り、崩壊していくのです。

タリバン政権が樹立するまでの流れ



難民の子どもたちがパキスタンに逃亡



アフガニスタン制圧!! タリバン政権が樹立!!

①タリバン

1996年から2001年11月頃までアフガニスタンの大部分を実効支配したイスラム武装勢力。占領地域で「アフガニスタン・イスラム首長国」を樹立したが、国際的には一部国家を除いて承認されなかった。「最高指導者」は、ムハンマド・オマル師。彼はパキスタンのイスラム神学校出身であり、パキスタンから巨大な援助を得ての活動だったといわれている

②デオバンド派

イギリス領・インドのデオバンドに興った「スンニ派」イスラムの改革運動。ムガル帝国の衰退とイギリスの進出という状況のもとで生まれたインドの代表的なイスラム改革運動である。「タリバン」の指導部がパキスタンにおいてデオバンド派から分離した勢力の「マドラサ」で学んでいたことに加え、この学派がアフガニスタン国境に近い北西辺境州において有力な学派であることもあり、「タリバンへの思想的影響」と指摘する声もある

③アルカーイダ

ビンラディンが率いた国際的テロリズム支援組織。アルカーイダは「拠点」を意味する。世界各地のイスラム系のテロ組織と連絡をとり合い、訓練施設や軍事訓練を提供するなど、その活動を支援してきた。90年代以降、主としてアメリカを標的としたテロ行為を実行し、とりわけ2001年のアメリカ同時多発テロ事件は、世界中に大きな衝撃を与えた

④北部同盟

正式名称は、「アフガニスタン救国・民族イスラム統一戦線」。バシュトゥーン族を中心とする「タリバン」に対抗し、タジク族が主体のブルハヌッディーン・ラバニ派（「イスラム協会」）、ウズベク族のアブドゥラッシード・ドーストム將軍派（「イスラム民族運動」）、ハザラ族を主体とする「シーア派」の「イスラム統一党」などによって結成された

【ココがわからない!!】パレスチナはいったい誰のもの？

イスラム教、ユダヤ教、そしてキリスト教において、信者たちは神と人間との強固な約束の世界で生きています。ゆえに絶対的な存在の神から「この土地をおまえたちの故郷として与える」と、啓示を受けたとしたら……それは民族の運命を左右するような強い呪縛となり得るのです。

では、もしもその約束された土地を、異教徒たちが「この土地は我々の聖地であるから出て行け!」と主張し、いきなり自分たちの支配下に置いてしまったとしたら……いったいどうすればいいのでしょうか。

パレスチナ問題(①)とは、端的に言えば、こういう問題のことなのです。

遡ること数千年以上前、ユダヤ人(ユダヤ教徒)の聖典によると、パレスチナはかつて「**カナンの地(②)**」と呼ばれ、神が「ユダヤ人に与える」と約束した土地でした。その後、ローマ帝国が支配を拡大したために、ユダヤの王国は滅亡します。そのためにユダヤ人は神から与えられた大切な土地を失い、世界各地に離散しました。これを「**ディアスポラ(③、離散)**」と呼びます。

◆独自のスタイルを貫くユダヤ人への差別と迫害

約束の土地を追われ、ヨーロッパに渡ったユダヤ人たち。彼らを待っていたのは、キリスト教社会での苛烈な差別と迫害の嵐でした。

この背景には、イエス・キリストを銀貨30枚で敵に売り渡した裏切り者のユダがユダヤ人であったこと、キリスト教の文化にいつさい染まらないで自分たちの文化や伝統を守り続けたなどといった理由がありました。

世の東西を問わず、自分たちに馴染まず、頑なに独自のスタイルを貫こうとする集団は忌み嫌われ、やがてそれは差別や迫害へと変わります。

ユダヤ人たちのひたむきな姿勢は、現地の人たちから不快感をともなって受け止められたのです。

さまざまな職業から追われたユダヤ人たち。彼らがようやく就いた職業は、当時もつとも卑しい仕事とされた「金貸し」、つまり金融業でした。

しかし、ユダヤ人は誰もやりたがらないこの仕事に全力で取り組みました。

すると彼らのなかから、金融業で財をなす者たちが出てきます。

◆紛争のきっかけは国際連合が採択した分割案

独自の宗教と文化を異文化と同化させず、また、圧倒的な経済力を身につけた異教徒であるユダヤ人——。彼らは欧米社会から強い反発を受け、排除の対象となり、本格的に憎まれるようになっていきました。

やがて第二次世界大戦が始まります。そして、ヒトラー率いるナチスドイツによるユダヤ人の大量虐殺が起こるのです。

数千年以上の長い間、数多くの悲劇に見舞われ〈放浪の民〉であったユダヤ人。

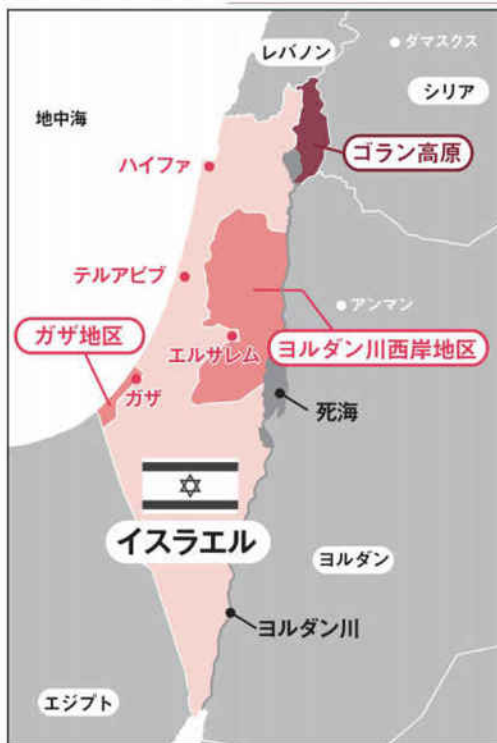
そんな彼らには、共通の願いがありました。

「カナンの地へ帰りたい」——望郷の念です。パレスチナへ戻ろうとするユダヤ人の運動、**シオニズム運動(④)**は急速にユダヤ人たちの間で広まります。

しかし、すでにその土地には、アラブ人が居を構えていたのです。

アラブ人にとって、ユダヤ人が戻りたがっている土地は、かけがえのない自分たちの住みか。ゆえに1947年に国際連合がパレスチナ分割案を採択した結果、ユダヤ人とパレスチナ在住のアラブ人との間で紛争が始まります。

イスラエルと隣接する国々



イスラエルの基本情報

- 面積** 2.2 万km² (日本の四国程度)
※上記にはイスラエルが併合した東エルサレムとゴラン高原を含む。ただし、この併合は日本を含めて国際的には承認されていない
- 人口** 約818 万人
(2014年5月 イスラエル中央統計局)
- 首都** エルサレム
※イスラエルは首都と定めているが、日本を含めて国際的には承認されていない
- 民族** ユダヤ人(約75%)
アラブ人その他(約25%)
(2014年5月 イスラエル中央統計局)
- 言語** ヘブライ語、アラビア語
- 宗教** ユダヤ教(約75.1%)
イスラム教(約17.3%)
キリスト教(約1.9%)
ドルーズ(約1.6%)
(2012年 イスラエル中央統計局)

出典：知らないとなんとなく世界の大問題 学べる図解版 第4弾
池上彰が読む「イスラム」世界

パレスチナ問題に関する重要な出来事

相次いで中心的な人物を失う!!

2004年	1995年	1993年	1973年	1967年	1956年	1948年	1947年
アラファト議長が死去	イスラエルのラビン首相が暗殺	オスロ合意 (パレスチナ暫定自治宣言)	第四次中東戦争勃発	第三次中東戦争勃発	第二次中東戦争勃発	イスラエル建国宣言。 翌日に第一次中東戦争勃発	国際連合がパレスチナ分割決議を採択

①パレスチナ問題

パレスチナの地をめぐって、イスラエル人とパレスチナ人（パレスチナ在住のアラブ人）の対立と紛争が続いている。発端は、第一次世界大戦後のアラブの分割にある。西欧諸国の都合で人工的に分割国家がつくられるなか、パレスチナに暮らすアラブ人には国家が与えられず、かわりにユダヤ人国家のイスラエルが建国されたのである。「同胞」意識の強いアラブ人にとって、パレスチナ問題は身内の問題であり、反イスラエルはアラブ共通の民族意識といえる

②カナン之地

別名「約束の地」は、ヘブライ語の聖書に記された神が、「イスラエルの民に与える」と約束した土地のこと。最初はアブラハムに与えられ（創世記15：18-21）、次いでその息子イサクに、さらにはイサクの息子でアブラハムの孫であるヤコブにも与えられた（創世記28：13）という

③ディアスポラ（離散）

ギリシア語で「散らされている者」の意味。ユダヤ人であってパレスチナ以外の地に移り住んだ人たちのこと。「難民」と「ディアスポラ」の違いは、難民が元の居住地に戻ってくる可能性を含んでいるのに対し、ディアスポラは離散先での永住を示唆している点にある

④シオニズム運動

イスラエルの地（パレスチナ）に故郷を再建しようとするユダヤ人の近代的運動。19世紀半ばから20世紀初頭、ユダヤ人への排斥運動がヨーロッパ各国で行なわれた時期に、ユダヤ人が自治する自分たちの民族国家をつくろうとする運動が始まる。ある新聞記者の呼びかけが大きな反響を呼び、ユダヤ人国家を建設しようとする本格的な運動へと発展していった

【ココがわからない!!】イスラエルができたことで、なぜトラブルになるのですか？

パレスチナ人（パレスチナ在住のアラブ人）にとって、イスラエルの建国は憤慨すべき大事件でした。先祖代々から受け継いできた土地に異教徒が現れ、国家を勝手に建設してしまったのですから、無理ありません。

このような暴挙は、国際関係上においても許されたいはずなのですが.....。

アメリカやイギリスといった欧米諸国の多くは黙認します。ユダヤ人の欧米における圧倒的な経済力、そして、反ユダヤ主義はあるものの、やはり〈兄弟宗教〉としてのシオニズムへの同情があったからです。

ユダヤ人は、ロスチャイルド家を筆頭に、欧州全域に渡って銀行などの金融施設を数多く設立しました。ユダヤ人の抜群の経済力は欧米社会に根づいており、彼らの巨大な富に依存する欧米諸国が多かったのです。ユダヤ人の富は、まさに彼らが血と涙と汗のもとに築いた民族を守る武器といえるでしょう。

イスラエルの建国宣言がなされた翌日、エジプト、シリア、ヨルダン、レバノン、イラクの5カ国で構成された連合軍が、イスラエルに攻め込みます。

これが**中東戦争（①）**の幕開けです。

こうして勃発した中東戦争は、大きいもので計4回に及びます。

第一次中東戦争では、アラブ側の兵力が約**15万人**以上に対し、イスラエル側の兵力はわずか**5万人**弱。兵力だけを見れば、圧倒的に不利なイスラエルでしたが、足並みが思うようにそろわない連合軍と二度に渡る休戦期間を経て、やがて双方とも国際連合の停戦勧告を受け入れることになりました。

なお、イスラエルでは、この戦争を「独立戦争」と呼んでいます。

第二次中東戦争では、エジプトがスエズ運河を国有化したことに激怒したイギリスとフランスがこの運河を取り戻すために、イスラエルとイギリス、フランスの3カ国が裏で手を握り、イスラエルにエジプトを攻撃させます。

続く第三次中東戦争においては、エジプトとヨルダンが攻撃を仕掛けてくる情報を事前に入手したイスラエルが、先制攻撃に出ました。

イスラエルは、一挙にエジプトのシナイ半島と、シリアのゴラン高原を占拠します。さらにはエルサレムの西側だけでなく、東側も支配下に置き、この場所を「イスラエルの首都である」と宣言してしまうのです。

◆未だ終わりが見えない土地をめぐる紛争

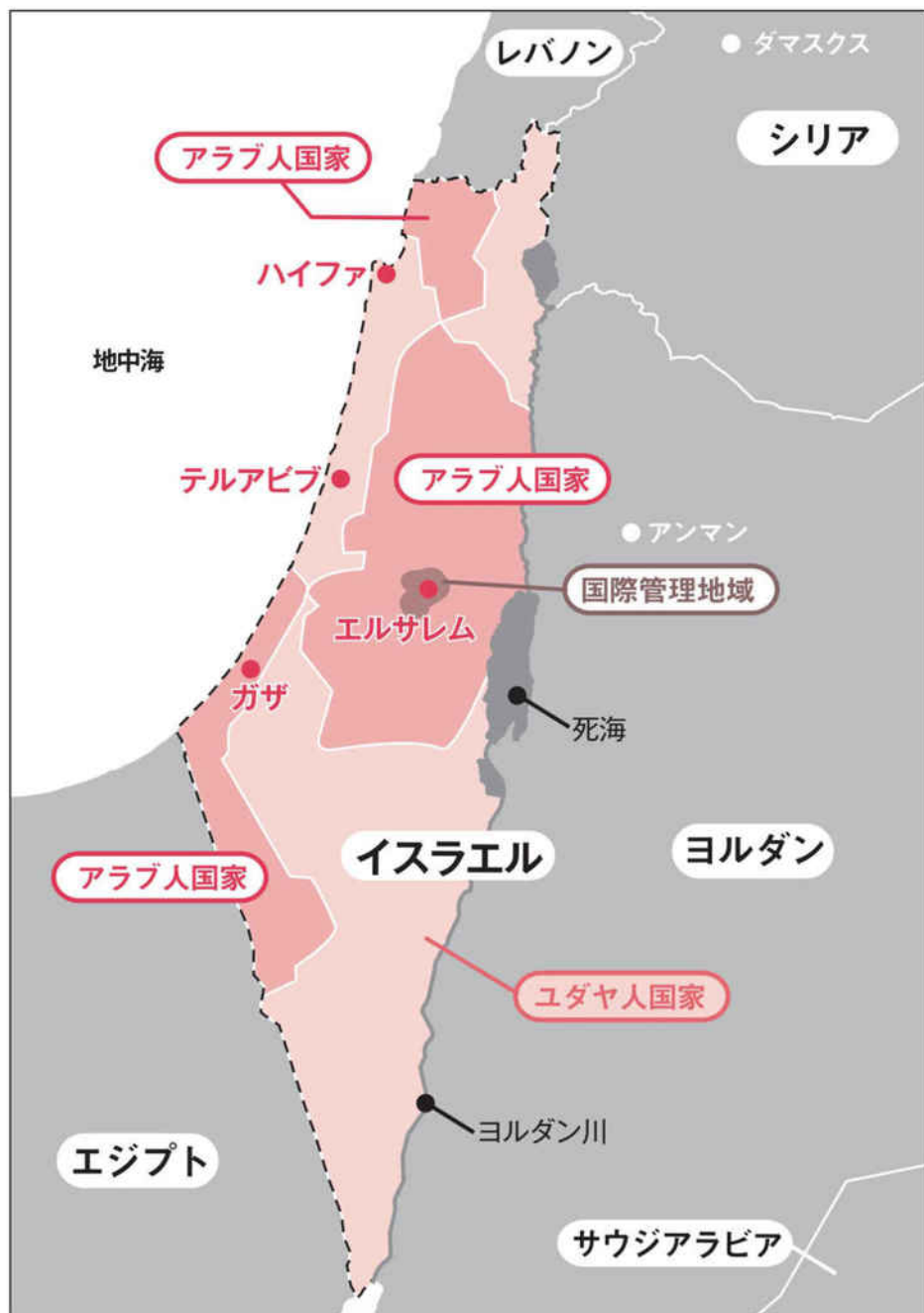
イスラエルをつくり出したユダヤ人たちは、邪魔になったパレスチナ人たちに徹底的な迫害を加えました。また、中東戦争によって、多くのパレスチナ人が土地を追い出されます。この追い出された人々を「**パレスチナ難民（②）**」と呼びます。「ナチスよりひどいユダヤ人」と、世界から非難されても、パレスチナ人への弾圧は続いています。敵対するパレスチナ人たちは、自爆や手製の爆弾などで応戦している.....これが実情です。

ユダヤマナーに依存する欧米諸国の黙認、武器の援助を背景に領土を拡大しようとするイスラエルに対し、パレスチナは**1964年**に「**P L O（③、パレスチナ解放機構）**」という組織を結成します。

1993年8月には、イスラエルとパレスチナの間で「**オスロ合意（④）**」が締結され、その結果、ヨルダン川西岸地区とガザ地区が「パレスチナ自治区」として承認されることになり、「パレスチナ自治政府」がつくられました。

しかし、これはさらなる紛争前のわずかな休息にすぎなかったのです。

国際連合の分割案による住み分け



①中東戦争

1948年から1973年までの間に起こった戦争。アメリカ、イギリス、フランスがイスラエル側に、ソ連がアラブ側に支援や武器供給を行なっていることから、代理戦争の側面もある。米ソにとっての中東戦争は、イデオロギーよりは中東地域による利権や武器売買など、経済的な動機が重きを占めていた

②パレスチナ難民

イスラエルの建国によって故郷を追われ、「パレスチナ自治区」と周辺国に逃れ出たパレスチナ人

③P L O（パレスチナ解放機構）

現在の「パレスチナ自治政府」の母体。当初は、武装闘争によりイスラエルからパレスチナを解放することを謳っていた。アラファトが議長になってから反ユダヤ主義的な傾向を退け、イスラエルが占有する領土を含めた全パレスチナに共存する独立国を樹立することを目標とした

④オスロ合意

1993年8月にノルウェーの首都・オスロでイスラエルとパレスチナの間で合意された協定。イスラエルを国家として、「P L O」をパレスチナの自治政府として相互承認することや、イスラエルが入植した地域から暫定的に撤退し、5年に渡って自治政府を認めることなどが約束された

【ココがわからない!!】せっかくできた「パレスチナ自治政府」が分裂した本当の理由は？

1993年8月に結ばれた「オスロ合意」で、「PLO（パレスチナ解放機構）」の**アラファト議長（①）**が平和な紛争解決を目指すことを表明しました。イスラエルのラビン首相（当時）もPLOをパレスチナ人の正式な代表として認めます。

これは歴史的な出来事でした。

ところが、交渉のキーマンであったラビン首相が、**1995年11月**に暗殺されると雲行きは怪しくなり、イスラエルとパレスチナの対立が再び激化します。

さらに迫りうちをかけるように、パレスチナの絶対的な指導者であったアラファト議長が死去。彼の死により、今までどうにか抑えられていたPLOの内部紛争が表面化することになったのです。

アラファト議長の配下には、穏健派から過激派まで、じつにさまざまな思想を持つ派閥が存在していました。そのなかに、ユダヤ人との共存共栄を否定する強硬派の「**ハマス（②）**」もありました。ただ、バランスを取ることが極めて巧みだったアラファト議長の政治力と統率力で、ハマスのような過激な思想を持つグループも抑えられていたのです。

そもそもアラファト議長が率いる穏健派の「ファタハ」の行ないを細かく見ていくと、彼らは主流派でありながらも、決して高潔な政党ではないことがわかってきます。世界各国から得た助成金は、ファタハの幹部が着服し、贅沢三昧の暮らしをしていました。アラファト議長の妻は、フランスのソルボンヌ大卒という才媛であり、彼女はパレスチナでの出産を嫌がり、バリで子どもを産んでフランスを拠点に生活していたのです。

一方のハマスは、子どもたちのための学校や多くの病院を建て、徹底して民衆側に立ち続けていました。ハマスの指導者であった**ヤシーン師（③）**は、幾度もイスラエル軍に捕らえられ、獄中で全身麻痺になりながらも車イス姿で抵抗活動を続けたそうです。

パレスチナにおけるヤシーン師の人気は絶大で、彼への尊敬はハマスの支持へとつながっていきます。

ところがヤシーン師は、家族に車イスを押してもらいながら礼拝に向かう道中、上空で待ち伏せしていたイスラエル軍のヘリコプターから無数の銃弾を浴びて暗殺されます。イスラエルの**シャロン政権（④）**による狙い撃ちだといわれています。

偉大なる老齢の指導者を、公の場で無残にも殺害するイスラエルの卑劣なやり方に、パレスチナの民衆は激昂し、ハマスの支持率は、さらに高いものとなっていきます。

◆イスラエルに翻弄される二つの政党

アラファト議長の死後、**2006年**の2回目の総選挙で、ハマスはファタハを抜いて、第一党となりました。「パレスチナ自治区」においても、ヨルダン川西岸地区を除くガザ地区でハマスが圧勝します。そして、ファタハが治める地域と、ハマスの治める地域に二分割されたのです。

2014年に両政党が歩み寄りの姿勢を見せ、いったんは和解して統一政府をつくる話し合いがまとまりました。

ところが、ハマスをテロリストと見なすイスラエルは、両政党が協調するのならば、中東和平交渉そのものを中断するとくどくどをかけてきます。

アメリカのオバマ大統領が仲介に入り、パレスチナの二国家共存に向けて話し合いが進んでいたはずが、再び白紙に戻ってしまうことになったのです。

①アラファト議長

パレスチナ解放機構の指導者。長らくパレスチナ解放運動においてイスラエルに対するゲリラの指導者として活躍。のちに穏健路線に転じて、**1993年**にはイスラエルとの歴史的な和平協定を成し遂げ「パレスチナ暫定自治政府」を建設する。**1994年**にノーベル平和賞を受賞したが、イスラエル側で和平を主導していたラビン首相が暗殺されてから、和平プロセスは停滞する。晩年はイスラエル政府やパレスチナ内の反対運動との対立に苦しめられた

②ハマス

イスラム主義を掲げるパレスチナの政党。**1987年**にヤシーン師によって創設された。ハマスが行なってきた草の

根民衆支援への評価や「ファタハ」が率いる「パレスチナ自治政府」への不満から、**2004年**に行なわれたパレスチナ地方議会選挙において過半数の議席を獲得。さらに、**2006年**のパレスチナ評議会選挙でも**132議席中76議席**を獲得するなど圧勝した

③ヤシーン師

イスラム主義組織「ハマース」の創設者。ヤシーン師は、ハマースの活動のため**1989年**にイスラエル軍事法廷で終身刑を宣告、投獄される。獄中での全身麻痺や失明といった辛苦に耐えつつ、イスラエルの完全撤退を訴え続けた。イスラエル軍によるヤシーン師の殺害に関しては、アナン国連事務総長をはじめ、数多くの国がイスラエルを批判する声明を発表した

④シャロン政権

アリエル・シャロンを首相とした政権。イスラエル史上、もっともパレスチナに強硬姿勢を貫くタカ派として知られている。一方で、彼はイスラエル史上、初めてパレスチナ国家の独立を明言した首相でもある

【ココがわからない!!】イスラム原理主義者のことを「テロリスト」と呼ぶのですか？

本来、「イスラム原理主義者」と呼ばれる人たちは、テロリズムと結びつく人たちと同意義ではありません。敬虔なクリスチャンや仏教徒と同じく、神の言葉を「預言者(①)」が信者たちに伝えてくれたままに、正しいイスラム教の教えに基づいた生活を取り戻そうという考えを掲げた真面目な人たちを指します。

イスラム教は、平和を尊ぶ宗教です。

自分たちの信じるイスラム法を信者たちが愚直に順守することで、正しい世の中へ導いていこうとする「イスラム復興主義」のもと、それを行なう信者が真のイスラム原理主義者なのです。

現に、私たちが「原理主義者」と呼んでいる人たちの大半は、テロ行為を嫌っていることはもちろん、「殺人は罪である」と考えています。

では、なぜテロリズムと結びつけられてしまうのか——。

世界にはあらゆる宗教の原理主義者が存在します。

そのなかでイスラム原理主義者が「狂信的で、且つ過激なテロ集団」と誤解されてしまうのは、彼らのなかに反米や反キリスト教、反共産主義と一体化した極めて暴力的な思想を持つ一群があるからです。その一群が世界各地で数々のテロ事件を引き起こしているからにほかなりません。

もう一つ、イスラム教における「ジハード」の捉え方にも要因があります。

◆「ジハード」は「イスラムのために努力する」こと!!

メディアを通じて、テロリストや一部の狂信的で、且つ過激な思想を持つイスラム原理主義者たちが唱える言葉には、必ずといっていいほどジハードが出てきます。また、一緒についてまわるのが「聖戦」という意味です。

彼らは、自分たちの卑劣極まるテロ行為の数々は、「イスラム教の教えを守るための聖戦である」と捉えています。この考えが一人歩きをして、メディアから発信されているために、「イスラム教におけるジハードとは、テロリズムである」と、私たちの多くは誤解しているのです。

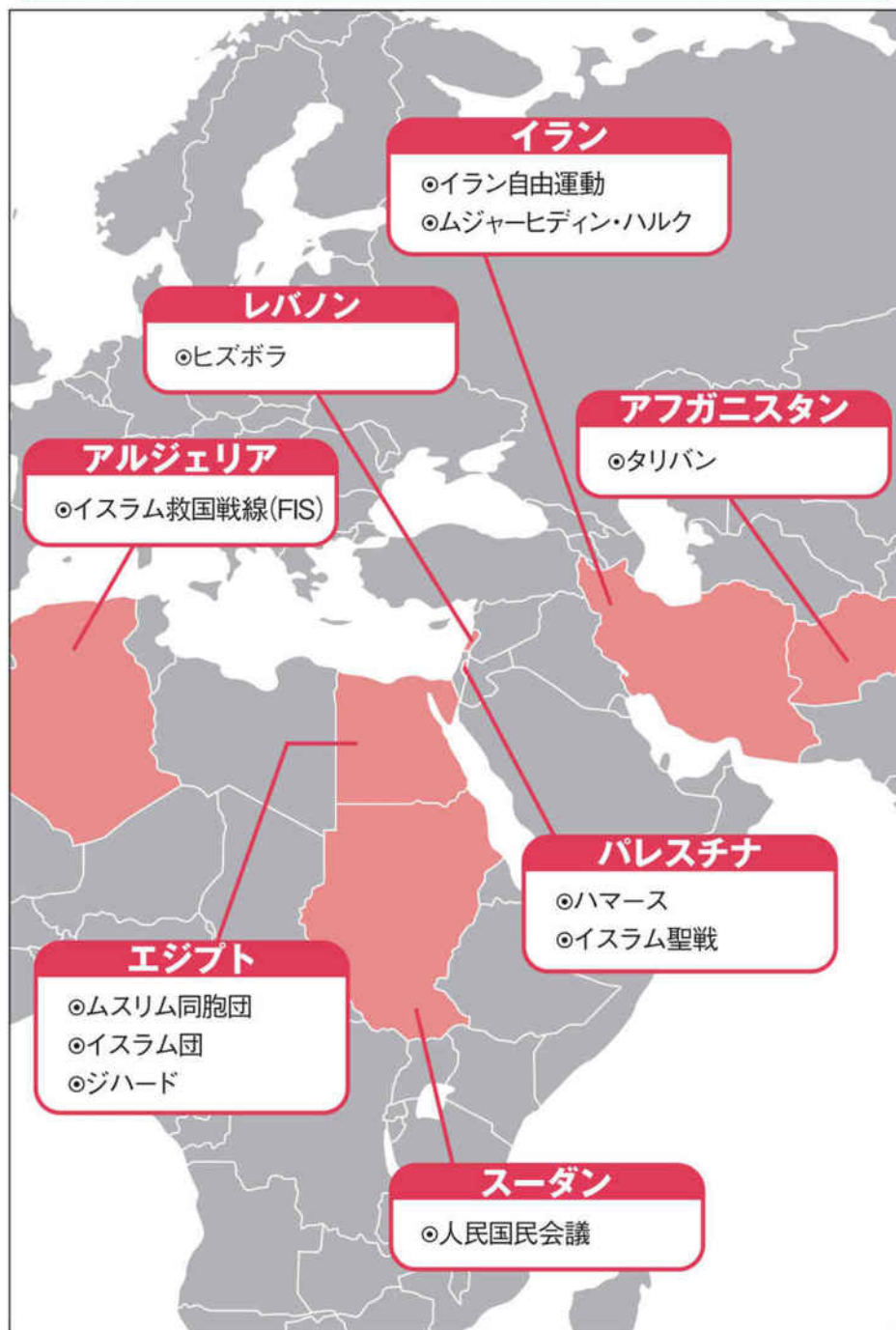
しかし、本来のジハードは「イスラムのために努力する、もしくは奮闘する」ことを指します。また、イスラム教の教えを守るのもジハードです。

さらに、異教徒がイスラムの土地に攻め込んできた場合に、防衛のためだけに戦うのもジハード.....つまり『コーラン(②)』に書かれているイスラム教の教えを忠実に守るならば、こちらから戦争を仕掛ける、もしくは攻め込むことは、ジハードとはいえません。あくまでも戦いは防衛のためだけです。

ところが、同じイスラム教徒でありながらも、テロリストや一部の狂信的で、且つ過激な思想を持つイスラム原理主義者たちは、『コーラン』に書かれている内容を独自に暴力を肯定する形で解釈しています。

イスラムの世界が、多くの人たちから本質とは異なるイメージで捉えられているのは、『コーラン』を独自の理論に基づいて都合のいいように解釈しているイスラム原理主義者たちがいて、彼らの言動や行動、行為だけをメディアが取りあげているからではないでしょうか。

中東及び北アフリカ地域の主なイスラム原理主義組織



①預言者

神から直接言葉を聞き、その言葉を広く人々に伝える者を指す。未来を予告する「予言者」とは違う

②コーラン

イスラム教の聖典。イスラムの信仰では、唯一神「アッラー」から最後の「預言者」に任命されたムハンマドに対して下された啓示とされている

一般的に、「戒律が厳しい」という認識があるイスラム教において、何がよくて、何が悪いのかの判断は、信者たちにも難しい問題のようだ。すべては『コーラン』に書かれているということだが、一覧表が載っているわけでもなく、結局のところは自分なりの解釈に基づいて判断するしかない。

とはいえ、好き勝手に判断すると教えに反する可能性がある。

やはり『コーラン』に書かれていることを理解する能力も必要だ。

イスラム教では「ハラル」と「ハラム」という分け方をしており、前者は「許されるもの」で、後者は「禁じられているもの」を指す。つまりハラルでないものは、すべてハラムということになる。この考え方でいくと、意外と理解しやすい側面も持ち合わせている。

たとえば、加工品で考えてみよう。イスラムにおいては、「ハラル認証」というものがあり、その印があれば「合格」の判定基準に達したことを意味する。よく知られているのが、ハラルミートだろう。この肉ならば食べても教えに背かないということになる。要するに、〈お墨つき〉があれば、安心して食べることができるのだ。

豚肉を食べることが禁じられているイスラム教。だが、使われていることを知らずに、うっかり食べてしまったとならないためにも知っておく必要があるだろう。葉や石鹼のような加工品でも同様だ。

ちなみに、インドネシアのある会社では、味の素のような製品をつくる際に触媒として豚の酵素が使われていたのだが、ハラムになるとされ、社長が逮捕されてしまった。

イスラム教では、生まれてから死ぬまでに起こるすべてのことは『コーラン』に定められているとされる。そして、それらのすべてが、ハラルかハラムに属する。人生における事柄のすべては、許されたものと、禁じられているものの二通りしかない以上、イスラム教徒は『コーラン』をきちんと解釈して、物事の是非を各々で判断しなければならないのだ。

第3章

「アラブの春」でも変わらない……イスラム世界の実情

01 フセインの独裁政権が崩壊!! 「イラク」に平和が訪れるはずだった

【ココがわからない!!】ブッシュ政権が掲げた方針は、イラクのためになったのですか？

世界中を震撼させた2001年9月11日の同時多発テロ事件に端を発して、アメリカのブッシュ政権（当時）は、「世界平和の実現には、中東を民主化しなければならない」と考えるようになります。そして、まずアフガニスタン、さらにはイラクを攻撃する方針を打ち出したのです。

2001年に始まるアフガニスタンへの攻撃は、同時多発テロ事件の首謀者とされた「アルカーイダ」及びウサマ・ビンラディンと、それを庇護するタリバン政権の転覆が目的とされました。

他方、2003年3月に始まったイラク戦争は、以下の二つが、アメリカの掲げた戦争を仕掛ける大義名分でした。「イラクが大量破壊兵器（核兵器）を隠し持っていることへの制裁」「サダム・フセインの独裁政権による圧政からイラク国民を解放する」

アメリカは圧倒的な軍力で、長らく独裁政治を敷いていたフセイン政権を崩壊させることに成功します。その後も軍隊をイラクに9年間も駐留させ、選挙による議会の設置や憲法制定などを進めて、一応は「民主的」といえる新しい政府を樹立しました。最終的には、大義名分の一つに掲げた大量破壊兵器（核兵器）は発見されませんでした。ただ、イラクの民主化による圧政からの解放というもう一つの大義名分は成し遂げられません。ところが、.....思わぬ大きな落とし穴）が、アメリカを、世界を苦しめることになるのです。

◆アメリカの思惑が予想外の事態へと発展!!

フセイン政権とは、イラクの**バース党（①、アラブ社会主義復興党）**による一党独裁政権を指します。アメリカは民主化政策を進めるにあたり、この一党独裁政権を徹底的に排除することに注力しました。

一党独裁政権下では、重要なポストに就くためにバース党へ入党していることが絶対条件でした。つまりバース党出身の人たちが国政を担っていたのです。

しかし、アメリカの圧力によって徹底的に彼らが排除されたことで、国家の機能が完全に麻痺状態になってしまいました。

そればかりか、職を失った軍や警察の幹部たちが反政府ゲリラを組織して、各地で武装闘争を始めたのです。少数民族の**クルド人（②）**の反乱も起こり、イラク国内は泥沼の内戦状態に.....。

さらに、バース党の壊滅によって、それまで抑え込まれていたイスラム主義が大きく台頭します。そして、イスラム教の二大宗派である「スンニ派」と「シーア派」の間で激しい対立が起こり、武力衝突へと発展。両派の対立は中東全域に波及して、さまざまな場所で紛争が起きるようになります。

アメリカの民主化政策は、世界の平和、イスラム社会の平和や民主化をもたらすはずでしたが、逆にイラク国内に収拾のつかない混乱と内戦を招来させてしまったのです。加えて、イスラム過激派の勢力拡大と日常的なテロ行為など、その後の中東の動乱へと続く足がかりをつくってしまいました。

①バース党

公式名は「アラブ社会主義復興党」。バース（バース）とは、アラビア語で「復興」「再生」を意味する。1947年、シリアのダマスカスで、「アラブの統一」「外国支配からの解放」「社会主義」を三大原則とする「アラブ・バース党」が結成され、その思想と戦略がアラブ諸国で広く支持されていった。イラク・バース党は1951年に結成され、1968年のクーデターで政権を獲得。2003年3月にフセイン政権が倒れるまで、長く一党独裁政治を続けてきた

②クルド人

トルコ、イラクの北部、イラン北西部、シリア北東部に居住する民族。人口はおおよそ2800万人と推定される。独自国家を持たない世界最大の民族であり、その多くはイスラム教徒。「スンニ派」が多数を占める

02「ジャスミン革命」を皮切りにアラブ諸国に伝播した民主化運動

【ココがわからない!!】「アラブの春」についてもっと教えて!!

2010年12月17日、北アフリカのチュニジアで、1人の青年が焼身自殺をしました。青年は街角で野菜を売って生計を立てていましたが、市の当局から何度も理不尽な摘発を受けて職を失い、死を賭して政府に抗議をしたのです。

イスラム教では、自殺や火葬は禁じられています。身体が消滅すると、この世の終末が来たときに〈復活〉できなくなるからです。

厳しい戒律を破ってまで自殺した青年の悲痛な叫びは、チュニジア国民に大きな衝撃を与え、独裁政権への不満と怒りを一気に爆発させました。

そして……チュニジア全土に大規模な反政府デモが起こったのです。

当時のチュニジアは、ベン・アリー（①）政権のもと、長く独裁政治が敷かれていました。そうした状況下で、前出の出来事を知った若者たちは、ツイッターやフェイスブックで情報交換を行ない、デモへの参加を呼びかけたのです。

2011年1月14日、数千人にも及ぶ民衆が内務省を包囲します。ベン・アリー大統領はサウジアラビアへの亡命を余儀なくされ、これにより約23年間に渡る長期独裁政権に終止符が打たれました。

これがチュニジアを代表する花の「ジャスミン」にちなんで名づけられた「ジャスミン革命」です。

◆次々に崩壊する中東地域を牛耳った独裁政権

ジャスミン革命の大きなうねりは、チュニジア同様に長期独裁政権のもとにあったアラブ諸国へと、またたく間に波及していきます。

エジプトは、その一例です。ムバーラク大統領（②）の独裁政権が約30年間もの長きに渡り続いていたエジプトでは、ジャスミン革命の成功から11日後の1月25日、首都・カイロをはじめとする各都市で、民主化を求める大規模な反政府デモが起こり、政府の治安部隊と激しく衝突します。

その後、反政府デモは次第に巨大化して、「追放の金曜日（③）」と名づけられた2月11日には100万人規模にふくれあがります。

迫りくる民衆の前に、ムバーラク大統領はなすすべなく失脚。全権を「エジプト軍最高評議会」へ委譲します。

これにより、また一つ長期独裁政権が崩壊したのです。

ときを置かず、今度はリビアで反政府デモが発生します。

2012年2月15日、拘留されていた人権派弁護士の釈放を要求するデモが、リビア東部のベンガジで発生、治安部隊との衝突で多数の死傷者が出ました。

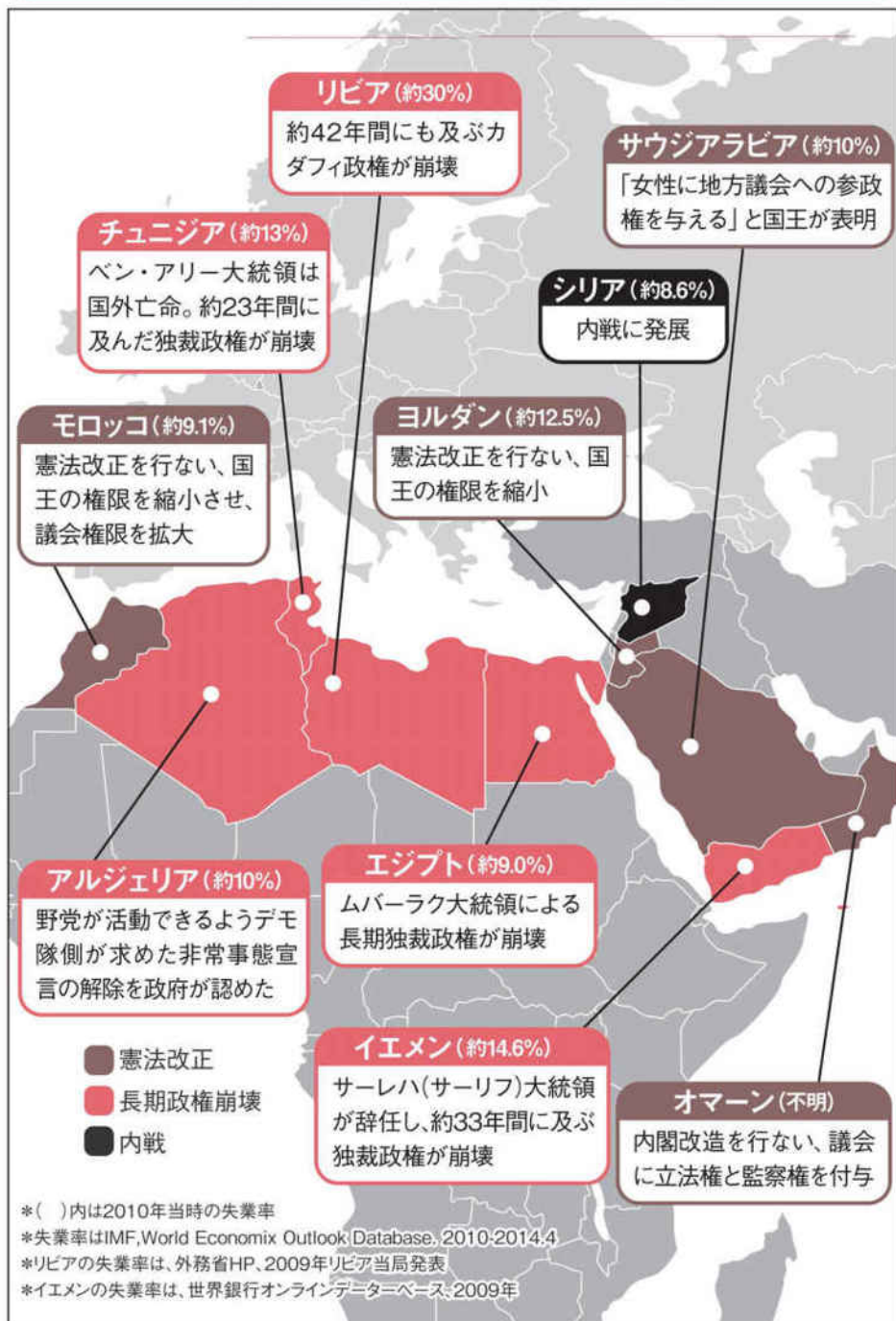
これに抗議するデモが、首都・トリポリなどで行なわれ、事態はカダフィ政権（④）と反政府派との内戦に発展。2月27日には、反政府派の勢力によって暫定政権の「リビア国民評議会」が設立されます。「NATO（北大西洋条約機構）」の軍事介入もあって、カダフィは出身地であるシルトで殺害されます。

さらに、「アラブの最貧国」と揶揄されるイエメンでも、2011年にノーベル平和賞を受賞した女性活動家のタワックル・カルマンが先導する民衆デモによって、サーレハ大統領が退陣に追い込まれ、長期政権が倒れました。

この民主化を求める一連の運動を「アラブの春」と呼びます。

なお、長期独裁政権の崩壊に至ったのは、チュニジア、エジプト、リビア、イエメンの4カ国だけですが、アラブ諸国22カ国（※パレスチナを含む）で、反政府デモが起きなかったのは、カタールとアラブ首長国連邦（UAE）のわずか2カ国だけだったといわれています。

「アラブの春」の経過と各国の失業率



①ベン・アリー

チュニジア国軍のエリート軍人の出身。1987年に大統領に選任され、民主化政策を推し進めて国民の高い支持を得た。その後も再選を繰り返し、23年以上も大統領であり続けたが、経済政策の失敗による高い失業率などで、次第に国民の支持を失っていった

②ムバーラク大統領

共和制エジプトの第四代大統領。ナーセル大統領に認められて空軍大将となり、第四次中東戦争で英雄となる。1981年、サダト大統領の暗殺により、大統領に就任。親米路線をとり、国内総生産を向上させる。一方で、強権政治を敷いて、貧困層やイスラム主義勢力の強い反発を招いていった

③追放の金曜日

2011年2月4日、イスラムの金曜礼拝の終了後、カイロのタハリール広場には、ムバーラク大統領の退陣を求める20万人の民衆が集まった。野党や民衆は「追放の金曜日」と銘打った大規模なデモを行なって、ムバーラク大統領の即時辞任と国外追放を要求。エジプト革命の勝利を決定づけた

④カダフィ政権

1969年、カダフィはリビア国軍の将校団を率いてクーデターを敢行、政権を奪取した。最高権力者となった彼は、イスラムと社会主義を融合させた国家体制の建設を進めていった。過激な反欧米主義を貫き、欧米から強い経済制裁を受けながらも、長期独裁政権を維持してきた

【ココがわからない!!】「ジャスミン革命」の成功は、「SNSだった」と聞いたけど.....本当？

リビアのカダフィ政権の打倒は、内戦と「NATO（北大西洋条約機構）」による軍事介入によって成し遂げられました。ただ、成功の裏で、たくさんの血と涙が流れたのは事実です。

他方、チュニジアやエジプト、イエメンなどで起きた民主化を求める革命は、武力に頼らない無血革命でした。

長期独裁政権が多い中東地域で、これまでも反政府運動やデモは、たびたび起こっていましたが、「革命」と呼べるほどの大規模なものは皆無に等しいのが実情でした。それが突如として民主化を求める動きが大爆発。いくら無血とはいえ、独裁政権下で革命が起きたことは、世界中に衝撃を与えました。

前出の無血革命に大きく貢献したのは、ツイッターやフェイスブックなどのSNSと、「**アルジャジーラ（①）**」だったといわれています。

アルジャジーラは、カタールに本拠を構えており、カタール政府や富豪たちの支援を受けて、イギリスBBCのアラブ人スタッフが開設した衛星テレビ放送局です。同時多発テロ事件の際も、ウサマ・ビンラディンのメッセージ映像を独占放送するなど、スクープ報道を連発して、世界にその存在を知られることになりました。

じつは中東地域では、新聞やテレビなどのメディアは厳しく監視・検閲されていますが、アルジャジーラは、カタール政府の肩入れもあつて、自由な報道を徹底することができていました。また、衛星テレビという特性もあつて、アラブ全域での視聴も可能でした。

この衛星放送が、民衆による反政府デモの盛りあがりを、国境を越えて伝え、革命の〈ドミノ現象〉をもたらす一因となったのです。

◆未来ある若者たちが起こした「ネット革命」

「アラブの春」をもたらした民衆のデモの最前列にいたのは、いずれの国でも若者たちでした。中東諸国は、若者の人口が多いことで共通します。

その若者たちは、独裁政権下で高い失業率に苦しんでいました。アラブの誇りを失ったような独裁政権の政治体制に加え、大学を出ても仕事がなく、将来にまったく希望を持ってない毎日……。ゆえに若者たちが、反政府デモに積極的に参加するのは必然だったのです。

そんな若者たちの手には、世界中の若者たちと同様に、携帯電話やスマートフォンがありました。

イスラム圏におけるインターネットの普及率は、世界基準で見れば、決して高いとはいえません。それでも若者たちは、携帯電話やスマートフォンを巧みに使いこなして、政府の監視の目が届きにくいSNSで、デモへの参加を世界中に呼びかけました。また、ユーチューブで、デモの臨場感を伝えて、抗議活動への参加者を爆発的に増やしていったのです。

衛星テレビ放送と、インターネットが伝えたものは、単に事実だけでなく、アラブ人としての誇りと自信でもありました。

チュニジアでの「**ジャスミン革命（②）**」に成功した民衆の歓喜の様子、誇りに満ちあふれた表情を伝えるメディアからの映像は、中東諸国や北アフリカのアラブ諸国の国民に「自分たちにもできる」「武力がなくとも革命は可能なのだ」という確固たる自信、そして勇気を伝播していったのです。

イスラム圏におけるインターネット普及率

北アフリカ

EU諸国との関係が深いモロッコはインターネットの普及に力を入れている

チュニジア	39%	リビア	17%
モロッコ	51%	エジプト	36%
アルジェリア	14%		



中 東

政情が不安定な国での普及率の低さが突出している

トルコ	42%	アラブ首長国連邦(UAE)	70%
イラク	5%	オマーン	68%
アゼルバイジャン	50%	イエメン	15%
イラン	21%	サウジアラビア	48%
クウェート	74%	ヨルダン	35%
アフガニスタン	5%	レバノン	52%
バーレーン	77%	シリア	23%
カタール	86%		

パキスタン



南・東南アジア

IT大国であるマレーシアの普及率が高い

インドネシア	18%
マレーシア	61%
バングラディッシュ	5%
パキスタン	9%

バングラディッシュ

ITU, Percentage of Individuals using the Internet 2000-2011/2011年時の値

「アルジャジーラ」の概要

開局: 1996年11月11日

出資: シャイフ・ハマド・ビン・ハリーファ・アール・サーニ (カタール首長)

本部: ドーハ (カタール)

海外支局: 23 (ロンドン、パリ、ワシントンD.C.など)

ジャーナリスト: 450人 (国籍では15カ国)

特派員: 70人

ニュース番組: 80回/1日

視聴者数: 中東…約3500万人、ヨーロッパ・南アフリカ…約1500万人



①アルジャジーラ

「ジャジーラ」とは、アラビア語で「島」のこと。アルと定冠詞をつけることで「アラビア半島」といった意味合いとなる。カタール政府を通じた経営という形をとるが、「公的で政治的圧力を受けない中東で唯一の報道機関」と、自認している。欧米など、外国メディアとは異なる視点を持ち、アラブ世界に深く入り込んだニュースを提供している。中東はもちろん、世界でもその存在感を高めている

②ジャスミン革命

ベン・アリー政権を打倒した、**2010年から2011年**のチュニジアでの民主化運動。同国を代表する花の「ジャスミン」にちなんで呼ばれるようになった。フェイスブックやツイッター、ユーチューブなどのインターネットが民主化運動の広がりを加速させ、無血革命を達成したことも花の名を冠するのにふさわしい。同様の民主化運動が、中東諸国やアラブ諸国に波及して、「アラブの春」の先駆けとなった

【ココがわからない!!】どうして中東地域には、独裁国家が多いのでしょうか？

ところで、中東地域では、なぜ何十年もの長きに渡って独裁政権が続いてきたのでしょうか。その背景を探てみると.....それなりの理由と正当性がありました。じつはチュニジア、エジプト、リビア、イエメンなど、「アラブの春」の攻撃対象となった独裁政権は、いずれも1950代から1960年代に起こった軍主導の民族革命に起源を持つ民族主義的な政権ばかりです。

第一次世界大戦以降、中東諸国の多くは、イギリスやフランスなどの西欧諸国に植民地として支配されてきました。

第二次世界大戦後に独立を果たしたものの、国政の実情は西欧諸国の意のままに操られた政府や王族による傀儡政権にすぎなかったのです。

アラブの名族のハーシム家を立てて、ヨルダンやイラクを間接的に支配したイギリスは、その代表例に挙げられるでしょう。

こうした状況に異議を唱え、真に民族の独立を果たすために立ちあがったのが国軍の将校たちでした。なかでも、1952年に自由将校団を率いてクーデターを敢行し、国王を追放させ、エジプト革命を成し遂げたナセル(①)は、エジプトはもちろん、アラブ世界の英雄となりました。

エジプトだけでなく、シリア、イラク、チュニジア、リビア、アルジェリアなどでも、国軍の将校たちが立ちあがり、王政や西欧の傀儡政権を崩壊へと導きます。民衆は、彼らを「独立の父」「民族解放の英雄」と讃えたのです。

◆民族政権への国民の期待が.....失望に変わる

こうして中東地域に次々と誕生した民族派の政権。それを全面的に支援したのが、ソ連などの共産主義を掲げる国でした。

当時、世界は米ソの冷戦時代(②)。アメリカや西欧諸国は、ソ連が中東の産油国に進出するのを恐れて、王政や傀儡政権の後ろ盾になっていました。それにとつてかわった革命民族政権を支援したのが、ソ連でした。ゆえに中東地域で相次いだ民族革命の闘争は、米ソの対立を反映している側面もあったのです。

世界でもっとも解決が難しいといわれるパレスチナ問題(③)も、各国の民族政権は「同胞」であるパレスチナを支援して、西欧の支援を受けるイスラエルと戦いました。数次に渡って繰り広げられた中東戦争などです。

こうした中東を、イスラムを、さらにはアラブ人を欧米諸国から守ろうとする行動の数々が、中東諸国の国民の心をつかみました。また、強力なカリスマ性を持ったリーダーのもと、強固な結束力も築いていくのです。

ところが、一党独裁で政権を長い年月に渡って維持するうちに、中東諸国の民族政権に〈ほころび〉が出始めます。

政府高官や軍人将校たちは特権階級化して、その座にあぐらをかき、さまざまな経済的利益を独占する有り様。腐敗や汚職も蔓延し、イスラエルとの戦いも徐々に有名無実化していく。パレスチナ問題も、中東諸国の各政権は見えて見ぬふりで、欧米諸国のいいなり状態。異議を唱える者は、治安警察や軍隊を使って徹底的に弾圧される.....。

これでは国民の期待も失望へと変わるのは、至極当たり前でしょう。

一向によくならない経済事情、抑圧されたままの自由、歯止めのかかない腐敗政治や汚職に、国民の我慢も限界に達します。やがて爆発した巨大なパワーは民主化を強く求める大きな波となり、中東の各地に波及したのです。

中東諸国の政治体制と各宗派の割合

王制：政党を禁止

- サウジ アラビア 女性の参政権が検討されている
- クウェート 首長が王族を首相に任命
- バーレーン 国王が王族を首相に任命
- カタール 首長が王族を首相に任命
- アラブ 首長が王族を首相に任命
首長国連邦 (UAE)
- オマーン 国王が首相、国防相、外務相などを兼務

王制：政党を許可

- モロッコ 第一党が首相を選出
- ヨルダン 国王が首相を任命

共和制：非民主主義

- リビア
 - アルジェリア
 - イエメン
 - スーダン
 - エジプト
 - チュニジア
 - パレスチナ
 - シリア
- 与党が強く野党が弱い
- レバノン
 - イラク
- 政局が不安定
- イラン
- 保守派と改革派が対立

共和制：民主主義

- トルコ 軍部の政治への影響が強い
- イスラエル パレスチナだけは占領地域



①ナーセル

1952年、自由将校団を率いて国王ファールーク1世を追放させ、エジプト革命を成し遂げる。その後、首相に就任してアラブ社会主義政策を推進する。革新的な汎アラブ主義と強力なカリスマ性で、またたく間にアラブ世界の英雄となる。第三世界のリーダーとして強い発言力を持った

②米ソの冷戦時代

第二次世界大戦後からベルリンの壁が崩壊する1989年まで、世界はアメリカを中心とする資本主義陣営と、ソ連を盟主とする共産主義陣営に分かれて対立を続けた。この東西冷戦は、中東諸国に大きな暗い影を落とした。豊富なアラブの石油資源を狙って南下を企むソ連、それを阻止したいアメリカ。中東地域は米ソの代理戦争の舞台となってしまう

③パレスチナ問題

パレスチナの地をめぐる、イスラエル人とパレスチナ人（パレスチナ在住のアラブ人）の対立と紛争が続いている。発端は、第一次世界大戦後のアラブの分割にある。西欧諸国の都合で人工的に分割国家がつくられるなか、パレスチナに暮らすアラブ人には国家が与えられず、かわりにユダヤ人国家のイスラエルが建国されたのである。「同胞」意識が強いアラブ人にとって、パレスチナ問題は身内の問題であり、反イスラエルはアラブ共通の民族意識といえる

【ココがわからない!!】民主化を目指したエジプト革命は失敗だったのですか？

民主化を強く求める若者たちの反政府デモによって、エジプトのムバーラク大統領は退陣に追い込まれます。軍を後ろ盾にした独裁政権の終焉です。

その後、全権を委譲されたのは「エジプト軍最高評議会」でした。

暫定政権を担うことになったエジプト国軍は、議会選挙と大統領選挙を実施します。その結果、**自由公正党** (①) というムスリム同胞団の政党が、ほかのイスラム政党と合わせて過半数となり、第一党を獲得します。そして、その党首であったムハンマド・ムルシーが大統領となりました。

しかし、**ムルシー政権** (②) による国政は、国民の期待を裏切る結果となります。インフレや高い失業率は一向に改善されず、また、ムスリム同胞団の掲げるイスラム主義に対する思想的反発も徐々に強まっていきました。

「これでは何のためのエジプト革命だったのか。結局は、失敗だったのか」

やがて国民の失望と、新政権に対する苛立ちがふつふつとわき起こっていったのです。新政権の誕生からおよそ一年後。再び国民は立ちあがります。

2013年6月、ムルシー大統領の退陣を求める大規模なデモと署名活動が行なわれ、エジプト革命時の人数を りようが 凌駕する大群衆が、**タハリール広場** (③) に集結したのです。その人数は2200万人にも達したといわれ、これはエジプト総人口の4分の1以上にあたる数でした。

民主化を求める革命が起きたにもかかわらず、国民の期待とは裏腹に、エジプト国内は混乱を極めていたのです。

◆国民からの期待が非常に高い暫定政権だが.....

事態の收拾に乗り出したのは、**2011年**のエジプト革命時と同じエジプト国軍でした。軍はムルシー政権の終焉を宣言し、大統領を拘束します。

その後も軍とムルシー元大統領を支持するイスラム主義の人たちとの間で、幾度も衝突が起こり、そのたびに多数の死傷者が出ました。

しかし、軍はムスリム同胞団の指導者や活動家をことごとく逮捕して、なかば強制的に事態を収め、暫定政権を擁立します。この暫定政権には、西欧式の高等教育を受けた〈文民エリート〉がずらりと並べられました。また、ムルシー政権打倒のデモにおける中心メンバーも、暫定政権に入閣させます。

こうして低迷するエジプト経済の立て直しに積極的に乗り出したのです。

「クーデター」と呼ばれたくなかった国民は、ムスリム同胞団を追い出した軍を称賛し、「第二革命だ」と喜びました。事実、支持率が80%を超えている点からも国民の期待度が、いかに高かったのかが見てとれます。

ただし、軍事政権特有の強権体質では、エジプトの政局、ならびに治安はまだまだ不安定なものであるといわざるを得ません。

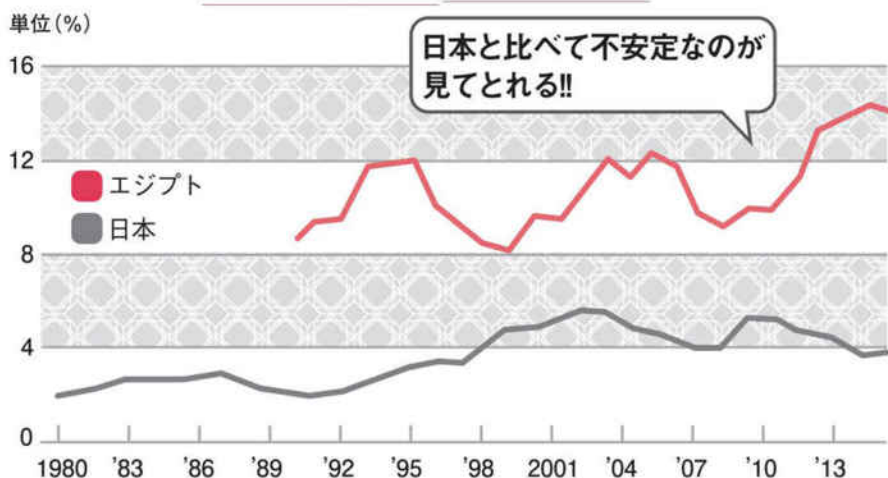
そうしたなかで政府は、ムルシー元大統領の支持母体であったムスリム同胞団をテロ組織に指定するなど、さらに弾圧を強めています。

対してムスリム同胞団は、反政府デモで政権打倒を目指し、治安部隊との衝突を繰り返しています。国民を巻き込んだ爆弾テロも起きているほどです。

もっとも不気味なのは、過激なイスラム主義勢力が、現在の**シーシー政権** (④) へのテロ行為を予告していることではないでしょうか。

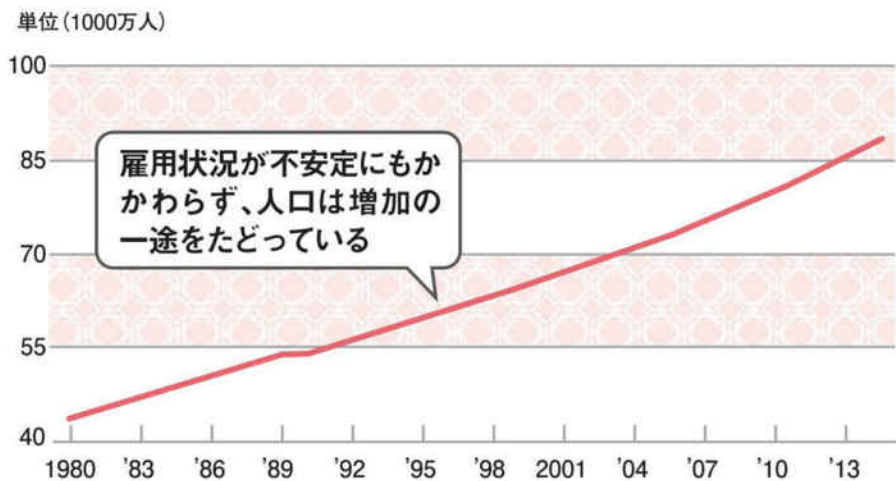
エジプトの政局と治安、そして民主化の将来は、未だ不透明であることだけは間違いありません。

エジプトと日本の失業率の推移 (1980~2014)



出典:IMF-World Economic Outlook Databases (2015年4月版)

エジプトの人口の推移 (1980~2014)



出典:IMF-World Economic Outlook Databases (2015年4月版)

①自由公正党

エジプトの首都・カイロに本部を置くムスリム同胞団が結成した政党。2011年のエジプト革命でムバーラク政権が倒れた直後に結成され、革命後の人民議会選挙で第一党となる。2013年のクーデターでムルシー政権が倒れたあとは、幹部が拘束され、党の解散が命じられるなどしたために、現政権への反発を強めている

②ムルシー政権

ムハンマド・ムルシーは、大学教授を務めるかたわら、自由公正党の初代党首となる。エジプト革命後には大統領に選出された。高い失業率を招くなどが原因で国民の支持を失い、軍とも対立。2013年のクーデターで大統領を解任された

③タハリール広場

エジプトの首都・カイロ中心部、ナイル東岸に位置する広場。19世紀の「ムハンマド・アリー朝」時代に都市計画でつくられ、当初は「イスマーイール広場」と呼ばれていた。1919年のエジプト革命後は、「解放」を意味するタハリール広場と名を改められた。国民による大規模な集会やデモは、この広場で行なわれるのを常とする

④シーシー政権

ムルシー大統領を引きずりおろした2013年のクーデター後、国防大臣だったシーシーが選挙で大勝して、第六代大統領に就任。エジプトの選挙管理委員会の発表によれば、得票率96%以上という驚異的な数字だった。就任後は、経済の浮揚を最優先課題とし、投資規制の緩和やインフラ整備を進めるなど、一定の成果をあげている。しかし、ムスリム同胞団による反政府活動や過激なイスラム主義勢力によるテロ予告など、治安上の不安は払拭されていない

【ココがわからない!!】首謀者を倒したのに、なぜテロ行為はなくなるらないのでしょうか？

それは1979年12月24日の出来事でした。

穏やかなイスラム教徒が住む平和な国家であったアフガニスタンが、突如として、**神を信じない共産主義者**
じゅうりん

(①)であるソ連軍に 蹂躪されたのです。

そこで、イスラムの土地を守るために「ムジャーヒディン(②)」と呼ばれるイスラム教徒たちは武器を携え、「ジハード」へと突入します。

アフガニスタン紛争の始まりです。

ムジャーヒディンは、ソ連軍に対して勇敢に戦い、それを見ていた周辺のイスラム教の国からも、仲間を助けるために続々と若者たちが応援に駆けつけてきます。ウサマ・ビンラディンも、その1人でした。

◆「アルカーイダ」の発祥地となったアフガニスタン

第2章04でも述べましたが、ソ連がアフガニスタンに侵攻したのは、連邦内にあるタジキスタンやトルクメニスタンなど、**スタンがつく国々(③)**でムスリム(イスラム教徒)による革命が起きることを危惧したからです。

革命が起これば、共産主義者のコントロールが広範囲において効かなくなります。そこで親ソ派政権の援助を目的として、大量の兵士を派遣したのです。これに対抗すべく立ちあがったのが、前述したムジャーヒディン——。

この紛争を、当時ソ連と冷戦状態であったアメリカは見逃しませんでした。隣国のパキスタンを経由して、武器や資金援助を始めたのです。

「短期間で制圧できるだろう」と、短絡的に考えていたソ連の思惑はもろくも崩れ、約10年にも及ぶ泥沼の戦争へと発展していきます。やがて国力が疲弊したソ連は、1989年2月15日に、軍の完全撤退を余儀なくされたのです。

ソ連軍の撤退後、平和が戻るはずだったアフガニスタンでしたが、今度はタジク族、ウズベク族、パシュトゥーン族、ハザラ族という四つの民族によって内戦状態に陥ってしまいます。

第2章05でも触れましたが、この内戦で多くのアフガニスタン難民がパキスタンに逃げ込みます。イスラム原理主義「デオバンド派」は、難民の子どもたちを集めてイスラム神学校をつくり、過激な教を植えつけていきました。

そして、パキスタンは自分たちに都合のよい政権を樹立させることを目的に、過激思想の戦士となった彼らに武器を供与して、再びアフガニスタンに送り返したのです。彼らが「タリバン＝神学生」と呼ばれる人たちです。

アフガニスタン紛争後、故郷のサウジアラビアに帰国したビンラディンは、第一次湾岸戦争の際に政府を激しく批判し、国外追放となったため、スーダンを経てアフガニスタンへと舞い戻ります。当時のアフガニスタンでは、タリバン政権が樹立しており、彼は厚遇されます。また、ムジャーヒディンも一度は帰国したものの、再びアフガニスタンに戻ってきていました。

ビンラディンは彼らを集めて〈反米テロリスト集団〉へと組織化し、「アルカーイダ」と呼ばれた過激派組織のリーダー的な存在になっていきます。

そして、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件をはじめとする、数多くのテロ事件を主導するのです。2011年5月2日、アメリカは**ビンラディンの潜伏先(④)**を急襲し、ついに彼を射殺しました。

しかし、アルカーイダの活動は、その後も続いています。たとえ組織としての求心力は低下しても、世界中に未だ圧政と差別を強いられている民衆がいる限り、根絶は不可能だといわれています。

①神を信じない共産主義者

共産主義の特徴の一つは、富を人々が共有することである。中世社会では、王権は神から付与された神域とされ、富すら神の思召しとして世襲された。共産主義はこうした制度を否定し、変革したことから始まっている

②ムジャーヒディン

「ジハード(聖戦)を遂行する者たち」、転じて「戦士」を意味する。アフガニスタン内戦においては、共産主義政権に抵抗するゲリラ勢力の総称として用いられた。「タリバン」の「最高指導者」となるムハンマド・オマル師もムジャーヒディンとして戦闘に加わった経歴を持つ。サウジアラビア出身のウサマ・ビンラディンも加担した

③スタンがつく国々

トルクメニスタン、ウズベキスタン、カザフスタン、タジキスタンなど、アフガニスタンの周辺には「～の土地」を意味するペルシア語「**stan**」の接尾辞を持つ国家が存在している。いずれもムスリムを多く擁する国であり、以前は「共和国」と呼ばれていたが、ソ連崩壊にともない、国名に「スタン」をつけて変更した

④ビンラディンの潜伏先

パキスタンの首都・イスラマバードから北東に約60キロの位置にある地方都市・アボッターバードで、2005年完成の3階建て豪邸に潜んでいた。建物の周囲は有刺鉄線に覆われた塀で囲まれ、出入口も厳重にガードされていた

【ココがわからない!!】アメリカを中心とする連合軍は、なぜアフガニスタンに攻め込んだの？

2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件は、「国際テロ組織のアルカーイダの仕業である」と、当時のブッシュ政権は断定しました。

そして、アフガニスタンのタリバン政権の庇護下にあったアルカーイダの指導者であるウサマ・ビンラディンをはじめとする、アルカーイダ幹部の引き渡しをタリバン政権に要求したのです。

以前からアメリカは、タリバン政権に対し、ビンラディンとアルカーイダの引き渡しを再三に渡って要求していました。

ところが、タリバン側は今回も引き渡しを拒否します。ついに業を煮やした**ブッシュ大統領(①)**は、事件からわずか1カ月後に「凶悪なテロリストをかくまう者(国)も同罪」とし、アフガニスタンへの攻撃を決定したのです。

◆タリバンの脅威に毅然と立ち向かう新国家

2001年10月2日、「NATO(北大西洋条約機構)」軍は、「**集団的自衛権(②)**」を発動。アメリカとイギリスを中心とする連合軍は、7日から空爆を開始しました。また、タリバン政権により、アフガニスタン北部へと追いやられていたタジク族やウズベク族たちによって組織された「北部同盟」も、連合軍とともに戦いに参加します。

そして11月13日には、首都・カブールの制圧に成功したのです。

連合軍は、近代的で圧倒的な軍事力を有していたために、タリバン側の戦力はまたたく間に粉砕されてしまいます。戦闘は、開戦からわずか2カ月ほどで終結し、タリバン政権は崩壊。ただ、アフガニスタンの国内が混乱状態だったため、アメリカ軍は約2万人の部隊を駐留させることにしました。

2001年12月22日には、**ハーミド・カルザイ(③)**を議長とする暫定政府、それに暫定行政機構が成立。2002年6月には、カルザイを大統領とする「アフガニスタン・イスラム移行政府」が成立します。

同年7月6日、**ハジ・アブドゥル・カディール(④)**副大統領が暗殺されます。

この暗殺事件は、アフガニスタンの情勢悪化に拍車をかけることになってしまう出来事でした。副大統領は、最大の民族であるパシュトゥーン族であったため、彼らの怒りと不満が増大することになったのです。

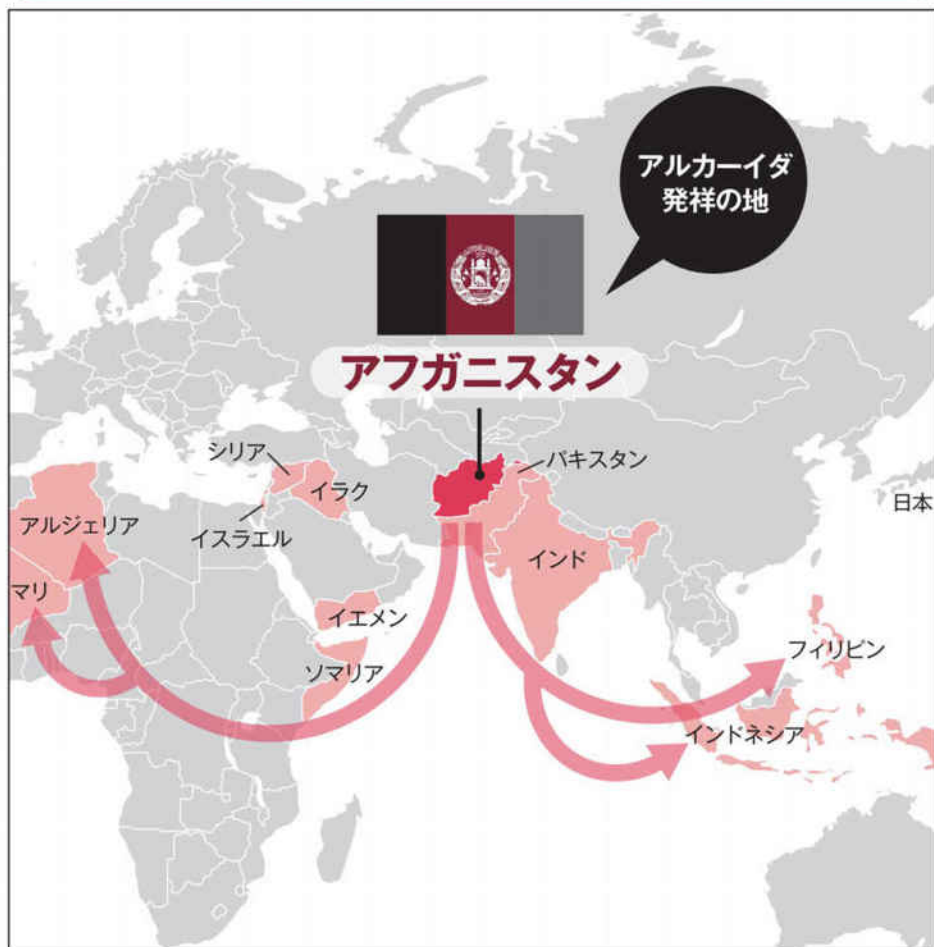
2004年10月、初代大統領にカルザイが選ばれ、正式な政府も誕生して、「**アフガニスタン・イスラム共和国(⑤)**」が成立します。

混迷する国家にようやく希望の光がさし込んだようにも見えたのですが、その後も「タリバン」による攻撃に悩まされます。特に2005年後半からは、タリバンを中心とした武装勢力が南部各地で蜂起し、米英軍などと激しく交戦しています。この頃から〈自爆テロ〉が盛んに行なわれるようになります。「アルカーイダの影響を受けている」と指摘する声があるほどです。

2009年にアメリカ大統領に就任したオバマは、アフガニスタン重視の姿勢を示し、同年2月にアメリカ軍の派遣数の増加を決定しました。アフガニスタン国軍の再建も行なわれたのですが、.....タリバン勢力を完全に抑え込むまでには至っていません。

オバマ大統領は、2016年末までにアメリカ軍をアフガニスタンから完全撤収する方針を発表しましたが、イラクのように武力の空白が生まれることで過激なテロ組織が勢力を伸ばすことへの懸念は払拭されていないようです。

アフガニスタンから派生した「アルカーイダ」



- ・ヨーロッパの各地で積極的にメンバーを募集
- ・独立組織、イスラム過激派、元傭兵などから武器を収集
- ・圧政と差別から逃げ出す若者たちの就職先にもなっている
- ・ウサマ・ビンラディン亡き後も撲滅には至っていない

未だ不気味な存在の
「アルカーイダ」

①ブッシュ大統領

ジョージ・ウォーカー・ブッシュ。2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件時、その後のアフガニスタン侵攻や2003年のイラク戦争を指導したアメリカ第43代大統領。父のジョージ・H・W・ブッシュは、1991年1月に勃発した第一次湾岸戦争時のアメリカ第41代大統領

②集団的自衛権

ある国が武力攻撃された際、直接攻撃されていない第三国が共同で攻撃された国を防衛する国際法上の権利。1945年に署名・発効された「国連憲章」で明文化された

③ハーミド・カルザイ

「アフガニスタン・イスラム共和国」の初代大統領。2001年のアメリカ同時多発テロ事件以降、アフガニスタンにおけるアメリカの協力者として台頭。タリバン政権打倒に尽力している

④ハジ・アブドゥル・カディール

アフガニスタンの政治家。対ソ連戦では、ナンガルハール方面の司令官を務めた。「ムジャーヒディン」政権では、ナンガルハール州知事に任命される。タリバン政権崩壊後の2001年12月、都市開発大臣に就任。翌年6月には、副大統領兼公共事業大臣となるが、7月6日に暗殺された

⑤アフガニスタン・イスラム共和国

2004年に新憲法とカルザイ政権成立後の、アフガニスタンの正式な国名。政変が起こるたびに国名が変わってきた経緯がある

08 世界を恐怖に陥れる過激派組織「^{アイシル} I S I L」とはいつたい?!

【ココがわからない!!】「^{アイシル} I S I L＝イスラム国」。独立国家として認められているの？

一時期、あらゆるメディアを通じて、その存在が世界中に知れ渡っていた「^{アイシル} I S I L」という名を掲げる謎の過激派組織――。

当初、日本の報道機関は「イスラム国」と表記していましたが、日本政府はこの過激派組織を〈国家〉とは認めていません。

現在、最高指導者は**アブー・バクル・アル＝バグダディ**（①）という名のイラク人です。2014年6月に「**国家樹立**（②）」を宣言しました。

彼らは外国人を拉致し、殺害する動画映像を、インターネットで世界中に配信しています。そして、自分たちの存在の恐ろしさを浸透させ、多額の身代金を得ているのです。恐怖をあおることで手に入れたお金や、石油の密輸といった闇ビジネスで得た豊富な資金が、彼らの活動を支えています。

◆アメリカ軍のイラク撤収で勢力を拡大していく

2003年3月20日に火ぶたを切った**イラク戦争**（③、**第二次湾岸戦争**）は、4月7日にアメリカ軍が、イラクの首都・バグダードの宮殿の一つを占拠するという迅速な展開を見せました。5月1日には、ブッシュ大統領（当時）が「大規模戦闘終結宣言」を発表します。つまりは勝利宣言です。

その年の12月13日には、イラク中部のダウルに潜伏していた**サダム・フセイン**（④）大統領が拘束されたことで、イラク戦争は一応の終結を迎えます。

しかし、大規模な戦闘後、イラク国内の混乱は続き、且つテロが横行し、アメリカ軍の被害は増え続けていました。さすがにこの状況では、軍隊を撤収させるわけにはいかず、アメリカ軍はイラク国内に駐留を続けたのです。

この頃から I S I L の起源ともいえる組織集団が活動を開始します。

当初は、組織名を「イラクのアルカーイダ（以降：A Q I）」と名乗っていました。アメリカ軍の大部隊が駐留している間は、各国の人質を盾に、政治的要求や多額の身代金を突きつけたり、自爆テロを仕掛けたりしていたのです。

2006年になると、A Q I は同じく過激派組織である「ムジャーヒディン評議会」と合併。同評議会のアブー・ウマル・アル＝バグダディを指導者として「イラク・イスラム国（以降：I S I）」を創設します。このときに国家としての存在であることを意思表示したのです。2010年5月に、現在のアブー・バクル・アル＝バグダディが組織を引き継ぎました。

2009年1月にオバマが大統領に就任すると、イラク国内のアメリカ軍を撤収させる方針が決まります。イラク国民はもちろん、アメリカ国内や世界からも長期駐留を反対する声が大きくなってきたからです。

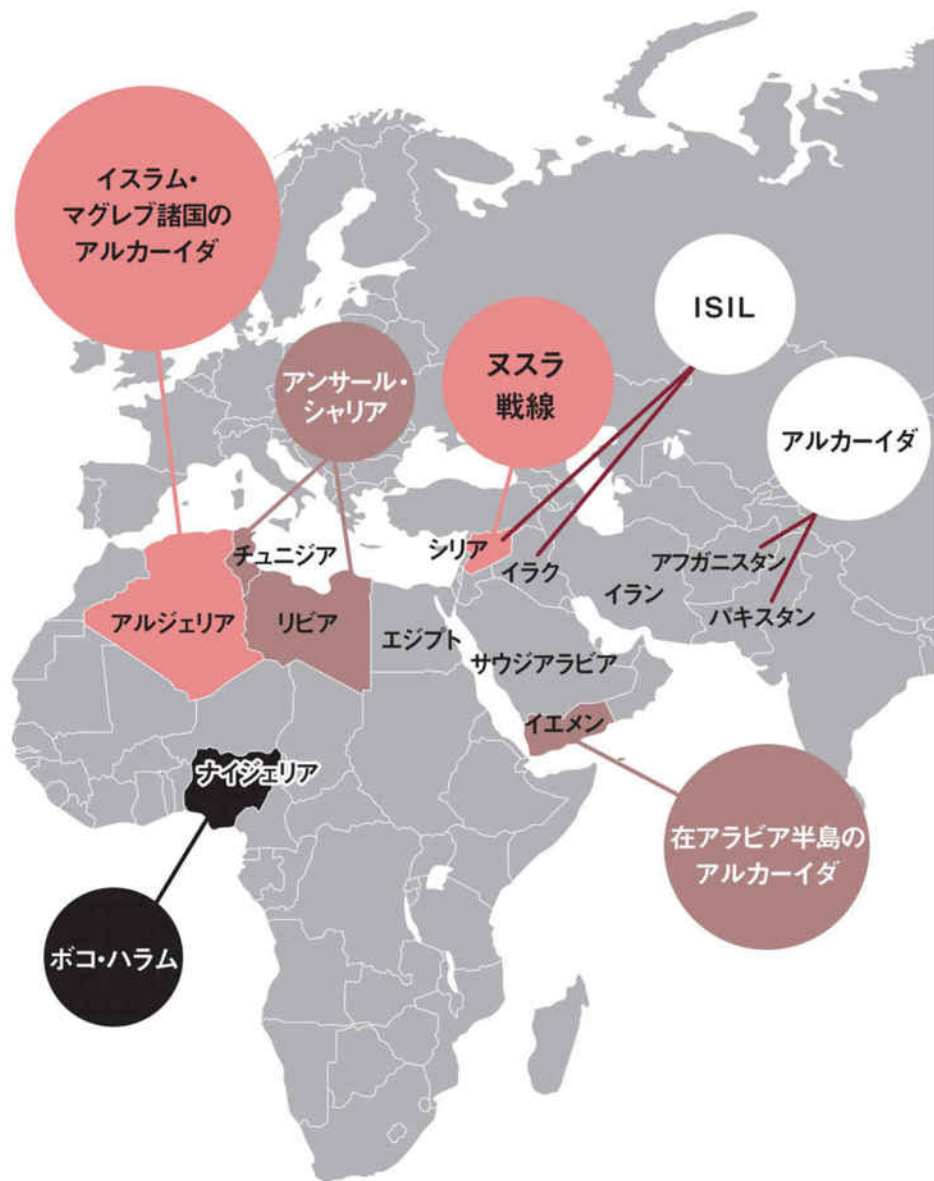
そして2011年12月、最後まで残っていた治安維持・部隊育成が目的の駐留部隊も撤収を完了し、すべてのアメリカ軍がイラクから引き揚げます。

同年、イラクの隣国であるシリアが内戦状態になります。このときに I S I が極秘にシリアへ送り込んだのが「**ヌスラ戦線**（⑤）」でした。

その後、2013年4月にヌスラ戦線の意向に反し、一方的に I S I は彼らとの統一組織「**I S I S**」の結成を発表します。やがてヌスラ戦線と分裂し、前述した通り、2014年6月に国家樹立を宣言して、「イスラム国」と改称する旨を発表したのです。

ただし、国際連合や日本、ならびにアメリカなどの欧米諸国の大半は、国家として認めない方針を掲げているため、「^{アイシル} I S I L」と呼んでいます。

「アルカーイダ」と「ISIL」を支持する過激派組織



①アブー・バクル・アル＝バグダディ

1971年、イラクのサーマッラー生まれ。「預言者」のムハンマドの出身部族であるクライシュ族の血を引いたブーバドリー族の出身といわれている。2004年2月に、アメリカに対する抵抗組織を設立した容疑で、キャンプ・ブッカに収容され、2009年に解放された

②国家樹立

カリフ宣言が同年6月29日に行なわれている。現在、国家としての独立を承認する国は存在しない

③イラク戦争

2001年にアメリカ第43代大統領に就任したジョージ・ウォーカー・ブッシュは、大量破壊兵器に関する査察に非協力的だったイラクを非難。2003年3月20日、アメリカ軍のほか、イギリス軍、オーストラリア軍、工兵部隊を派遣したポーランド軍とともにイラクへの侵攻を開始した

④サダム・フセイン

イラク共和国の政治家で大統領、首相、革命指導評議会議長、イラク軍最高司令官を務めていた独裁者。大統領には1979年7月に就任。イラク戦争（第二次湾岸戦争）によって拘束されたあと、裁判にかけられ、死刑が確定。2006年12月30日、イラクの首都・バグダードで絞首による死刑執行

⑤ヌスラ戦線

2011年に「イラクのアルカーイダ（AQI）」の支援を受け、AQIのシリアにおける関連組織として結成。勢力はおおよそ1万人といわれている。結成後は、シリアの首都・ダマスカスなどで爆弾テロを起こしている

「義務教育」というものを考えたとき、日本では明治初期頃に草案が完成し、普及してきたことは知られている。江戸時代にも、藩校や私塾はあったが、そこには「身分制度」というどうしても超えられない高い壁があり、誰もが平等に教育を受けられたわけではなかった。

イスラム帝国の時代、イスラム教は世界を二分するような大勢力の宗教だった。当時の「先進国」といえるだろう。そして、この教えをもとにイスラム社会では義務教育の〈先駆け〉ともいえる教育が展開されていた。

小学校のルーツともいえるものができたのは、「ウマイヤ朝」の時代だ。モスクが学校の役割を果たし、「クッターブ」と呼ばれていた。そこでは『コーラン』と『ハディース』の授業が行なわれていたという。「アッバース朝」の時代には、子どもは6歳になるとクッターブに入学した。読本はもちろん『コーラン』であり、そのため、アラビア語の学習も並行して行なわれていたようだ。

この当時の教育には、男女差があったことも特徴だ。男子には読み書きとアラビア文法、『ハディース』、初等算術のほか、詩が教えられていた。女子にはその能力に適した低水準の宗教教育がなされていたが、男子に比べてまだまだ浸透するまでには至っていなかったようだ。

高等教育がなされるようになると、その先駆けとしてできたのが、「知恵の館」だ。今でいう大学のような存在であり、奨学金制度などといったその後の時代への影響も大きかった。やがてイスラム帝国はアンダルシア（現・スペイン南部）を支配するようになるが、その頃になると、ギリシア文系との接触もあり、教育は洗練され高等なものへと変わっていく。こうしてつちかわれた教育の礎は、ルネサンス時代の大学の基礎となった。

当時のヨーロッパは僧侶が学者であることが多く、初歩的な学問の知識があったにすぎない。その点において、イスラム圏での教育システムは、とても先進的であったといえるだろう。

第4章

争いが絶えない中東地域に平和は訪れるのか？

【ココがわからない!!】パレスチナ問題は、「イギリスが悪い」って聞きましたが？

未だ解決の糸口が見出せない中東問題。その原因を探っていくと、必ず出てくるのが、イギリスの存在です。なかでも、世界でもっとも解決が難しいといわれるパレスチナ問題は、イギリスの悪しき外交政策、いわゆる「三枚舌外交」によって生まれてしまった歴史があります。

端的に言えば、中東地域を混乱のくるつぼに陥れ、今なお続く紛争や内戦の原因をつくった張本人は、イギリスだといっても過言ではありません。

では、イギリスの三枚舌外交とはどんな内容だったのか、これまでに少し触れていますが、より詳しいお話をしておきましょう。

1915年10月、イギリスは、オスマン帝国の支配下にあった中東諸国のアラブ人たちに「独立国家の擁立を支援する」と持ちかけます。

聖地・メッカの太守フセイン・イブン・アリーと、イギリスの駐エジプト高等弁務官ヘンリー・マクマホンが交わした往復書簡のなかで、アラブ人の独立を支持することを約束したのです（フセイン・マクマホン協定）。アラブ人の反乱を促して、オスマン帝国の崩壊を早める狙いがありました。

一方で、1916年には、第一次世界大戦の勝利を見越して、フランスとの間でオスマン帝国の領土を分割する秘密協定（サイクス・ピコ協定（①））を結びます（※その後、帝政ロシアも加わる）。

1917年11月に、今度はイギリスのアーサー・バルフォア（②）外相が、ユダヤ人コミュニティを束ねるライオネル・ウォルター・ロスチャイルド（③）に宛てた書簡で、「イギリス政府はパレスチナにユダヤ人が民族郷土（national home）をつくることに賛成し、その目的の達成のため最善の努力を払う」と宣言します。「バルフォア宣言」です。戦争協力における多額の資金をユダヤ人勢力から得ることが目的でした。

こうしたイギリスの超ワガママな外交政策によって中東地域に亀裂が生じ、今日に至るまでのパレスチナ問題を引き起こしたと指摘されています。

聖地・エルサレムを含むパレスチナについて、アラブには独立国家の一部とすることを認めておきながら、ユダヤ人には民族郷土の建設を支援すると約束したのですから、摩擦が起こるのは当然でしょう（※フセイン・マクマホン書簡において、アラブ独立国家の領土を除外する旨の条件が付されていたが、パレスチナは除外地域に挙げられていなかった）。

◆最後は責任放棄で国際連合に丸投げしたイギリス

第一次世界大戦後、パレスチナは、戦勝国となったイギリスの委任統治領となります。そこに世界中からユダヤ人が押し寄せてきたのです。続々と移住してくるユダヤ人と、それに反発する先住のアラブ人（パレスチナ人）との間で起こる衝突は、日増しにエスカレートする最悪な事態に……。

その後、第二次世界大戦が終わると、戦争によって国力が瀕死の状態だったイギリスは、パレスチナで起きている問題から手を引き、事態の收拾を国際連合にゆだねます。つまりは責任を放棄し、国際連合に丸投げしたわけです。

1947年11月、国連総会にてパレスチナ分割決議（④）が採択されたものの、アラブ側の拒否を受けて功を奏しませんでした。

そして、ついに1948年5月、イギリスのパレスチナ委任統治が終了した数時間後に、ユダヤ人国家のイスラエルが独立を宣言。同時にアラブ諸国がパレスチナに進撃し、第一次中東戦争が勃発することになったのです。

イギリスの「三枚舌外交」とイスラエルの建国

1914-1918

第一次世界大戦中

1915

アラブ人

「パレスチナにアラブ人の国をつくる」と約束

1916

 **フランス**

「戦争に勝ったらオスマン帝国の領土を山分けしよう」と持ちかける

1917

ユダヤ人

金を借りるかわりに「ユダヤ人の国をつくる」と約束

イギリス



第二次世界大戦の終戦後、イスラエルが建国される

第一次中東戦争の勃発!!
アラブ人VSユダヤ人

2つの世界大戦で疲弊したイギリスは、約束を反故にして、
国際連合に対応を丸投げする。
結果、アラブ人とユダヤ人が対立して戦争に突入!!

①サイクス・ピコ協定

イギリスの中東専門家マーク・サイクスと、フランスの外交官フランソワ・ジョルジュ＝ピコによって原案が作成された協定。第一次世界大戦中の**1916年5月16日**にイギリスとフランスの間で結ばれた秘密協定。その後、帝政ロシアも加わる。内容はオスマン帝国領の分割を取り決めたもの

②アーサー・バルフォア

叔父であるソールズベリー侯爵の引退を受けて、**1902年**にイギリス首相に就任。**1905年**の内閣総辞職による首相退任後も、自由党政権下で**1911年**まで保守党党首を務める。第一次世界大戦中の**1915年**に発足した挙国一致内閣では、海軍大臣を経て、翌年**12月**に外務大臣に就任。**1922年**に伯爵位を与えられた

③ライオネル・ウォルター・ロスチャイルド

マイアー・アムシェルを始祖とするユダヤ系の大富豪であるロスチャイルド家の一員。動物学者としても知られる。ロンドン・ロスチャイルド家の長男として生まれ、父の初代ロスチャイルド男爵ナサニエルが、第一次世界大戦中の**1915年**に死去したため、第二代ロスチャイルド男爵を継承。「バルフォア宣言」がなされた当時は、保守党所属の貴族院議員だった

④パレスチナ分割決議

パレスチナにアラブ人とユダヤ人それぞれの独立国家を創設し、エルサレムを国際管理下に置くことを定めた国連総会決議**181号**の通称。総会は国連本部があったニューヨーク郊外で開かれ、特別委員会の勧告案が賛成**33**、反対**13**、棄権**10**、欠席**1**で採択された。いくつかの小国が票決直前で反対から賛成にまわったが、この背景にはニューヨーク一帯で活躍するユダヤ人の働きかけがあったといわれる

【ココがわからない!!】隣国同士なのに、どうして共存共栄ができないの？

1979年に「シーア派」のホメイニー師が主導するイラン革命が成功したことは、周辺諸国の「スンニ派」支配層にとっては脅威でした。シーア派の人口が多数を占めながらも、スンニ派が実権を掌握している国が多かったからです。

なかでも、隣国のイラクは穏やかではありませんでした。

圧政を敷いた**パフラヴィー国王（①）**を追放したのち、イランの実権を握ったホメイニー師が率いるイスラム急進派勢力は、イラクにとって主導権を握ろうとする対立宗派の存在とともに、政権を脅かす大きな不安材料でした。

さらに、イラン国内において、イスラム急進派勢力が、革命成功のために共闘戦線を組んだ他勢力をことごとく粛清したことも、イラクを刺激することになります。サダム・フセイン大統領も含めた少数派のスンニ派が、イラクの主導権を握っているなかで、シーア派によって成し遂げられたイラン革命のような嵐が吹き荒れれば、国家体制がひっくり返ってしまうと恐れたのです。

「一刻も早く何かしらの手を打たなければ、スンニ派が粛清されてしまう」と、フセインが危惧するのは自然の流れだといえます。

当時、イランとイラクの間には、1975年に締結された「**アルジェ協定（②）**」がありました。これは国境問題に関する協定です。

同協定では、両国間の国境地帯を流れる「シャトル・アラブ川」の中央部を国境線と取り決めていました。にもかかわらず、フセインは「川全体がイラクの領土だ」と主張して、一方的に協定の破棄を宣言したのです。

そして1980年9月22日、イラクはイランに宣戦布告をし、空爆を開始します。イラン・イラク戦争の勃発です。

この点に関しては第2章03で触れた通りです。表向きはシャトル・アラブ川をめぐる領土問題でしたが、その根幹にあったのは、両国間のリーダーが対立する宗派に属し、各々の立場や国家体制を危惧したがために戦争が起こったといえるかもしれません。

イラン・イラク戦争は、宗派対立を如実に表した出来事だったのです。

◆双方ともに決定打を与えられずにしぶしぶ停戦へ

当初フセインは、「イラン革命の過程で国軍は解体され、内乱状態で足並みがそろわないイランなど、一気に攻め落とせる」と踏んでいました。

ところが、.....フセインの〈読み〉ははずれます。イランは、イラクの侵攻を受けたことで、かえって一丸となってしまうのです。

ホメイニー師は、フセインを「墮落した異教徒」と断じ、イラン国民の士気を高めます。先制攻撃をしたイラク軍は戦闘を優位に進めて、イラン南部の油田地帯の「**フゼスタン（③）**」を奪うまでは順調だったものの、義勇兵中心のイラン軍の猛反撃に遭い、次第に後退します。その後、占拠地を奪回された挙げ句、逆に自国のイラク領内へと攻め込まれてしまうのです。

イランとイラクの戦争は、どちらも相手に決定的なダメージを与えられないまま消耗戦の様相を呈して長期化します。お互いに石油施設を破壊し、都市を攻撃し合う泥沼の戦争は、約8年もの歳月を要しました。

最終的に、停戦を求める国連決議をイランが受諾する形で、1988年8月20日に停戦が発効。ともに莫大な戦費を投じ、民間人を含めて100万人を超す死傷者を出した不毛な争いは、ようやく幕が下ろされました。

しかし、今なお両国間は、水面下で火花を散らしているのが実情です。

宗派对立の犠牲となった悲しき大河



表向きは「シヤトル・アラブ川」をめぐる領土問題が戦争の起因だが…。
根幹には、双方のリーダーが属する宗派の対立があった!!

①パフラヴィー国王

モハンマド・レザー・シャー。父レザー・シャーの退位（イギリス、ソ連による廃位）を受けて1941年に即位した「パフラヴィー朝」の第二代国王。アメリカの支援を得て、軍事力強化と近代化を推進したが、庶民生活の実情を顧みない政策で貧富の差の拡大を生み、秘密警察のS A V A Kを組織して、反体制派勢力を徹底的に弾圧するなどの独裁に反発が高まる。1979年1月に国外へ亡命。翌年に亡命先のエジプトで死去

②アルジェ協定

1975年3月にO P E C総会がアルジェリアで開かれた際、イランとイラクの間で結ばれた協定。ペルシア湾に注ぐ貴重な水路である「シャトル・アラブ川（アルヴァンド川）」の航行権をめぐる領土問題について、川の東岸（イラン側）とされていた国境を川の中央に移すことに両国が合意。イランはイラクの譲歩に対し、イラク北部で反乱を繰り返すクルド人勢力への支援を打ち切ることを表明。同年6月30日には、イラクとイラン間の国境と善隣友好に関する条約に両国が調印した

③フゼスタン

イラクと国境を接するイラン南西部の州。アラブ人の人口が多く、かつては「アラビスタン」とも称された。この地で1908年5月に中東で初めて油田が発見され、イギリス政府が設立したアングロ・ペルシア石油会社（のちに「アングロ・イラニアン石油会社」と改称）によって開発が進められた。フセインは、アラブ系住民の解放を掲げ、イラン最大の油田地帯であるフゼスタンの領有を狙った

【ココがわからない!!】戦争だけは何とか回避しよう。そういう動きはなかったのですか？

約8年にも及んだイラン・イラク戦争で、国力が疲弊したイラクは、最大の財源である原油輸出収入を急増させる必要性にかられていました。ゆえに石油の減産・高価格化を進めたいイラクにとって、クウェートやサウジアラビアはとても目障りな存在でした。これらの国の生産量は、「OPEC（石油輸出国機構）」が取り決めた上限を大幅に超えていたからです。

なかでも、イラクのクウェートに対する嫌悪感は並々ならぬものでした。

第2章03でも触れましたが、オスマン帝国の時代、この2カ国に国境はなく、イギリスの占領期に、イギリスが勝手に分割してしまった歴史的な背景があったのです。ココでもイギリスがもめごとの原因とは……。

イラク側からすれば、そんなことは絶対に認められない。ゆえに1990年8月2日、サダム・フセイン大統領は、クウェートに約10万人もの大部隊を送り込みます。6日後には国内を制圧して、「クウェート併合」を宣言したのです。

◆イラクの前に敵あり、イラクの周りに味方なし!!

国際法を無視したイラクの暴挙に、アメリカが即座にかみつきます。

ジョージ・H・W・ブッシュ(①)大統領は、「砂漠の盾」作戦として、サウジアラビアへ軍隊を派遣することを即決し、そこからイラクに対する牽制を開始したのです。親米政策をとるサウジアラビアも、アメリカへの恩義から軍隊の駐留を受け入れます。ペルシア湾岸の産油国も含めた諸国も、アメリカに同調し、国際連合から経済制裁を科されるなど、イラクは完全に孤立無援の状態。

1990年11月29日、安保理はイラクのクウェートからの撤退期限を「1991年1月15日」と定め、もしもしたがわなければ多国籍軍による武力行使を容認する決議を採択します。

その後、アメリカとイラクの直接対話による交渉も行なわれましたが決裂。

開戦までの猶予期間が終了した1991年1月17日、アメリカが主導する多国籍軍は「砂漠の嵐」作戦(②)を発動。首都・バグダードへ向けてミサイルを撃ち込み、イラク国内の戦略目標へ空前の爆撃を敢行します。

フセインはあくまで強気な姿勢を崩さず、徹底抗戦を宣言。サウジアラビアとイスラエルにミサイル攻撃を仕掛けました。これには「裏切り者」のサウジアラビアと、パレスチナを占拠するイスラエルを攻めることで「聖戦」を強調して、ほかのアラブ国家や周辺国に戦闘への協力促す目論みがあったようなのですが、どの国も応じることはありませんでした。

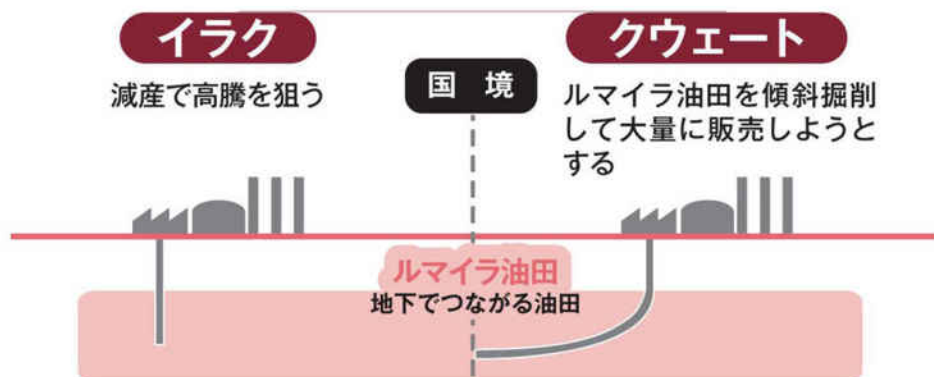
約30カ国が参加した多国籍軍とイラク軍の戦力差は圧倒的で、イラク本土やイラク軍が居座るクウェートへの空爆が続いたのち、2月24日には地上戦が開始されます。地上戦の開始からわずか100時間で、多国籍軍は攻撃を停止。イラクが敗北を認めて停戦となり、第一次湾岸戦争は終結しました。

ところが、それでもフセイン政権は崩壊しなかったのです。

終戦直後に起きた「シーア派」のアラブ民衆とクルド人の蜂起を鎮圧して、フセインは権力を維持し続けます。ただ、アメリカはこれを看過します。

イラクの内乱が周辺に拡大して湾岸情勢が複雑化することを懸念し、フセインを敢えて泳がせる方針に切り替えていたのです。

イラクのクウェート侵攻は油田が原因!?



✧ イラクの土地を掘っている ✧ !!

1990.8.2
クウェート侵攻を開始!!

1990年8月8日に制圧!!

第一次湾岸戦争が勃発!!

1991年1月17日 ▶▶▶ 「砂漠の嵐」作戦

2月24日 ▶▶▶ 「砂漠の剣」作戦

停戦 (1991年4月6日)

①ジョージ・H・W・ブッシュ

ジョージ・ハーバート・ウォーカー・ブッシュ。1981年からロナルド・レーガン政権下で2期8年に渡って副大統領を務め、1989年にアメリカ第41代大統領に就任。第一次湾岸戦争時には支持率を90%近くまであげたが、1992年の大統領選で民主党のビル・クリントンに惜敗し、1期で退任。第43代大統領のジョージ・W・ブッシュは息子

②「砂漠の嵐」作戦

アメリカ中央軍のノーマン・シュワルツコフ司令官が指揮した。イラク軍が占領するクウェートに攻め込むと思われた多国籍軍は、アメリカ戦艦の巡航ミサイル「トマホーク」と、戦闘機2500機を投入して、イラク領内を爆撃する奇襲に成功。機先を制されたイラク軍に反撃らしい反撃を許さず、空爆の停止と同時に地上戦に突入した

04 アメリカ同時多発テロ事件から飛び火した「イラク」への制裁!!

【ココがわからない!!】打倒フセイン政権に成功したのに、なぜイラクは未だに混乱状態なの？

1991年の第一次湾岸戦争終結後、イラクは国連決議にしたがって、大量破壊兵器（核兵器など）を保有しないことが義務づけられていました。

ところが、ときが経つにつれて、イラクは国際連合の査察を拒み始めます。

このイラクの身勝手な姿勢を見過ごさなかったのが、アメリカでした。「湾岸戦争当時に開発中だった核兵器を廃棄していない」と牽制したのです。

両国間で緊迫した状態が続くなか、ある大事件が起きます。

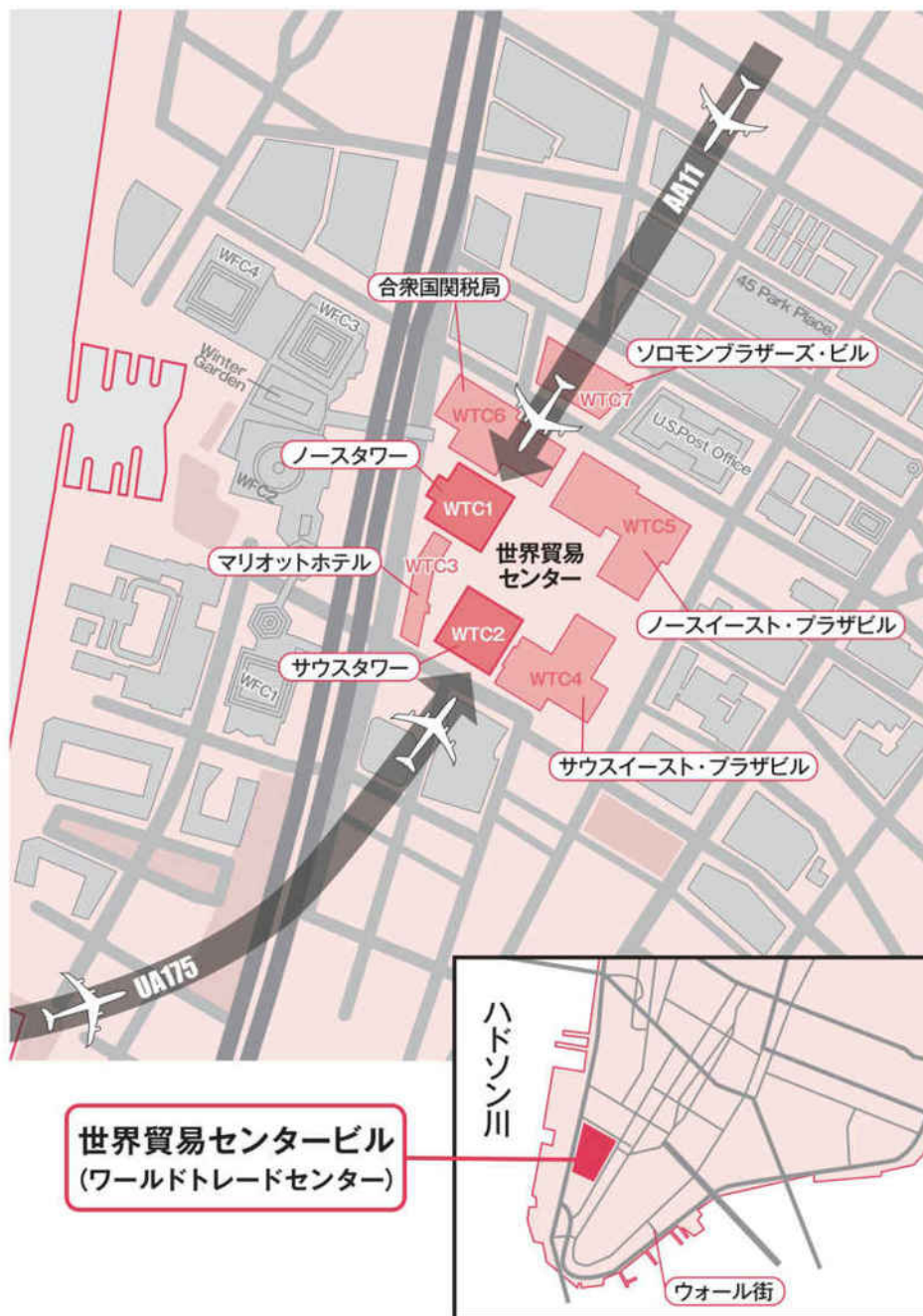
2001年9月11日、ニューヨーク・マンハッタンの世界貿易センタービル（①）などを標的としたアメリカ同時多発テロ事件です。

アメリカは、「アルカーイダ」を率いるウサマ・ビンラディンが「事件の首謀者である」と断定し、潜伏先のアフガニстанを攻撃します。

ビンラディンの引き渡しを求めるアメリカに対し、アフガニстанを支配していたタリバン政権は、「テロを指揮した証拠を示さなければ要求には応じられない」と、拒否の姿勢を崩しません。「テロリストを守るのは、テロに加担したも同然」との理論で、アメリカはアフガニстан空爆に踏み切ります。

戦闘開始から2カ月でタリバン政権は壊滅しましたが、それだけでことはすみません。「イラクもテロ事件に関与したのではないか」と、アメリカはフセイン政権に対して〈疑惑の目〉を向けたのです。

旅客機による同時多発テロ事件の経路



◆アメリカの誤った方針が〈混乱国家〉へと逆戻り!!

第一次湾岸戦争から12年のときを経て、仇敵同士が再び対峙します。

当時のアメリカ大統領は、第一次湾岸戦争時の第41代大統領を父に持つ、第43代のジョージ・W・ブッシュ。イラクの大統領は、第一次湾岸戦争後も政権の座にとどまっていたサダム・フセイン。両国の指導者がお互いに遺恨の感情を持ち合わせていたことは、間違いないでしょう。

2003年3月20日、アメリカはイギリスなどとともに、イラク攻撃を開始します。わずか1カ月足らずで首都・バグダードを制圧したブッシュ大統領は、5月1日に勝利を宣言。逃亡していたフセイン大統領は、同年12月14日に拘束され、2006年12月30日に処刑されます。

フセイン政権の崩壊後も、イラク国内は混乱状態が続きました。

反欧米を掲げるイラク国内の各勢力やイスラム過激派のゲリラ活動、バグダードの国連現地本部が爆破されて20人あまりの死者が出る事件、日本の外交官2名が銃撃を受けて死亡する事件……など、フセインという絶対的な存在を失ったイラクは、歯止めがきかない無法国家になり下がっていたのです。

さらに、イラクは大量破壊兵器（核兵器）を保有していなかった（②）ことが、その後に判明します。アメリカが掲げた大義名分は損なわれました。

フセイン政権を排除してもイラクに安定は訪れず、むしろさらなる大混乱を招く結果となったのですから、批判や反発が起こるのは当然でしょう。

もちろん、フセインによる長期独裁体制にも大いに問題があったことは否めません。ただ、1921年に独立後、クーデター続きで政局が安定しなかったイラクに、初めて長期政権を築いて国家を統制してきたことは事実です。

人口の大半はアラブ人とはいえ、クルド人も共存し、イスラム教のなかでも「シーア派」が多数派ながらも、「スンニ派」が支配層を占める複雑な国家。

アメリカの誤った目的や方針が、今までどうにか保たれていた多民族・他宗派国家を、再び混乱の渦へと導いてしまったともいえるでしょう。

①世界貿易センタービル

ワールドトレードセンターとも。1966年から1987年にかけて建設された七つの高層ビル群。約5万人の勤務者と1日約20万人の来訪者を誇るニューヨーク最大の商業センター。その中心であったツインタワー北棟と南棟（ともに110階建て）に2001年9月11日午前、旅客機が相次いで激突。ツインタワーは完全崩壊し、その余波で残る五つのビルも崩落。約3000人の死傷者を出す。跡地で再建工事が進められている

②イラクは大量破壊兵器（核兵器）を保有していなかった

イラク戦争が沈静化したのち、大量破壊兵器（核兵器）の捜索にあたってきたアメリカの現地調査団が2004年10月6日、イラクに生物・化学兵器の備蓄はいつさもなく、核兵器開発計画も頓挫していたとする最終報告書を発表。チャールズ・ドルファー団長（CIA長官顧問）は、旧サダム・フセイン政権がアメリカ同時多発テロ事件に関与した疑いについても、「大量破壊兵器や関連物質をテロ組織に渡していた証拠はない」と結論づけた

【ココがわからない!!】「アラブの春」は、シリアでは失敗だったのですか？

中東地域で巻き起こった民主化を求めた運動「アラブの春」とは、いったい何だったのでしょうか。チュニジアのように成功した国もあれば、エジプトのように一度は成功したものの結局は元に戻ってしまった国もあります。

さて、シリアにおいてもアラブの春は起きましたが.....その結末は、最悪なものとなってしまったのです。

1920年、オスマン帝国から「シリア・アラブ王国」として、一度は独立したシリアでしたが、直後に起きたフランスとの戦争に敗れ、再び委任統治領となります。その後、幾度もの分裂や連合を経て、1961年に起きたクーデターで「シリア・アラブ共和国」として、再び独立を果たしました。

1963年に、**バアス党(①、アラブ社会主義復興党)**が政権を獲得しますが、争いはやむことなく、組織内で「シリア派」と「イラク派」に分裂してしまいます。1970年、バアス党内の争いを制したのが、シリアの長期独裁政権で知られるハーフイズ・アル=アサドでした。翌年、大統領に就任すると、2000年に死去するまで、すべての実権を掌握します。

彼の死後、大統領に選出されたのは、息子のバッシュールでした。

2014年、バッシュール大統領の任期満了にともない、且つ民主化の風を受け、シリア初の複数の候補者による大統領選挙が実施されましたが、約9割の票をバッシュールが獲得し、再選を果たします。

そして今なお独裁的な政権が続いている——これがシリアの実情です。

シリアでは、国民の約8割が「スンニ派」ですが、アサド一族は「シーア派」で、そのなかでも少数で極めて特殊な教義を持つ「**アラウィ派(②)**」でした。

なお、アラウィとは、「アリーにしたがう者」という意味を指し、シーア派ではあるものの、ヒンズー教における輪廻転生説も取り入れています。

国民の大多数を占めるスンニ派からすれば、ただでさえ少数派のシーア派に政権を掌握されていることが気に入らないのに、そのなかでもごく一部のアラウィ派が、国家のトップに君臨している実情に対して、はらわたが煮えくりかえる想いでいるのはたしかでしょう。大統領選挙の結果は、完全に国民の意思を反映しているとはいえないものでした。

ところが、これをイランが認めてしまいます。

イランという国は、シーア派主導の国家。ゆえに彼らにしてみれば、数少ない「同胞」ともいえます。そのうえ、シリアとイランは、ともに強い反米意識を掲げている国同士だったのです。

◆血の涙が流れる内戦と未だ動けない「N A T O」軍

あらゆる権威を自分たちの意のままに操るアサド政権。その政権の在り方は「独裁」よりも、「恐怖政治」という言葉がふさわしいものでした。やがて政権に対する国民の反発が高まり、内戦を引き起こします。

こうした事態において「調停役」の「N A T O（北大西洋条約機構）」が軍事介入する選択肢もありますが、今回は動きませんでした。かつてリビアの内戦には軍事介入したにもかかわらず、なぜシリアでは動かないのか——。

リビアの内戦では、**カダフィ政権(③)**の軍による反体制派への軍事攻撃で犠牲者数が増え続け、諸外国は何となくカダフィ軍の攻撃を停止させたいと考えていました。このカダフィ軍に立ち向かった反体制派は、さまざまな出身地や部族から構成されていましたが、「カダフィ打倒」という点では団結していました。ゆえに欧米諸国は、この反体制派に対して「新政権を担うことができる」と判断し、空爆に踏み切ったのです。

他方、シリアでは事情が異なりました。シリアはロシアの重要な軍事的同盟国の一つ。当然ロシアはN A T O軍の介入に反対します。また中国は、欧米諸国が第三国の紛争に軍事介入することを「内政干渉である」として嫌っています。つまりこの2カ国は、シリアへの軍事介入にも、経済制裁にも否定的だったのです。さらに悪いことに、シリアの反体制派は統率がとれておらず、お互いが戦っている状況でした。そこに「**アルカーイダ**」や「**I S I L**（イスラム国）」が浸透していったのです。

シリアには、リビアのようにアサド後の新政権を担うだけの勢力が存在しないがために、内戦を停止する目的の軍事介入ができない.....そんな状態が、今なお続いているわけです。

シリアの情勢は、年々悪化の一途をたどっています。現に、未だ終わらない内戦による国民の犠牲者は、**2014年4月で15万人以上**と聞きます。

大国同士の思惑と恐怖政治が招いた悲劇。それによつて血の涙を流す国民たちの姿をニュースで見ていると、シリアには「本当の意味でのアラブの春は訪れなかった」——そう思えてなりません。

①バアス党

公式名は「アラブ社会主義復興党」。バアス（バース）とは、アラビア語で「復興」「再生」を意味する。**1947年**、シリアのダマスカスで、「アラブの統一」「外国支配からの解放」「社会主義」を三大原則とする「アラブ・バアス党」が結成され、その思想と戦略がアラブ諸国で広く支持されていった

②アラウィ派

イスラムのなかでは極めて異端的な立場にある特殊な宗派。主にシリアの山岳地帯に分布する。「シーア派」の系統に属すとされるが、同派のどこから分派したかは明らかではない。また、輪廻転生説を取り入れるなど、ほかの宗派と大きく異なった教義を持つ

③カダフィ政権

1969年、カダフィはリビア国軍の将校団を率いてクーデターを敢行、政権を奪取した。最高権力者となった彼は、イスラムと社会主義を融合させた国家体制の建設を進めていった。過激な反欧米主義を貫き、欧米から強い経済制裁を受けながらも、長期独裁政権を維持してきた

【ココがわからない!!】あまり馴染みがない2カ国。どんな国で、何が起きているの？

第二次世界大戦中の1941年、シリアとレバノンは、それぞれ独立を果たします。それ以前はフランスの委任統治領でした。

そもそこの2カ国は、「大シリア(①)」と呼ばれていた地域にあった「大レバノン」と「シリア・アラブ王国」をフランスが委任統治下としたことで、かつては一つの国でした。

やがて始まった第二次世界大戦のとき、ドイツ軍の占領下となったフランスは亡命政府となってしまう。そのため大レバノンとシリア・アラブ王国は、ドイツ軍の侵攻に備える目的もあって、独立した経緯があったのです。

大戦後、レバノンは金融や観光など、さまざまな分野で国際市場に進出して、急速に経済成長を遂げます。首都のベイルートは「中東のパリ」と評されるほど、中東地域のなかでも有数な国際リゾート地へと発展しました。

レバノンには、さまざまな民族、ならびに宗教を信仰する人たちが住んでいたのですが、目立った争いもなく比較的和平な国家でした。

そんな平和な国家に、「P L O (②、パレスチナ解放機構)」が流入したことにより、突如として内戦状態へと変わってしまいます。

長きに渡って争われたレバノン内戦(1975年から1990年)です。

隣国のシリアが、平和維持軍を進駐させますが、イスラエル軍が1978年に侵攻したことで混乱に拍車がかかってしまう事態に陥ります。ただでさえ宗教・宗派が複雑だったことに加え、アメリカやソ連、西側諸国といった大国の思惑も絡んだため、終わりが見えない紛争へと突き進んでしまいました。

侵攻してきたイスラエル軍に対して、国軍は抵抗を試みます。もっとも激しく抵抗したのが「ヒズボラ」という「シーア派」のイスラム過激派組織。彼らの実力は国軍を超えるほどで、同じシーア派のイランも支援していました。

なお、ヒズボラとは「神の党」という意味です。

さらに、ヒズボラの反米意識は大変強いものでした。イスラエルには約540万人のユダヤ人が住んでいますが、アメリカにもほぼ同数の約530万人が暮らしています。アメリカ社会への影響力は絶大で、政財界も多額の献金を受けているために頭があがらないほどです。アメリカにとってイスラエルは、自国の経済を陰で支える重要国であり、決して無視できない存在でした。

こうした実情から、ヒズボラは反米意識が大変強いのだと聞きます。

◆20年前に「アラブの春」で挫折した(砂漠国家)

2013年、イスラム過激派によるアルジェリアの天然ガス関連施設でのテロ行為で、日本企業の社員たちが犠牲になりました。

ほとんど私たち日本人には馴染みのない国・アルジェリア。いったいどんな国で、何が起きているのか、少し触れておきましょう。

もともとはフランスの支配下にあった西アフリカの国でしたが、1962年6月に独立を果たします。国土の大半がサハラ砂漠で、国民の約9割がイスラム教の「スンニ派」です。フランスとの独立戦争(③)で勝利した彼らは、戦いを勝利に導いた「F L N (アルジェリア民族解放戦線)」が、一党独裁をする社会主義国家となりました。

しかし、抑圧された社会に不満を抱いた国民たちが、1988年に各地で民主化を強く求める暴動を引き起こします。これを機にアルジェリアでは、民主化運動が進むことになるのです。じつに中東地域で巻き起こった「アラブの春」よりも20年ほど前の出来事でした。

民主的な選挙も行なわれましたが、選挙結果によって権力を掌握したのは、イスラム原理主義勢力でした。これに対して、軍部がクーデターを起こしますが、長期化する内戦で多くの国民が犠牲となります。

さらに、内戦を続けるイスラム原理主義勢力は、「G I A (武装イスラム集団)」という新たな過激派勢力を生み出しました。この集団は、人を殺めることにためらいを感じない、むしろその行為を楽しむ(悪魔の集団)でした。

事実、各地の集落をゲリラ的に襲撃して、住民たちを虐殺し続けたのです。国民の多くが、彼らに反発したためにやがて沈静化し始めます。

2013年になると、隣国リビアのカダフィ政権崩壊にともない、国境を両国の政府がコントロールできなくなりました。そこに一部のイスラム原理主義者たちが侵入し、武器の売買や戦闘員の育成などが行なわれ、無法地帯の状態に陥っていました。こういったことが起因となって、前述した天然ガス関連施設でのテロ行為が起こったのです。

アルジェリアでは、アラブの春が巻き起こる20年前に受けた過去の苦々しい経験から、「民主化はイスラム原理主義勢力を助長させることにつながる」というジレンマを、今も抱えています。ゆえに周辺諸国で、アラブの春が起きても連動することはないといえるでしょう。

①大シリア

聖書時代から第一次世界大戦の頃まで呼ばれていた、現在のシリア、レバノン、ヨルダン、イスラエル、パレスチナの全域を指す地理上の総称

②P L O（パレスチナ解放機構）

現在の「パレスチナ自治政府」の母体。当初は、武装闘争によりイスラエルからパレスチナを解放することを謳っていた。アラファトが議長になってから反ユダヤ主義的な傾向を退け、イスラエルが占有する領土を含めた全パレスチナに共存する独立国を樹立することを目標とした

③フランスとの独立戦争

1954年から1962年にかけて行なわれたフランスからの独立戦争。当初はフランス政府により、「アルジェリア事変」と称されていたが、のちに改称され、「アルジェリア戦争」となった

【ココがわからない!!】世界中がトルコのこれからに期待を寄せているそうですが.....

アジア圏とヨーロッパ圏の境に位置するトルコ共和国。オスマン帝国時代はもともと繁栄したイスラム国家でした。トルコは、古くから日本と大変親交が深く、まずはこのあたりから触れておきましょう。

1890年（明治23年）9月16日の夜半すぎ、オスマン帝国の軍艦「エルトゥールル」が、現在の和歌山県串本町沖で座礁して遭難します。

当日は折からの台風による荒波と、遭難時間が夜半だったこともあり、多くの乗組員の尊い命が犠牲となりました。ただ、生存者もいたのです。その生存者たちの救護に努めたのが.....串本町の住民と日本政府でした。その後、生存者たちは日本海軍の軍艦で、オスマン帝国へ無事に送り届けられたのです。

日本とトルコ（オスマン帝国）の間で、この頃はまだ国交が結ばれていませんでした。にもかかわらず、日本の人道的な対応に国民は感激し、今でも学校教育のなかで語り継がれていると聞きます。また、トルコ人の日本への感謝の想いは以後も消えず、イラン・イラク戦争時に、孤立したイラン在住の日本人たちを自国の航空機で救出し、成田に送り届けた逸話は有名です。

こうした歴史的な背景もあり、トルコは〈親日国〉として知られています。

さて、1923年にオスマン帝国が第一次世界大戦で敗北し、その後に崩壊したことで、建国されたトルコ共和国。その初代大統領に就任したケマル・アタテュルク(①)は、自国に革命を起こします。

脱イスラムと大胆な西欧化（近代化）を目指したトルコ革命です。

この革命によって、完全に政教分離し、多党制が導入されます。また、憲法から「国教はイスラム教である」という条文も削除します。

さらに、これまでアラビア文字で表現されていたトルコ語に、アルファベットをあてました。女性の人権も著しく向上します。一夫多妻制の禁止や女性の参政権を実現させるなど、ヨーロッパ流の法整備や女性の権利拡大を行ない、明らかに、ほかの中東諸国とは異なる独自の路線を歩み出したのです。

◆かつてのイスラムの超大国が取り組む事業とは？

第二次世界大戦後のトルコは、西側諸国との関係性を重視し、強化してきました。にもかかわらず、西側諸国はトルコを「同胞」としては捉えていないようなのです。トルコがE U加盟を希望しているのに、未だ果たされていないことが、その表れでしょう。

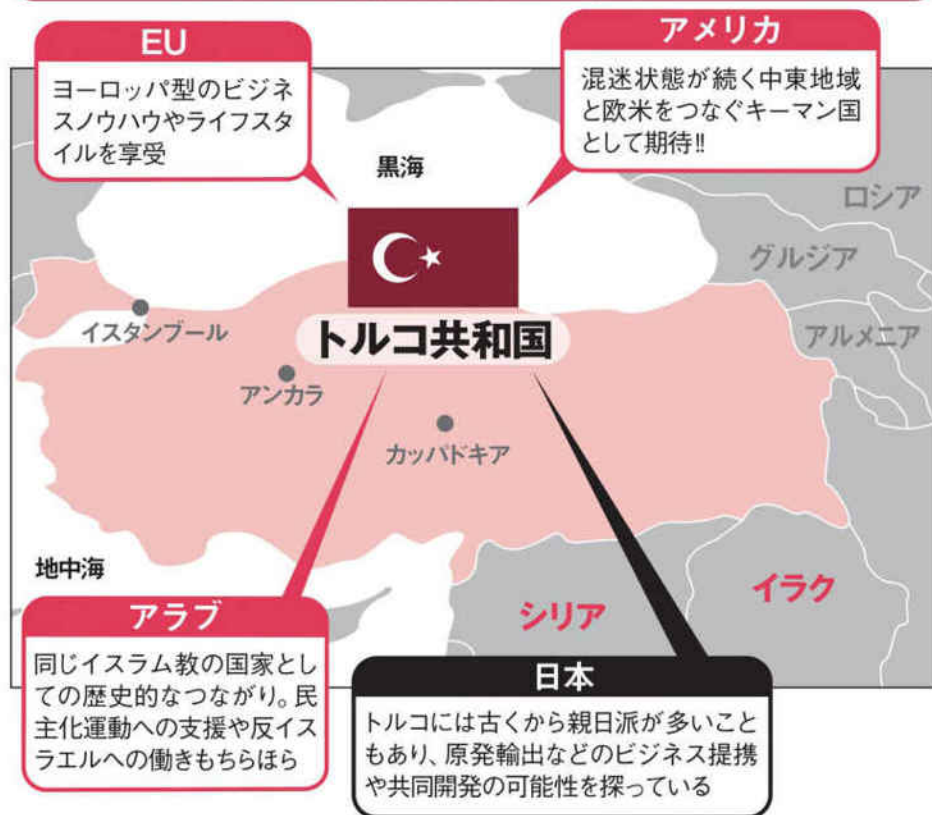
移民の流入が深刻化しているE U加盟の先進国では、トルコの加盟で安い労働力の移民が、さらに流入する可能性が高いことを危惧しています。仮にそうなれば労働市場への圧迫が大きくなり、経済面での負担も大きくなることが否めない。ゆえに「トルコの加盟を認めていない」と考える学者もいます。

こうした逆境のなか、資源も少ないトルコが活路を見出そうとしているのが、地理的な利点を利用したパイプライン(②)の敷設です。

カスピ海の底には、世界最大規模の油田やガス田が存在します。ただ、カスピ海は陸地に囲まれているため、西側諸国へのエネルギー輸送は容易ではありません。もしトルコにパイプラインが敷設されたら.....東西を結ぶエネルギー輸送の要所となり得る可能性は非常に高いといえます。

宗教問題などの弊害も多いトルコ。ですが、この国が欧米と中東が友好な関係を築くパイプラインになることを世界中が期待しています。

世界中から期待を寄せられるトルコ



ある出来事を機に日本との親交を深める

1890年のエルトゥール号遭難事件

1890

オスマン帝国の軍艦「エルトゥール」が、現在の和歌山県串本町沖で遭難し、乗組員約600名が死亡した。日本側の官民あがての手厚い救護により、69名が救出され、日本の軍艦によってオスマン帝国の首都・イスタンブールに無事送還される。日本の人道的な対応に国民は感激!!

1985

1985年3月、イラン・イラク戦争のなか、イランの首都・テヘランで孤立した日本人たちを救出するために、トルコ政府がトルコ航空の特別機を派遣する

2011

2011年3月11日に発生した東日本大震災、2011年10月から11月のトルコ東部地震でもお互いに支援活動を行なう

①ケマル・アタチュルク

就任中は反対派を徹底的に排除し、独裁者として君臨したが、国の基礎を築き、安定した政権を確立させた功績は大きい。現在に至るまで多くのトルコ国民から「国父」として変わらぬ敬愛を受け続けている

②パイプライン

石油やガスのような可燃性の液体や気体の輸送管。内陸にある油田と石油輸出ターミナル、あるいは製油所などを結んで設けられる。パイプラインの破壊は、国家経済を左右することにもなりかねないため、戦争や内乱、紛争、さらにはテロのターゲットになりやすい

世間を騒がすイスラム過激派のニュースを見ていると、「イスラム教とは物騒な宗教だ」というイメージを抱いてしまうのではないだろうか。ところが、そうした思い込みこそ、この宗教の本質から逸脱してしまう要因なのだ。

彼らの挨拶は「こんにちは」ではない。「あなたに平和がありますように」という意味の「アッサラームアライクム」だ。その返答も「あなたにも平和がありますように」という意味合いの「ワアライクムッサラーム」であり、お互いの平和を祈り合うことが根底にある。これはイスラム教徒同士だけではなく、誰と挨拶を交わすときでも使っている。

彼らがいかに平和的な思想を持っているかを念頭に、日常の生活習慣に触れてみたい。

イスラム教において大切にされることに「礼拝」がある。『サラート』と呼ばれており、五行のうちの1つでもある。1日のうち、決められた5つの時間帯すべて、カーバ神殿に向かって祈りを捧げるのだ。礼拝は現世だけでなく、死後の世界でも栄えるためにしなければならないこととされている。

また、イスラム教徒には断食がある。これは「ラマダン月」と呼ばれ、ヒジュラ暦の9月の新月を確認した日から始まり、翌月の新月が現れるまで続けられる。29日もしくは30日間に渡って行なわれ、日の出より、約80分ほど早い時間から日没までの間、タバコを含む飲食物を禁じている。その間は性行為も厳禁だ。飢えと渇きを体験することで、実際にそうした状況で苦しむほかのイスラム教徒との連帯感を生み出すとされる。断食月には寄附を行ない、日没後には食事をともにすることになっている。

ほかにも飲食物については、「ハラル」と「ハラム」にて定義づけられたものがあつたり、毎週金曜日を「宗教的な祝日」と定め、その日の正午に集団礼拝を行なつたりと、〈無宗教〉ともいわれる日本人にとって馴染みの薄い習慣や習わしが多く存在する。

第5章

世界経済を変える!?「イスラム金融」とマーケット

【ココがわからない!!】「ハラルマーケット」が、世界中から注目されるのは、なぜ？

近年、世界中が熱い視線を向ける「ハラルマーケット」をご存じでしょうか？

アラビア語で「許されたもの」「合法的なもの」という意味を持つ「ハラル(①)」は、「シャリーア」のなかで許されている合法的なものを指しています。

なかでも、わかりやすいのは食べ物に関することです。一般に「ハラル＝ムスリム（イスラム教徒）が食べられる物」という解釈で広がっていますが、たとえば、イスラム教では豚肉を食べることは禁止です。

ムハンマドの時代に、アラビア半島全域で豚の病気が蔓延し、多くの死者を出したことから、豚肉を食すると病気になる恐れがあるといった考えが、理由の一つだといわれています。

牛肉や羊肉、鶏肉など、豚肉以外に関しては食べることは許されていますが、これらも決められた方法で処理しなければならないようです。

ほかにも、アルコール類を飲むことはもちろん、料理の調味料の使い方まで厳しく制限されています。

◆「イスラム市場」は世界でもっとも魅力ある市場

ハラルが世界的な注目を集めている理由は、ムスリムたちが支える巨大市場の存在です。かつて中国は、世界的な市場として注目され、さまざまな資本が入り込んだことで急速に経済発展を遂げました。膨大な人口を背景にした大規模な市場が存在していたからです。

現在ムスリムの人口は、世界の全人口の約4分の1を占め、今なお増加の一途をたどっています。ゆえに「イスラム市場」といえる巨大な市場も今後さらに拡大していくことでしょう。そこにイスラム教の戒律に準じた商品やサービスを提供できれば、大きな利益を生み出す可能性は高いといえます。

現に、2030年には、ハラルマーケットの規模が「1000兆円まで膨らむ」と踏んでいる研究者もいます。まさに今、「世界でもっとも魅力ある市場」といっても過言ではなく、ゆえに各国の企業が注視しているのです。

では、巨大なハラルマーケットに対して、どのようなアプローチがなされているかというところ……現在は、食品関連がメインだと聞きます。

シャリーアの規定に準じて加工・生産した食料品が、ムスリムに向けて販売されているのですが、ただ食料品は一見ただけで、本当にシャリーアに則って加工・生産されたのかがわかりにくい側面があります。

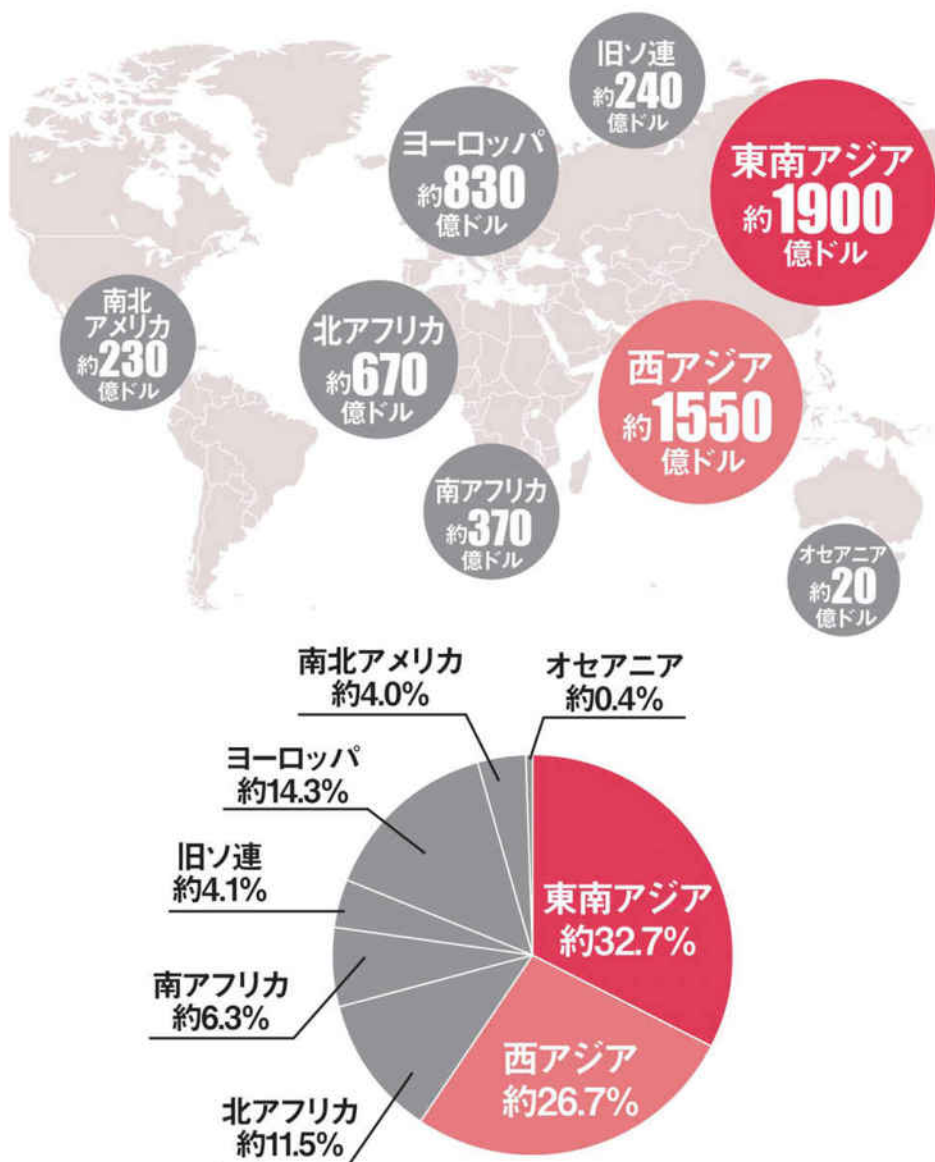
そこで各国の企業は、イスラム教団に認定を依頼し、認可された商品に「ハラル認証(②)」というくお墨つきをもらったうえで、流通・販売を行なっているケースが大多数を占めています。

アジア圏は、ムスリムが一番多い地域にあたるため、ハラルマーケットは日本にも非常に魅力的な市場です。参入に遅れをとった日本もチャンス獲得に向けて試行錯誤していますが、その道のりは平坦とはいえません。

イスラム教への認識度が未だ低い日本企業は、まずは宗教的戒律を理解することが急がれます。加えて、ハラルの基準は明確ではなく、判断は指導者にゆだねられているため、製造工程や技術面など、さまざまな点で臨機応変に対応する柔軟な姿勢も求められるでしょう。

アジアの「イスラム市場」は世界の7割を占める!!

世界中のムスリム食市場（ハラル市場）は、約5800億ドル（約52兆円）。東南アジアは約3分の1を占める。西アジアとの合計では約3450億ドル（約31兆円）で、これは世界の約7割にあたる



①ハラル

「シャリーア」において許されたことを指す。ほかに禁止されていることを指す「ハラム」。どちらかあやしいことを指す「シュブハ」という言葉もある。ハラムは「ハーレム」という言葉の語源ともいわれる

②ハラル認証

現状では、世界各国の認証機関から発行されている。世界共通の認証機関が不在なので、ムスリムが多い東南アジアのマレーシアなどでは、その立ちあげに注力しているのが実情。食料品だけでなく、宿泊施設や製造業などへの認証も行なわれている

【ココがわからない!!】日本企業の多くが、市場参入をためらう本当の理由は？

日本でも、「ハラルマーケット」への参入をすでに果たしている企業、あるいは参入をこれから目指している企業は増えてきています。

一例として、食品関連では「キュービー」や「味の素」がいち早く参入を果たしました。「ポッカ」「カプリチョーザ」なども、マレーシアの政府公式の認証機関である「JAKIM」から「ハラル認証」を受けています。

そのほかにも、熊本県の「**ゼンカイミート(①)**」は、日本初となる牛肉のハラル認証を受け、インドネシアに輸出を開始しました。

このように日本でも参入する企業が増えていますが、まだその動きは活発といえるほどではありません。**2020年**に開催される東京オリンピックが、ハラルマーケット参入への起爆剤になり得るという見解もありますが、現時点では、日本企業の動向は不透明なのが実情です。

◆「ハラル認証」の取得に立ちはだかるハードル

目の前に巨大な市場があるにもかかわらず、日本企業がなかなか積極的に動かないのには、「ハラル認証のハードルが高い」ことが起因しています。

たとえば、前出のJAKIMのハラル認証は、現在**49**カ国で認められていますが、マレーシアに生産工場を持たなければ取得できません。つまり国によって認証取得の条件があり、その条件をクリアする必要があるのです。

それほかにも、イスラム圏の人たちの「シャリーア」に基づく戒律や習慣をきちんと勉強しておくことは必須でしょう。

なお、認証を取得したあとも厳しい管理が行なわれます。

これほどの高いハードルを仮に超えたとして、「果たして本当に自社製品が売れるのか」と懸念し、参入を躊躇する企業が多いのです。

消極的な日本企業とは対照的に、積極的にハラルマーケットへの参入に取り組んでいる自治体があります。**京都市(②)**です。産・学・官がスクラムを組み、観光関連の業種を中心に、東南アジアのいくつかの国のビザ発給要件が緩和された**2013**年頃から、イスラム圏の人たちに照準を合わせた取り組みを本格化しました。京都市は「**インバウンド(③)**」にも積極的に取り組んでいます。

たとえば、ムスリム（イスラム教徒）のために専用ホームページを立ちあげ、ハラル対応をしているホテルやレストランだけでなく、モスクの所在地までも紹介したのです。その結果、予想以上の反響があり、サイトのオープンからわずか3カ月で3万ヒットに達したと聞きます。

さらに、ある老舗ホテルでは、ハラル対応をした懐石料理を提供したり、ムスリムの女性を意識した「**ヒジャブ(④)**」を伝統技術で染色し、オリジナル商品として販売したりしています。

異国の文化や風習、習慣をきちんと理解することは難しいもの。ましてや宗教が違えばなおさらですが、自治体をはじめとする前述したような新たな取り組みは、日本に訪れたムスリムたちと、私たち日本人が友好な関係を築くうえで大切な「おもてなし」となることは間違いありません。

なお、シャリーアに則った食事やサービスを取り扱うなど、ムスリムのための観光事業を「ハラルツーリズム」と呼んでいます。

京都市以外でも、大阪や首都圏などでこうした新たな観光事業への取り組みを始める動きがあるようです。

「ハラル」と「ハラム」の違い

イスラム法において

ハラル=合法的なもの

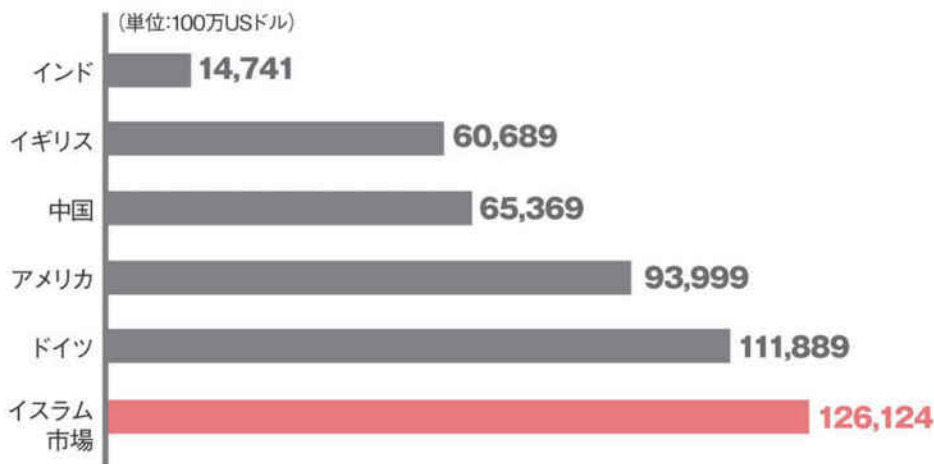
- ハラルであるか、ハラムであるかを決めるのは「アッラー」のみ
- 清浄、安全であること。一般的な理解としてよいものはハラル

※ハラル、もしくはハラムなのかが不明なものは、ハラムと考えるほうが無難

ハラム=非合法的なもの

- 賭博、高利貸し、利息、婚前交渉、同性愛、姦通、男性が女性の格好をすることやその逆
- 男性がシルクや金の装飾品を身につけることなど
- ハラムなものをハラルと偽造する行為
- ハラムな行為をする人や、それらを助成すること

国際観光消費額の上位国と「イスラム市場」(2011年)



①ゼンカイミート

熊本県球磨郡錦町所在の食肉加工処理及び販売を手掛ける会社。錦町の隣りに位置する人吉市でも、「ハラルマーケット」への参入を積極的に働きかけている

②京都市

京都の文化交流発信や海外からのさらなる観光客増加を目的に、**2011年**に発足した「（公財）京都文化交流コンベンションビューロー」が拠点となっている。産・学・官の意見や情報交換だけにとどまらず、イスラム圏の留学生へのヒアリングも積極的に行なっている

③インバウンド

「外国人旅行者を自国へ誘致すること」を意味する。ココではイスラム圏から日本を訪れる観光客を指しており、ムスリムを誘致すること

④ヒジャブ

「覆うもの」を意味する言葉で、「貞淑」「道徳」の意味もあるが、一般には、頭と体を覆う布を指す。イスラム圏の大半では、女性の一般的な装束だが、政教分離を定めるフランスなどでは、公共の場での着用は禁じられている。本来は女性の美を隠すためのものだが、レースをあしらったヒジャブなどをファッショナブルに着こなすムスリム女性も増えている

【ココがわからない!!】「イスラム金融」には、どんな特徴があるの？ 何が違うの？

イスラム圏には、独自の発展を遂げている経済システムも存在します。

それが「**イスラム金融**（①）」と呼ばれるもので、イスラム教の教義に基づいた金融取引を指します。

ただし、『コーラン』において「利息」を受け取ることが禁止されているために、通常の金融取引では当たり前の「金利」の概念がありません。

また、「シャリーア」で禁じられている豚肉やアルコール等を取り扱う事業をはじめ、武器やギャンブル、ポルノ等の反宗教的なものに関与する企業、もしくは個人には投資や融資ができないことも特徴の一つです。

「金利の概念がないのに、どうやって利益を得るのか」――。

きっと多くの人が、このような疑問を抱くことでしょう。

イスラム教の教えでは、私たちが知っている一般的な金融取引は禁止されています。ゆえに〈実物商品〉が存在しないお金だけの取引はできません。

しかし、自動車や住宅等のきちんと形がある商品を仲介させた売買取引で利益を得たり、事業に出資して配当を得ることは認められています。

なお、イスラム金融における取引形態は、以下の三つが挙げられます。

一つ目は売買同時契約である「バイ・アル・イナ」、二つ目は商品売買契約の「ムラバハ」、三つ目は信託金融の「ムダラバ」です。

なかでも、もっともメジャーなのが、二つ目のムラバハ（商品売買契約）で、具体的に解説しておきましょう（次図参照）。

たとえば、A氏が200万円の自動車を購入することを考えたします。

A氏に手持ちのお金がない場合は、金融機関から融資を受けて、販売会社から購入することになります。返済時には、A氏は自動車の購入時に借りた200万円に利息をプラスして、金融機関に支払うことになるわけです。

通常ならば、このような流れの取引になりますが、……イスラム金融では、金融機関が購入者（A氏）に直接融資をすることはできません。

では、どうするのか。まず金融機関は、販売会社から自動車を一度購入したうえで、A氏に車代と手数料を上乗せして再販売をします。つまりA氏は販売会社ではなく、金融機関に車代と手数料を支払うことになるわけです。

ちょっと特殊な金融取引の「イスラム金融」

例:200万円の自動車をA氏が購入する場合

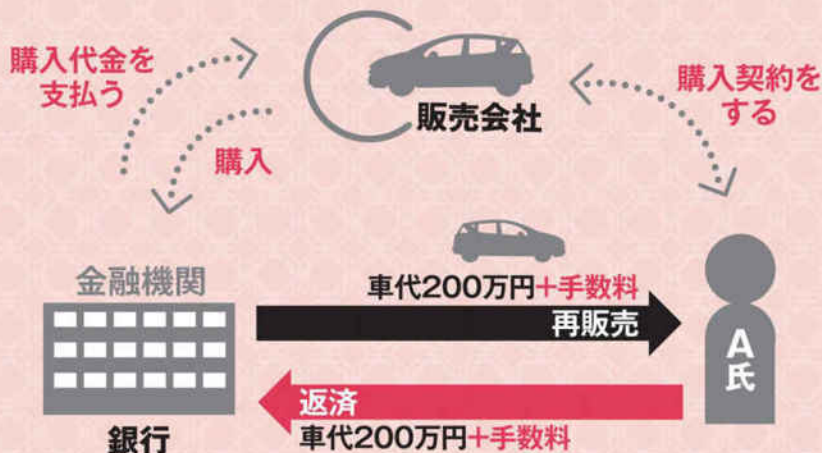
一般的な金融取引

- 銀行から融資を受けて販売会社から直接購入
- 銀行へ「融資額+利息」を返済



イスラム金融 例:「ムラバハ」による取引

- 銀行が販売会社から代理購入
- 銀行へ「車代+手数料」を支払う



◆「イスラム金融」が拡大する背景には何がある？

イスラム金融は、急速に、且つ順調に成長し続けています。

その市場規模に関して、国際的な公式統計はありませんが、民間の金融機関の推計等によると、約1兆ドルに及ぶといわれています。また、年間15%程度の伸び率で拡大しているそうです。

こうした背景には、**オイルマネー**（②）による投資需要の拡大が挙げられます。アメリカ同時多発テロ事件のあと、中東の投資家による米国資産を回避する動きがあったようですし、債券やプロジェクト・ファイナンスなど、ホールセール分野における取引の拡大も要因でしょう。

日本企業も徐々に取り組みを始めていますが、この金融取引は、通常の取引とは異なり、宗教的な側面が強いことは否めません。ゆえに西欧的な観点で取引をするのではなく、イスラム教の教義やムスリム（イスラム教徒）の存在を尊重しつつ、イスラム金融に接することが肝要です。

①イスラム金融

主にイスラム教の国が集まる北アフリカ、レバント（地中海東部沿岸）、GCC（アラビア半島と周辺）などの地域における経済の中核を担っている

②オイルマネー

主に「OPEC（石油輸出国機構）」の加盟国の石油輸出による経常黒字で蓄積された資本を指す。1973年のオイルショック後、石油を高値で輸出することが可能となった石油輸出国には、多額のドルが流入するようになる。オイルマネーの動向は、国際金融界に多大なる影響を及ぼしている

【ココがわからない!!】〈脱原発〉が叫ばれている日本。中東では推進……ということだろうか？

サウジアラビアやアラブ首長国連邦（UAE）など、イスラム圏の産油国は、石油資源によって急速に経済発展を遂げましたが、一方では、原子力の導入を積極的に推し進める動きもあるのです。

なかでも、世界有数の産油国であるサウジアラビアは、**2032年**までに原子力発電所（以降：原発）を大量に新設する計画を立てています。

石油輸出国にとって、石油は自国で消費するよりも、他国に販売することで外貨を獲得できる重要な資産。ゆえに自国では、代替エネルギーによって経済を補ったほうが得策であるといった方針から、原子力の導入を推し進めているようです。また、**石油はいずれ枯渇（①）**してしまう天然資源。石油がなくなってしまうと困るのは明白です。その危機感から原子力を導入して、エネルギー資源を確保したいという思惑もあります。

◆急速な経済発展の裏で抱える大きな問題

じつは産油国にとって、もう一つ深刻な問題があります。

それが経済発展とともに増加し続ける人口にともない、自国のエネルギー消費が拡大していることです。中東地域は、世界的な油田地帯であり、各国の電力供給のほとんどは石油を燃料とした火力発電によってまかなっています。ところが……急激な人口増加のために電力需要が増え続けているのです。

たとえば、サウジアラビアでは、年約2%のペースで人口が増加しており、このままいくと、**2030年頃**には現在の約3倍にまで電力需要が増加すると見込まれています。アラブ首長国連邦（UAE）もほぼ同じ状況で、すでに年約9%の勢いで電力需要が上昇しているようです。

こうした実情のなか、増え続ける電力需要への対応として、原子力の導入を積極的に推し進める動きがあります。

なお現在、中東及び東南アジアの約**60カ国**で原子力の導入が計画されているようです。中東だけではなく、東南アジアのインドネシアなどといった産油国では脱石油の動きが活発化しているのです。

もちろん、**自然エネルギーの導入（②）**も進めていますが、安定供給への不安や、技術的な問題、さらにはコスト面も高つくことから、原子力に俄然注目が集まっています。

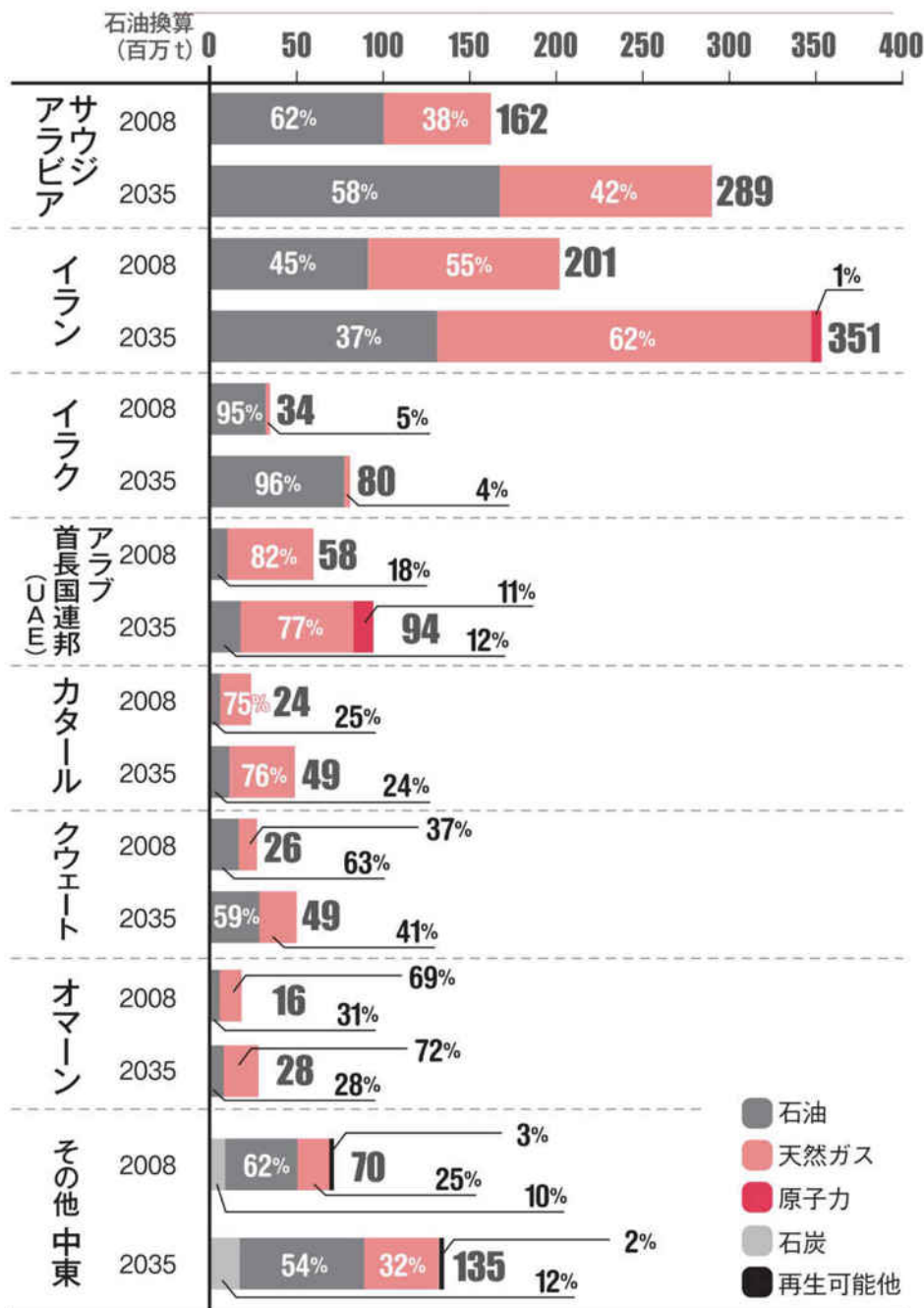
産油国が原子力の導入を積極的に推し進めているなかで、原発の技術を産油国に売り込もうとする動きも活発になっています。

アジア圏では、韓国がそのイニシアチブを握っているようです。日本の関連企業も売り込みをしています。先の東日本大震災における福島第一原発事故が災いして、あまり高い評価は得られていません。そのため、韓国に大きく遅れをとっています。ほかの技術における信頼が高いだけに、原発関連企業にとっては大きな〈痛み〉といえるでしょう。

オイルマネーを背景に巨大な資金力を手に入れた産油国。それを武器に世界各国の経済を裏で牛耳るまでにのしあがってききましたが、いずれその武器が消滅する窮地に陥っているのは、事実です。

産油国にとって原子力の導入は、その窮地から脱して、再び世界各国と渡り合うための新たな武器といえるかもしれません。

主なエネルギーの消費量を国別で検証!!



①石油はいずれ枯渇

石油や天然ガスは、今後50年から60年ほどで枯渇すると推定されている。日本ではほとんど一般で使用されなくなった石炭も、おおむね120年前後で尽きてしまうと推定されている

②自然エネルギーの導入

アラブ首長国連邦（U A E）が進めている化石燃料を使わないゼロカーボン都市である「マスダールシティ」などが有名。中東でもっともエネルギー効率の高いビル、大規模な太陽熱発電所など、進捗度合いは遅いものの、少しずつ計画は実現化している

【ココがわからない!!】この天然ガスによって、エネルギー事情が変わった!?

産油国のみならず、全世界にとって目下の悩みの種は、いずれ枯渇する石油の問題です。その打開策として原子力の導入や代替エネルギーへの転換を推し進めていることは、すでにお話ししました。

今、新たな資源の存在によって、世界のエネルギー事情が激変しています。その新たな資源が「**シェールガス** (①)」です。

けつがん

シェールとは、頁岩のことを指します。これは数億数千年前の植物の堆積物に圧力がかかったことで、黒くなった泥岩です。地下数千メートルの深いところに分布しており、頁岩でできた地層を「シェール層」と呼びます。

シェールガスは、シェール層の割れ目に閉じ込められた天然ガス。以前からその存在は知られていたものの、従来の技術では採掘することができず、長い間放置されていました。それが2000年頃にアメリカの中堅企業によって採掘技術が開発されたことで、まったく間に生産量が増えたのです。

ある民間企業の調査によると、石油の可採年数は約55年、在来型の天然ガスは約60年と推測しているのに対し、シェールガスは100年以上と推測されているそうです。つまりは今後数百年は、シェールガスで世界のエネルギー需要がまかなえる可能性が高いといえます。

そして、アメリカの広大な大地の地底深くには、シェールガスという資源が大量に眠っているのです。

アメリカは、誰もが知る世界一の経済大国。また、世界でもトップクラスの石油消費国でもあります。その大国が最大のエネルギー生産国になれば、世界のエネルギー市場のパワーバランスも大きく変わることでしょう。

このインパクトの大きさは、まさにエネルギー市場の「革命」と呼ぶに値することから、「シェールガス革命」と呼ばれているのです。

現にアメリカでは、ここ数年、石油の輸入量は減少しています。これまで消費量の60%という輸入量で推移していたのが、近年では45%になっています。

さらに、2025年までに30%を目指す方針が、連邦議会で採択されました。

◆アメリカの関心薄に中東が打った〈一手〉とは？

中東に何か問題が起こると、必ず首を突っ込んできたアメリカ。

ところが、自国で世界のエネルギーをまかなえるだけの資源が見つかり、輸入先としての中東への関心が薄れていきます。いわゆる「**中東離れ** (②)」です。

中東地域でも天然ガスはありましたが、アメリカは自給できるだけの大量の資源を持ったことで、もう中東に頼る必要性はなくなっていました。

中東諸国は困り果てます。何だかんだいっても、アメリカは大切な顧客でしたし、その恩恵で国内の経済もうるおっていたからです。

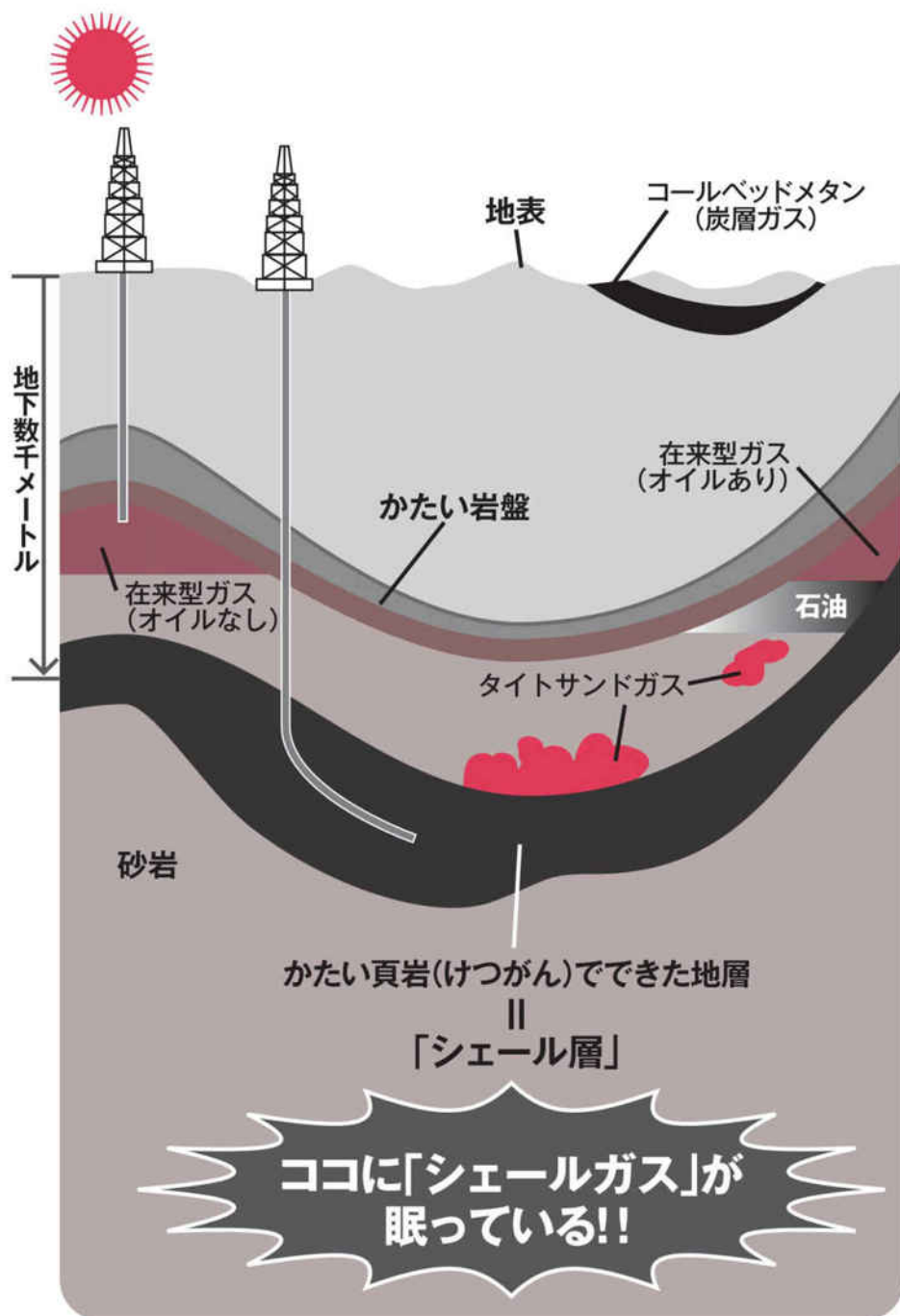
中東諸国は、新規顧客を見つけるのに奔走します。そして狙いをつけたのは欧州でした。欧州は、ウクライナ経由でロシアから天然ガスを安値で購入していましたが、ロシアとウクライナの関係悪化で購入が困難を極めていたのです。

そこにフツとわいた中東からの話。欧州は喜んで飛びついたのでした。

このように、アメリカが世界最大のエネルギー生産国になったことで、中東や欧州といったさまざまな地域や国々が影響を受けています。

ちなみに、シェールガス革命をアメリカ国民のすべてが賛同しているわけではありません。現在取り入れているシェールガスの採掘方法が、環境に悪影響を及ぼすことから、採掘候補地の住民による激しい**反対運動** (③) が起きている。

石油と「シェールガス」の埋蔵イメージ図



①シェールガス

地下**2000**メートル以上の深いところに分布する頁岩（けつがん）でできた地層の「シェール層」から採れる天然ガス。液化天然ガスに換算すると、**1664**億トンに匹敵する**208**兆立方メートルのシェールガスが回収可能量だといわれている。技術の進展などにより、この数字が上方修正される可能性は高い

②中東離れ

「シェールガス」によって、アメリカは石油を輸入していた中東への関心度が薄くなっている。アメリカだけではなく、もともと多くの石油を輸入しているカナダも同様の姿勢を取り始めている

③反対運動

掘削に用いられる化学物質や天然ガスなどによる地下水の汚染、大量の水を使うことによる地域の水不足などから、採掘候補地で反対を掲げる運動が活発化している。石油より二酸化炭素排出量が少ないといわれているものの、温暖化への懸念は強い

【参考文献・参考資料】

オイルマネーの力 世界経済をリードするイスラム金融の真実／石田和靖・著／アスキー・メディアワークス
コーラン（上）（中）（下）／井筒俊彦・訳／岩波書店

中東から世界が見える イラク戦争から「アラブの春」へ／酒井啓子・著／岩波書店

「アラブの心臓」に何が起きているのか 現代中東の実像／青山弘之・編／岩波書店

中東現代史／藤村 信・著／岩波書店

これならわかるキリスト教とイスラム教の歴史Q & A／浜林正夫・著／大月書店

知らないと恥をかく世界の大問題 学べる図解版 第4弾 池上彰が読む「イスラム」世界／池上 彰・著／KADOKAWA

世界を席卷するイスラム金融／糠谷英輝・著／かんき出版

〈中東〉の考え方／酒井啓子・著／講談社

今知りたい世界四大宗教の常識／白取春彦・著／講談社

イスラムと近代化 共和国トルコの苦闘／新井政美・著／講談社

ハラルマーケット最前線／佐々木良昭・著／実業之日本社

ジャスミンの残り香「アラブの春」が変えたもの／田原 牧・著／集英社

アフガニスタン敗れざる魂 マスードが命を賭けた国／長倉洋海・著／新潮社

中東 逃走の百年史／宮田 律・著／新潮社

アラブ・イスラム・中東用語辞典／松岡信宏・著／成甲書房

ハラルマーケットがよくわかる本 イスラム巨大市場を切り開くパスポート／ハラルマーケット・チャレンジ・プロジェクト・著／総合法令出版

イスラム基本練習帳／山内昌之、大川玲子・監／造事務所・編著／大和書房

本当に「イスラム国」は日本にテロを起こすのか？／別冊宝島編集部・編／宝島社

中東イスラーム民族史 競合するアラブ、イラン、トルコ／宮田 律・著／中央公論新社

イスラエルとパレスチナ 和平への接点をさぐる／立山良司・著／中央公論新社

イスラーム生誕／井筒俊彦・著／中央公論新社

イスラーム思想史／井筒俊彦・著／中央公論新社

私のイラン二十五年 モサディクからホメイニまで／柿崎 崇・著／東京新聞出版局

シェールガス革命とは何か／伊原 賢・著／東洋経済新報社

シェールガス革命が日本に突き付ける脅威／野神隆之・著／日刊工業新聞社

学校で教えない教科書 面白いほどよくわかるイスラーム 教義・思想から歴史まで、すべてを読み解く／塩尻和子・監／青柳かおる・著／日本文芸社

イスラーム世界の基礎知識 今知りたい94章／ジョン・L.エスポジト・著／山内昌之・監訳／原書房

改訂版 イスラム世界のこれが常識 政治・宗教・民族 55の鍵／岡倉徹志・著／PHP研究所

イスラムの神秘主義 スーフィズム入門／R.A.Nicholson・著／中村廣治郎・訳／平凡社

獅子の大地／長倉洋海・著／平凡社

Massoud: An Intimate Portrait of the Legendary Afghan Leader／Marcela Grad・著／Webster University Press

【Pew Research Center】／<http://www.pewresearch.org/>

中東問題研究会（ちゅうとうもんだいけんきゅうかい）

グローバルな視点から、中東地域、ならびに周辺国で起こっているさまざまな問題や紛争等を分析・研究し、正しい情報を発信することをモットーに掲げている。大学教授、大学院生、研究者、学者、会社経営者、ジャーナリスト、編集者など、多種多様な分野で活躍するメンバーで構成された研究会。

本商品に関する著作権その他一切の権利は、株式会社すばる舎ならびにコンテンツの権利者に帰属するものとします。

お客さまは、次の行為が著作権法等の法令に違反する行為であることを理解し、株式会社すばる舎または権利者の承諾なく行わないものとします。

- 1 コンテンツの複製物を作成し、当該複製物の全部または一部を公衆送信、公衆送信化または第三者に配布すること。
- 2 コンテンツを改変、改ざんすること。

なぜ? どうして?? 世界を騒がす仰天ニュース「イスラム」ココがわからない!!

発行日 2015年7月27日

著 者 中東問題研究会

発行者 徳留慶太郎

発行所 株式会社すばる舎

〒170-0013

東京都豊島区東池袋3-9-7 東池袋織本ビル

T E L 03-3981-8651

F A X 03-3981-8638

<http://www.subarusya.jp/>

制 作 株式会社すばる舎リンクージ

<http://www.subarusya-linkage.jp/>

(C) Chutomondaikenkyukai

※本商品は、株式会社すばる舎発行の書籍『なぜ? どうして?? 世界を騒がす仰天ニュース「イスラム」ココがわからない!!』に基づいて制作しました。